

## 解題

## 東人詩話

## 二卷

朝鮮 徐居正著

徐居正、字は剛中、四佳亭と號す、達城(慶尙北道)の人、世宗甲子二十年に登科し、世祖丁丑二年に重試し、丙戌十一年に拔英、登俊の兩試に登第し、議政府左參贊となり、達城君に封ぜられ、文衡を典り、卒して文忠と諡せらる。東國通鑑五十六卷、外紀一卷、東文選五十五卷、四佳亭集十五卷等を著せり、山本北山の聯珠詩格序に据るに、聯珠詩格の増注を作りしは此の人なり、(本叢書第二卷、孝經樓詩話附錄參照) 増補文獻備考二百四十六卷文藝考を按ずるに、徐居正の撰する所の大東詩話一卷を載するも、東人詩話を載せず、是れ或は異名同書ならんか。

此書の朝鮮にて初めて翻刻せられしは、明の成化十年の秋なり、(姜希孟の序に据る) 即ち朝鮮の成宗の五年に當れり、其の後も李必榮が重刊せしは、崇禎十二年なり、(李必榮の識語に据る) 即ち朝鮮仁祖十七年に當れり、我邦にて之を上梓せしは、明暦元年にして、明の永曆九年に當れり、(朝鮮の孝宗の六年なり) 李必榮

の重刊の歳を距ること十六年の後なり、李必榮の讖語に、原本の差舛の處を頗抹改を加ふと言へるも、今李氏本を以て本邦の版本と對校するに、多少文字の異同はあれど、抹改といふべき處あるを見ず、今本邦の版本を底本とし、李氏本の異同を欄外に掲げ、且つ本文の字傍に黒圈を附したり、李氏の讖語は、最後に附載せり。

此書は主として高麗の詩藻を品隲したるものにして、時には唐人の作に及び、議論平穩にして、絶えて矯激に流れず、朝鮮の詩話中に在つて白眉と稱すべきものとす。

## 東人詩話序

詩有六義，苟能緣文究義，庶得作者之意。詩奚嫉於評，而評之不已，何歟？蓋詩不可捨評，而祛疵醫不可棄方，而療疾自雅亡，而騷騷而古風古風，而律衆體繁，興而評者亦多，如總龜集、茗溪叢話、菊莊玉屑等編，義論精嚴，律格備具，實詩家之良方也。吾東方詩學大盛，作者往往自成一家，備全衆體，而評者絕無聞焉。及益齋先生櫟翁稗說、李大諫破閑等編作，而東方詩學精粹，得有所考。厥後百餘年間，莫有繼者，豈非詩學之一大慨也。成化午秋，吾同年達城徐侯剛中，袖所著東人詩話兩卷來，示徵余言爲序，且請增評話景醇於詩學。杜撰也，野狐也，安敢有所論說？今觀是編，上自新羅文昌，下逮本朝諸儒，俯仰數百載，搜別靡遺，摘精會粹，參以論議，敷闡幽蹟，如淬古劍，光彩益增，不徒取其文詞之美，隱然以維持世教爲本，吁盛矣。用

朝鮮本午  
上有甲字

心之勤也、竊論之、大雅蒸民之詩曰、天生蒸民、有物有則、民之秉彝、好是懿德、孔子曰、爲此詩者、其知道乎、故有物必有、則民之秉彝也、故好是懿德、魯頌駉篇之辭曰、思無邪、思馬斯徂、孔子曰、詩三百、一言蔽之、曰、思無邪、夫兩詩之旨、各有所在、而微吾夫子發揮之如此、則後世安知民彝物則之固有、而其秉執之常性、足以好此懿德也哉、又安知懲創感發、同歸無邪、而唯此一言、足以盡三百篇之意、歟、詩人所未能暢達、而夫子發之、此詩話之所以權輿也、剛中氏是編之作、上不乖夫子之意、下以做諸家之範、能以已志、迎取作者之意、有所發明、而不拂乎義理之源精微之奧、然則其有補於詞學、豈淺淺哉、若夫評話、則今適南歸、故鄉幸而有得於鄉大夫文獻之間、當折簡飛報、鍼砭而增續之可也、是歲秋八月上澣、晉山姜希孟景醇序。

## 東人詩話序

予嘗謂知詩之惡然後可以得詩之正得詩之正然後可與言詩之道是故博雅君子不能無評品之權衡雌黃之點化四佳相公以詩學登壇爲一代之所宗間取古今詞人墨客之所述有全篇之粹然者有一字一句而警策者與夫意雖正而辭或踏駁言雖切而指或賤俚其間相去不能以寸而公則議論之精細於豪釐陞黜之威嚴於袞鉞且公之博聞強記過人遠甚不唯先賢本集與夫傳記所載而見聞所及無間俚雅隨卽舉筆雜以閑言調笑之說讀之愈多愈覺其新而不知倦比之於規規撥拾腐紙唇吻於糟粕而無所發明者爲有間矣於是觀公之貶駁則必有以知詩道之不可如是見公之所褒美者則必有以知詩道之決不可不如是卽所謂不加繩墨而方圓自正者也一日造公門公不之靳出示予予甚珍之以謂雖

朝鮮本訛  
上有所字

古之詩林玉屑亦無過之而益知公文章之美予於是戲之曰予有一語公能駁之如古人乎公曰何謂也曰公鑿池種蓮作堂其上而名曰亭亭亭若能對亭亭亭則已若不能對如速改公曰亭名何與於詩三百篇中無三字詩其可詩而文及亭名乎予亦不能強公也成化紀元三十一年蒼龍乙未暮春下浣乖崖老人金守溫文良序

朝辭本三  
乙未是十  
年則也

# 東人詩話卷上

徐居正 剛 中 著

凡帝王文章氣象、必有大異於人者、宋太祖微時醉臥田間、覺日出、有句云、未離海底千山暗、纔到天中萬國明、我太祖潛邸詩、引手攀蘿上碧峯、一菴高臥白雲中、若將眼界爲吾土、楚越江南豈不容、其弘量大度、不可以言語形容。

崔文昌侯致遠、入唐登第、以文章著名、題潤州慈和寺詩、有畫角聲中朝暮浪、青山影裏古今人之句、後雞林價客入唐購詩、有以此句書示者、朴學士仁範題涇州龍朔寺詩、燈

凡帝王の文章は、氣象は必ず大に人に異なる者あり、宋の太祖の微なりし時、醉ふて田間に臥す、覺るときに日出づ、句あり云と、未だ海底を離れず、千山暗し、纔に天中に到れば萬國明なりと、我が太祖の潛邸の詩に、手を引き蘿を攀ちて碧峯に上り、一菴高臥す白雲の中、若し眼界を將て吾が土と爲さば、楚越江南豈に容れざらんやと、其の弘量大度は言語を以て形容す可らず。

崔文昌侯致遠は、入唐して第に登り、文章を以て名を著はす、潤州慈和寺に題する詩に、畫角聲中朝暮の浪、青山影裏古今の人の句あり、後に雞林の價客入唐して詩を購ふに、此の句を以て書して示す者あり、朴學士仁範の、涇州龍朔寺に題する詩に、燈は燈光を攝して鳥道明かに

朝鮮本價  
竹貫

459

東人詩話卷上

據、螢光、明鳥道、梯回、虹影、落岩、扇、朴參政、黃亮題、泗州龜山寺詩、有塔影倒江、鱸浪底、磬聲、搖月、落雲、間門前、客棹、洪波急、竹下僧棋、白日閑之句、方輿勝覽皆載之、吾東人以詩鳴於中國、自三君子始、文章之足、以華國如此。

唐時高麗使過海、有詩云、水鳥浮還沒、山雲斷復連、賈浪仙詐爲梢人、聯下句云、棹穿波底月、船壓水中天、麗使佳嘆、世傳麗使爲崔文昌、余考文昌入唐、爲高駢書記、不與浪仙同時、或者以顧學士送文昌詩、有乘船渡海之語、有此誤耳、洪武年間、李陶隱、崇仁、奉使金陵、揚州舟中一聯云、落照浮雲外、殘山大野頭、篙工慙背嘆曰、此措大可、與言詩、卽援

梯は虹影を回して巖扇に落つ」と、朴參政黃亮の泗州龜山寺に題する詩に、塔影、江を倒にして浪底に翻り、磬聲、月を搖かして雲間に落つ、門前の客棹、洪波急に、竹下の僧棋、白日閑なり」といふ句あり、方輿勝覽に皆な之を載す、吾が東人の詩を以て中國に鳴ること、三君子より始る、文章の以て國を華やかにすること此の如し。

唐の時に高麗の使、海を過ぎて詩あり、よく「水鳥浮、かんで還た沒し、山雲断えて復た連る」と、賈浪仙詐りて梢人と爲り、下句を聯ねて云く、棹は穿つ波底の月、船は壓す水中の天」と、麗使佳嘆す、世に傳へて麗使を崔文昌と爲す、余考ふるに文昌、唐して高駢の書記となる、浪仙と時を同うせず、或るいは、顧學士の文昌を送る詩に、船に乘り海を渡るの語あるを以て、此の誤あるのみ、洪武年間、李陶隱、崇仁、使を金陵に奉ずるとき、揚州舟中の一聯に云ふ、落照浮雲の外、殘山大師の頭」と、篙工背を撫でて嘆じて曰く、此の措大與に詩を言ふ可しと、卽ち筆を援て之を足す、篙工の如きは、又た馮くんぞ浪仙が輩に

筆足之、如篙工者、又焉知非浪仙輩耶、恨不得傳其詩耳。

金文烈富軾、鄭諫議知常、以詩齊名一時、文烈結綺宮詩、堯階三尺卑、千載稱其德、秦城萬里長、二世失其國、隋皇何不鑑、土木竭人力、燈夕詩、華蓋正高天、北極玉爐相對殿中央、君王恭默疎聲色、弟子休誇百寶粧、詞意嚴正典實、真有德者之言也、鄭詩語韻清華、句格豪逸、深得晚唐法、尤長於拗體、如石頭松老一片月、天末雲低千點山、地應碧落不多遠、僧與白雲相對閑、綠楊閉戶八九屋、明月捲簾三兩人、等句、出口驚人、膾炙當世、可以一洗空群矣、二家氣象、不俾。

拗體者、唐律之再變、古今作者不多、其法遇

非らざるを知らんや、恨らくは其の詩を傳ふるを得ざるのみ。

金文烈富軾、鄭諫議知常は、詩を以て名を一時に齊ふす、文烈の結綺宮の詩に「堯階三尺卑し、千載其の徳を稱す、秦城萬里長し、二世其の國を失ふ、隋皇何ぞ鑑みざる、土木人力を竭す」と、燈夕の詩に「華蓋正しく高し、天の北極、玉爐、對す殿の中央、君王恭默して聲色を疎んす、弟子誇ることを休めよ、百寶の粧」と、詞意嚴正典實にして、眞に有德者の言なり、鄭の詩語韻清華、句格豪逸にして、深く晚唐の法を得たり、尤も拗體に長ず、石頭の松は老ふ一片の月、天末の雲は低る千點の山地は應に碧落と多く遠からざるべし、僧は白雲と相對して閑なり、綠楊戸を閉づ八九屋、明月、簾を捲く三兩人、等句の如き、口より出でて人を驚かし、當世に膾炙す、以て一洗して群を空ふすべし、二家の氣象は俾しからず。

拗體は唐律の再變にして、古今に作者多からず、其の法

律之變處、當下平字、換用仄字、欲使語氣奇健不詳、晚唐人喜用此體、鄭詩深得其妙、後無人能繼者、惟金英憲之仿得其法、如雲間絕磴七八里、无末遙岑千萬重、茶罷松窓掛微月、講闌風榻搖殘鐘、白鳥去盡暮天碧、青山猶含殘照紅、香風十里捲珠簾、明月一聲飛玉笛等句、多有所習、云。

金學士黃元登浮碧樓、見古今題詠、不滿其意、旋焚其版、終日憑欄苦吟、只得長城一面溶溶水、大野東頭點點山之句、意瀟痛哭而去、昔賈浪仙三年吟得一句、云獨行潭底影、數息樹邊身、不覺垂淚、予觀浪仙之詩、寒瘦盡癯、何至垂淚、黃元之句、老儒常談、何痛哭自苦如是。

は律の變ずる所に遇て、當に平字を下すべきに、換へて仄字を用ひ、語氣をして奇健にし、辭せざらしめんと欲す、晚唐人喜んで此の體を用ゆ、鄭の詩は深く其の妙を得たり、後ち人の能く繼ぐ者なし、惟た金英憲之仿其の法を得たり、雲間の絶磴七八里、天末の遙岑千萬重、茶罷で松窓微月を掛け、講闌にして風榻殘鐘を搖かす、白鳥去り盡きて暮天碧なり、青山猶ほ含む殘照の紅、香風十里珠簾を搖き、明月一聲玉笛を飛ばす等の句の如き、多く習する所ありと云ふ。

金學士黃元は浮碧樓に登り、古今の題詠を見て其の意に滿たず、旋りて其の版を焚き、終日欄に憑りて苦吟し、只だ長城一面溶々の水、大野東頭點々の山の句を得て、意瀟れ痛哭して去る、昔し賈浪仙は三年吟して一句を得たり、云ふ「獨り行く潭底の影數と息ふ樹邊の身」と、覺えず涙を垂る、予は觀るに浪仙の詩は、寒瘦盡癯、何ぞ涙を垂るゝに至らん、黃元の句は、老儒の常談なり、何ぞ痛哭して自から苦しむことは、是の如くなる。

陳司諫渾雨餘庭院簇莓苔、人靜柴扉晝不  
 開、碧砌落花深一寸、東風吹去又吹來、砭者  
 曰、落花稱深一寸、似畔於理、予曰、趙退菴詩  
 曰、蒲色青青柳色深、今年寒食去年心、醉來  
 不記關河夢、路上飛花一膝深、其曰、一膝則  
 又深於一尺矣、況太白詩、燕山雪片大如席、  
 又曰、白髮三千丈、蘇子瞻詩、大瀾如壑盡、是  
 不可以辭害意、但當意會、爾、近得甘露集、乃  
 宋僧詩也、其詩云、綠楊深院春晝永、碧砌落  
 花深一寸、與陳句無一字異、古之人亦有是  
 語矣。

金員外克己醉時譚釣必連海上之六鰲、射  
 必落日中之九鳥、六鰲動兮龍震盪、九鳥出  
 兮草木焦枯、男兒要自立、奇節、弱羽、纖鱗、安

陳司諫渾雨餘の庭院莓苔を簇す、人靜にして柴扉晝  
 も開かず、碧砌の落花深きこと一寸、東風吹き去りて又  
 た吹き來ると、砭する者曰く、落花に深きこと一寸と稱  
 するは、理に畔くに似たりと、予は曰く、趙退菴の詩に曰  
 く、蒲色青青として柳色深く、今年の寒食去年の心、醉ひ  
 來りて記せず、關河の夢、路上の飛花一膝深しと、其の一  
 膝と曰ふは、則ち又た一尺よりも深し、況んや太白の詩  
 に、燕山の雪片大ささ席の如し、又た曰く、白髮三千丈、  
 と、蘇子瞻の詩に、大瀾は壑盡の如しと、是れ辭を以て意  
 を害す可からず、但た當に意に會すべきのみ、近ごろ甘  
 露集を得たり、乃ち宋僧の詩なり、其の詩に云く、綠楊深  
 院春晝永く、碧砌の落花深きこと一寸と、陳の句と一字  
 の異なるなし、古の人も亦た是の語あり。

金員外克己、醉時の譚に、釣るときは必らず海上の六鰲  
 を連ね、射るときは必らず日中の九鳥を落す、六鰲動い  
 て魚龍震盪し、九鳥出でて草木焦枯す、男兒自から奇節  
 を立てんことを要す、弱羽、纖鱗、安んぞ誅するに足らん

足誅語甚豪壯挺傑、其意本少陵射人先射馬、擒賊先擒王、其詞本浩翁酌君以蒲城委落之酒、泛君以湘纍秋菊之英、酒洗胃中之磊塊、菊制短世之頽齡、雖用二家詞意、渾然無斧鑿痕、真竊狐白裘手。

詩當先氣節、而後文藻、夏文莊公疎試垣詩、殿上袞衣明日月、硯中旗影動龍蛇、縱橫禮樂三千字、獨對丹墀日未斜、果魁天下評者、譏其自負、鄭狀元知常詩、三丁燭盡天將曉、八角章成桂已香、落月半庭人擾擾、不知誰是狀元郎、大有文莊自負氣象、文莊功名富貴雖卓然一時、而立朝大節、多有可議者、如鄭者、又何足論哉、嘗見常永貽試罷詩、三條燭盡鐘初動、九轉丹成鼎未開、明月漸低人

と、語甚だ豪壯挺傑にして、其意の意は少陵の、人を射るときは先づ馬を射よ、賊を擒にするときは先づ王を擒にせよ、といへるに本づき、其の詞は浩翁の、君に酌むに蒲城桑落の酒を以てし、君に泛ぶるに湘纍秋菊の英を以てす、酒は胸中の磊塊を洗ひ、菊は短世の頽齡を制す、といふに本づく、二家の詞意を用ふと雖も、渾然として斧鑿の痕無し、真に狐白裘を竊むの手なり。

詩は當に氣節を先にして文藻を後にすべし、夏文莊公疎試垣の詩に、殿上の袞衣日月明かなり、硯中の旗影龍蛇を動かす、縱横の禮樂三千字、獨り丹墀に對して日未だ斜ならず」と、果して天下に魁たり、評するもの其の自負を譏る、鄭狀元知常の詩に、三丁燭盡きて天將に曉けんとす、八角章成りて桂已に香ばし、落月半庭人は擾々たり、知らず誰か是れ狀元の郎」と、大に文莊自負の氣象あり、文莊は功名富貴、一世に卓然たりと雖も、而も朝に立つの大節は、多く議すべき者あり、鄭の如き者は、又た何ぞ論するに足らんや、嘗て草永貽が試より罷るの詩を見るに、三條燭盡きて鐘初めて動く、九轉丹成つて鼎未だ開かず、明日漸やく低れて人は擾々たり、知らず誰か是れ謫仙の才」と、鄭が詩も亦た大に踏襲す。

擾々、不知誰是謫仙才、鄭詩亦大蹈襲。

康先生日用欲賦鷺鷥詩、每冒雨至天水寺南溪上觀之、忽得一句云、飛刺碧山腰、語人曰、今得到、古人不到處、予以謂欲賦鷺鷥、冒雨溪行不已、勞矣乎哉、後得宋詩人蕭東夫詩曰、得句鷺飛處、看山天盡頭、猶嫌未奇絕、更上岳陽樓、予憮然嘆曰、使康先生得見此詩、必以謂得神交於九州之內者矣。

李大諫仁老瀟湘八景詩、雲間瀟瀟黃金餅、霜後溶溶碧玉濤、欲識夜深風露重、倚船漁父一肩高、語本蘇舜欽雲頭瀟瀟開金餅、水面沉沉臥彩虹之句、點化自佳、元學士趙孟頫愛此詩、改後句曰、記得大湖楓葉晚、垂虹高下訪三高、其必有取舍者存焉。

康先生日用鷺鷥の詩を賦せんと欲し、毎に雨を冒して天水寺の南溪の上に至りて之を觀る、忽一句を得たり、云ふ、飛んで碧山の腰を刺くと、人に語りて曰く、今、古人の到らざる處に到るを得たりと、予以謂らく、鷺鷥を賦せんと欲して、雨を冒して溪行して已まざるは、勞せるかたと、後に宋の詩人蕭東夫の詩を得たり、曰く、句を得たり、得の、嵐山を看りて天の盡くる、猶嫌未だ奇絶ならざるを、更に岳陽樓に上ると、予憮然として嘆じて曰く、康先生をして此の詩を見るを得しめは、必らず以て謂はん九州の内に神交するを得るものなりと、李大諫仁老の瀟湘の八景の詩に、雲間瀟瀟たり黄金の餅、霜後溶溶たり碧玉の濤、夜深くして風露の重きを知らんと欲せば、船に倚る漁父一肩高しと、語は蘇舜欽の雲頭瀟瀟として金餅を開き、水面沉沉として彩虹に臥すの句に本づき、點化して自から佳なり、元の學士趙孟頫、此の詩を愛して、後句を改めて曰く、記得大湖楓葉の晚、垂虹亭下に三高を訪ふと、其れ必らず取舍する者ありて存せん。

浮碧樓後有峰曰牧丹、高麗時王幸此峰、御製云、北斗七星三四點、有一生進對曰、南山萬壽十千秋、王深異之、擢爲狀元、三四爲七、而十千爲萬、的對。

李文順奎報少以文章自負、時李仁老、吳世材、林椿、趙通、皇甫抗、咸淳、李湛之等、稱爲七賢、飲酒賦詩、旁若無人、世材死、湛之謂奎報子可補耶、奎報曰、七賢豈朝廷官爵補、其闕耶、未有嵇阮之後、有承乏者、又令口號云、不知七賢內、誰爲鑽核人、一座有慍色、一日漢陽吳君世文、與金東閣瑞廷、鄭員外文、甲、置酒林亭、文順亦與會、吳以所著三百二韻詩索和、文順援筆、步韻韻愈、強而思愈、健、浩汗奔放、雖風檣陣馬、未易擬其速、東方詩豪一

浮碧樓の後に峯あり、牧丹と曰ふ、高麗の時に王は此の峯に幸す、御製に云ふ、北斗七星三四點と、一生あり進みて對して曰く、南山萬壽十千秋と、王、深く之を異とし、擢んでて狀元と爲す、三四を七と爲し、而して十千を萬と爲す、的對なり。

李文順奎報少くして文章を以つて自負す、時に李仁老、吳世材、林椿、趙通、皇甫抗、咸淳、李湛之等を稱して七賢と爲し、酒を飲み詩を賦し、傍はら人無きか若し、世材死す、湛之、奎報に謂ふ、子は補ふ可きかと、奎報曰く、七賢は豈に朝廷の官爵にして其の闕を補はんや、未だ有らず、嵇阮の後ち乏を承くる者あるを、又た口號せしめて云ふ、知らず七賢の内、誰か核を鑽る人と爲らんと、一座慍る色あり、一日漢陽の吳君世文は、金東閣瑞廷、鄭員外文、甲と林亭に置酒す、文順も亦た會に與る、吳は著す所の三百二韻の詩を以て和を索む、順は筆を援て韻を歩む、韻愈々強にして、思愈々健なり、浩汗奔放にして、風檣陣馬と雖も未だ其の速なるに擬し易からず、東方の詩豪一人のみ、古人詩集の中に、律詩三百韻なる者なし、歳に鍛ひ月に鍊ると雖尙ほ成ることを得ず、況んや一瞥の間

接骨天下  
脫重押二  
天字五字

蘇本無用  
有字何上  
有獨字

人而已、古人詩集中、無律詩三百韻者、雖歲  
鍛月鍊、尙不得成、況一瞥之間、操紙立成乎、  
或問、李文順三百韻詩、重押二施字二祇字、  
有何所祖乎、予曰、杜甫八仙詞、知章騎馬似  
乘船、天子呼來不上船、重押二船字、眼花落  
井水底眠、長安市上酒家眠、重押二眠字、汝  
陽三斗始朝天、舉觴白眼望青天、皎如玉對  
臨風前、脫帽露頂王公前、蘇晉長齋繡佛前、  
三押前字、又蘇子瞻送王公著詩、忽憶釣臺  
歸洗耳、又曰、亦念人生行樂耳、自注曰、二耳  
字義不同、故得重押、予謂一韻重押、蘇杜尙  
然、非但蘇杜、魏晉諸集中多有、用之、何怪於

李孚

崔舍人斯立天壽寺詩、天壽門前柳絮飛、一

東人詩話卷上

に、紙を操て立ところに成すをや、  
或ひと問ふ、李文順の三百韻の詩は、重ねて二つの施の  
字と二の祇つ字とを押す、何の祖とする所ありや、予の  
曰く、杜甫の八仙の詞に、知章か馬に騎るは船に乗るに  
似たり、天子呼び來れども船に上らずと、重ねて二つの  
船の字を押す、眼花井に落ちて水底に眠る、長安市上酒  
家に眠るは重ねて二つの眠るの字を押す、汝陽三斗に  
して始めて天に朝す、觴を擧げて白眼に青天を望む、  
皎として玉樹の風前に臨むが如く、帽を脱して頂を露  
はす王公の前、蘇晉長齋繡佛の前と、三たび前の字を  
押す、又た蘇子瞻の王公著を送る詩に、忽ち憶ふ釣臺歸  
りて耳を洗ふ、又た曰く、亦念ふ人生行樂せん耳と、自注  
に曰く、二つの耳の字義は同じからず、故に重ねて押す  
を得た、と、予は謂く、一韻重ねて押すは、蘇杜尙ほ然り、  
但た蘇杜のみに非ず、魏晉の詩集の中に多く之を用ふ  
るあり、何ぞ李を怪まんや、

舍人斯立天壽寺の詩に、天壽門前柳絮飛、一壺來り崔

詳本  
贊作

壺來待故人歸、眼穿落日長亭晚、多少行人  
近卻非、能道人欲道不道處、萬口傳誦、白費  
成元恆阻江詩、小舟當發晚潮催、駐馬臨江  
獨冷哈岸上行人何日了、前人未渡後人來、  
白詩意好、然造次立語、曲盡情狀、渾然無迹、  
非崔之比。

詳本  
承作

古人作詩無一句無來處、李政承混浮碧樓  
詩、永明寺中僧不見、永明寺前江自流、山空  
孤塔立庭際、人斷小舟橫、渡頭長天去鳥欲、  
何向、大野東風吹不休、往事微茫問無處、淡  
煙斜日使人愁、一句二句、本李白鳳皇臺上  
鳳皇遊、鳳去臺空江自流、四句本韋蘇州野  
渡無人舟自橫、五六句本陳后山度鳥欲何  
向、奔雲亦自閑、七八句又本李白總爲浮雲

て故人の歸るを待つ、眼は穿つ落日長亭の晚、多少の行人近づきて卻て非なりと、能く人の道はんと欲して道はざる處を道ふ、萬口傳誦す、白費成元恆の江に阻てらるゝ詩に、小舟發するに當りて晚潮催ほす、馬を駐め江に臨みて獨冷哈す、岸上の行人何れの日にか了せん、前人未だ渡らず後人來ると、白の詩意は好し、然れども造次立語、曲さに情狀を盡くして、渾然として迹なきは、崔の比に非らず。

古人の詩を作る、一句も來處なきはなし、李政承混浮碧樓の詩に、永明寺の中僧見えず、永明寺の前江自から流る、山は空ふして孤塔は庭際に立ち、人斷えて小舟は渡頭に横はる、長天の去鳥は何くに向はんと欲す、大野の東風吹いて休まず、往事微茫として問ふに處なく、淡煙斜日人をして愁へしむと、一の句二の句は、李白の鳳皇臺上に鳳皇遊ぶ、鳳は去り臺は空ふして江自から流るといふに本づき、四の句は、韋蘇州の「野渡人無く舟自から横はると云ふに本づき、五六の句は陳后山の度鳥何くに向はんと欲す、奔雲亦自から閑なり」と本づき、七八の句は又た李白の「總て浮雲の白日を蔽ふが爲めに、長

蔽白日、長安不見使入愁之句、句句皆有來處、粧點自妙、格律自然森嚴。

鮮本面作  
回  
辭本兼作  
事

古人詠明皇貴妃事者多、嘗愛韓子蒼詩、尙覓君王一面、願金鞍欲上故遲遲、張祐詩、桃花院靜無人見、閑把靈王玉笛吸、今觀李文順開元天寶四十二詠、隨事諷詠、抑揚頓挫、沈深痛快、雖置之唐宋作者、亦無愧焉、其賦剪髮云、勅還外第、妃何恨、一朵烏雲足、市權其賦、玉笛云、竊向寧王非細事、可憐君意未終移、雖韓張老膝、不得、不屈、予嘗讀羅隱詩、佛屋山頭野草春、貴妃輕骨此爲塵、從來絕色終難得、不被中原不是人、語雖工、非仁人君子之言、文順賦、薛寒犀云、羅綺香薰暖似春、君王衆愛薛寒珍、人間臘雪盈三尺、白屋

安見えす人をして愁へしむの句に本づく、句々皆な來處あり、粧點して自から妙なり、格律自然に森嚴たり。

古人、明皇貴妃の事を詠する者多し、嘗て愛す韓子蒼の詩に、尙ほ覓む君王一たび面願せんことを、金鞍上らんと欲して、故さらに遅々たりと、張祐の詩に、桃花院は靜にして人の見る無く、閑に靈王の玉笛を把つて吹くと、今、李文順の開元天寶の四十二詠を觀るに、事に隨つて諷詠す、抑揚頓挫、沈深痛快なり、之を唐宋の作者に置くと雖も、亦た愧づるとなし、其の髮を剪るを賦するに云ふ、勅して外第に還す妃何ぞ恨まん、一朵の烏雲權を市ふに足れりと、其の玉笛を賦するに云く、竊に寧王に向ふ細事に非ず、憐むべし君の意未だ終に移らず、韓張の老膝と雖も、屈せざるを得ず、予、嘗て羅隱の詩を讀むに「佛屋山頭野草の春、貴妃の輕骨此に塵と爲る、從來絶色終に得難し、中原を破らずんば是れ人にあらず」と、語は工なりと雖も、仁人君子の言に非らず、文順、薛寒犀を賦して云く、羅綺香薰して暖にして春に似たり、君王は猶ほ愛す、薛寒珍、人間の臘雪三尺に盈つ、白屋何ぞ凍死の民なからんと、豈に消教に關すること有らざらんや。

那無凍死民、豈不有關於治教乎。

崔文昌詩、含情朝雨細復細、弄豔閑花開未開、高麗人好用是語、如吳學士學麟詩、院院古非古、僧僧知不知、朱文節寒碧樓詩、水光澄澄鏡非鏡、山氣靄靄烟非烟、李文順春日詩、幽花迥露落未落、輕燕受風斜復斜、僧益莊洛山寺詩、大聖住無住、普門封不封、畢竟定非佳語。

崔猊山濼、才奇志高、放蕩不群、嘗登海雲臺、見萬戶張瑄題詩松樹曰、此樹何厄遭、此惡詩、遂刮去、塗以糞土、瑄怒、命將追獲僕、從械立門外、猊山遁還、其恃才傲物如此、然坐此贈履、嘗貶長沙監務、有詩云、高名千古長沙上、却愧才非賈少年、又云、三年竄逐病相仍、

猊山  
像  
本  
僕  
作

崔文昌の詩に情を含んで朝雨細にして復た細なり、豔を弄して閑花開きて未だ開かずと、高麗の人好んで是の語を用ゆ、吳學士學麟の詩に、院々古りて古に非ず、僧々知ると知らざると、朱文節の寒碧樓の詩に、水光澄々として鏡は鏡に非ず、山氣靄々として煙は煙に非ず、と、李文順の春日の詩に、幽花露に迥て落ちて未だ落ちず、輕燕風を受けて斜にして復た斜なりと、僧の益莊の洛山寺の詩に、大聖住して住すること無く、普門封じて封せずと、畢竟定めて佳語に非ず。

崔猊山濼、才は奇に志は高く、放蕩として群せず、嘗て海雲臺に登りて、萬戶の張瑄の詩を題する松樹を見て曰く、此の樹何の厄ぞ、此の惡詩に遭ふと、遂に刮り去りて塗るに糞土を以てず、瑄怒りて將に命じて僕從を追獲して械して門外に立つ、猊山遁れ還る、其の才を恃み物に傲ること此の如し、然れども此に坐して贈履す、嘗て長沙の監務に貶せられ、詩あり云く、高名千古長沙の上、卻てづ才の賈少年、非ざることを、又た云く、三年竄

一室生涯轉似僧雪滿四山人不到海濤聲  
裡坐挑燈又嘗有詩云我衣緇袍人輕裘人  
居華屋我圭鬻天工賦與本不齊我不嫌人  
人我詎讀其詩可見困頓氣象。

詩不踏襲古人所難李文順平生自謂擺落  
陳腐自出機杼如犯古語死且避之然有句  
云黃稻日肥鷄鶩喜碧梧秋老鳳皇愁用少  
陵紅稻啄餘鸚鵡粒碧梧棲老鳳皇枝之句  
又云洞府徵詞調玉案教坊選妓醉仙桃用  
太白選妓隨雕盤徵詞出洞房之句又云春  
暖鳥聲碎日斜人影長用唐人風暖鳥聲碎  
日高花影重之句以李高才尙如此況不及  
李者乎。

詩貴含蓄不露然微詞隱語不明白痛快亦

逐せられて病相ひ仍る一室の生涯轉た僧に似たり、雪  
は四山に滿ちて人到らず、海濤聲裡坐して燈を挑くと、  
又た嘗て詩あり云く、我は緇袍を衣人は輕裘、人は華屋  
に居り我は圭鬻、天工賦與本と齊しからず、我は人を嫌  
はず人は我を詎すと、其の詩を讀みて困頓の氣象を見  
る可し。

詩は踏襲せざるは古人の難しとする所なり、李文順平  
生自から謂く、陳腐を擺落して自から機杼を出す、如し  
古語を犯さば死すとも且に之を避けんとすと、然れども  
句あり云く、黃稻日に肥て雞鶩喜ひ碧梧秋老ひて鳳皇  
愁ふと、少陵の紅稻啄み餘す鸚鵡の粒碧梧棲み老ふ鳳  
皇の枝の句を用ふ、又た云く、洞府詞を徵して玉案を調  
へ、教坊妓を選んで仙桃に醉ふと、太白が妓を選んで雕  
盤に隨ひ、詞を徵して洞房を出づの句を用ふ、又た云く  
春は暖にして鳥聲碎け、日は斜にして人影長しと、唐人  
の風は暖かにして鳥聲碎け、日は高くして花影重るの  
句を用ふ、李の高才を以て尙ほ此の如し、況んや李に及  
ばざる者をや。

詩は含蓄して露はさざるを貴ぶ、然れども微詞隱語にし

詩之大病、宋元豐八年三月神宗崩、五月一日蘇軾題揚州竹西寺云、此生已覺都無事、今歲仍逢大有年、山寺歸來聞好語、野花啼鳥亦欣然、元祐間、趙君錫等構軾曰、軾不得志於神廟、今喜上賓、有是句、哲宗疑之、恭讓朝太祖輔政、牧隱、貶長湍、有松軒當國、我流離夢裡、何曾有此思之句、朝議以語涉不遜、請論如法、事叵測、嗚呼、以蘇李之大才、亦坐是、詩、

李文順送春詩曰、春向晚送將歸、杳々悠悠、滴何處、不、收、落花紅、歸、鶯、取、人間、溼丹、去、好去、青春、莫、回首、與、人、薄、情、誰、似、汝、趙石礪云、佗送春詩、謫宦、傷、心、涕、淚、揮、送、春、兼、復、送、人、歸、春、風、好、去、無、留、意、久、在、人、間、學、是、非、李

て明白痛快ならざるは亦た詩の大病なり、宋の元豐八年三月神宗崩す、五月一日、蘇軾は揚州の竹西寺に題して云ふ、此の生已に覺ゆ却て、事なるを、今歲仍りに逢ふ大有年、山寺歸り來りて好語を聞く、野花啼鳥も亦た欣然と、元祐の間趙君錫等軾を構へて曰く、軾は志を神廟に得ず、今、上賓を喜んで是の句ありと、哲宗之を疑ふ、恭讓の朝に、太祖政を輔く、牧隱、長湍に貶せらる、松軒國に當りて我れ流離す、夢裡何ぞ曾て此の思あらん、の句あり、朝議以へらく、語は不遜に涉る、請ふ論するに法の如くせんと、事測り叵し、嗚呼蘇李の大才を以て、亦た此の病に坐す、詩は言ひ易すかるべけんや。

李文順春を送るの詩に曰く、春は晩に向つて將に歸らんとするを送る、杳々悠悠、何れの處にか適く、唯だ花紅を收拾して歸るのみならず、兼ねて人間の溼丹を取り去る、好し去れ青春を回すること莫れ、人と薄情誰か汝に似んと、趙石礪云ふ佗の春を送るの詩に、謫宦心を傷ましめて涕淚揮ふ、春を送りて兼ねて復た人の歸るを送る、春風好し去れ留る意なし、久しく人間に在りて是非

則惜春歸。趙則勸春歸。各有意態。老健奇絕。予嘗愛拙翁四皓詩。漢用奇謀立帝功。指揮豪傑似兒童。可憐皓首南山老。亦墮留侯計術中。趙學士子昂。四皓詩。白髮商巖四老翁。紫芝謫罷聽松風。半生不與人間事。亦墮留侯計術中。雖詞意不同。而末句如出一手。拙老入元朝中制科。與趙同時。其或有所摸擬。但以拙老之崛強。豈效顰一時儕輩之所作乎。

張祐金山寺。樹影中流見。鐘聲兩岸聞。古今以謂絕唱。後有孫觴者。繼之云。天多剩得月。地少不生塵。誰言張處士。詩後更無人。自以謂壓倒張處士矣。然後人繼其不及。金狀元黃元浮碧樓詩。長城一面溶溶水。大野東頭

を學ぶ」と、李は則ち春の歸るを惜み、趙は則ち春の歸るを勸む、各々意態あり、老健奇絶なり、

予嘗て拙翁四皓の詩を愛す、漢は奇謀を用ひて帝功を立て、豪傑を指揮して兒童に似たり、憐むべし、皓首南山の老亦た留侯計術の中に墮つ」と、趙學士子昂四皓の詩に「白髮商巖の四老翁、紫芝謫罷んで松風を聽く、半生、人間の事、與からず、亦た留侯計術の中に墮つ」と、詞意同じからずと雖も、而も末句は一手に出づるが如し、拙老、元朝に入りて制科に中り、趙と時を同うす、其れ或は摸擬する所あらん、但だ拙老の崛強を以て、豈に一時儕輩の作る所に效顰せんや。

張祐の金山寺に「樹影中流に見え、鐘聲兩岸に聞ゆ」と、古今以謂へらく絶唱と、後に孫觴といふ者あり、之に繼て云く「天多くして剩に月を得たり、地少くして塵を生ぜず、誰か言ふ張處士、詩後更に人なし」と、自から以謂へらく、張處士を「倒すと、然れども後人其の及ばざるを羨る、金狀元黃元の浮碧樓の詩に「長城一面溶々の水、大野東頭點々の山」と、後に權一齋漢功あり、之に繼て曰く「白

點點山、後有權一齋漢功繼之曰、白鷗波上  
疎疎雨、黃檗坡南點點山、自以爲詩後有人、  
然亦未知可以壓倒金狀元乎。

東坡平生功名出處、自比白香山、牧隱亦嘗  
以東坡自比、熙寧中、王安石以新法誤天下、  
東坡有山村五絕、有邇來三月食無鹽、過眼  
青錢轉手空等句、坐譏時事、謫南荒、謂其詩  
曰、烏臺詩案、牧隱謫長湍、寄省郎十首、有黜  
僧還恐似王輪、滿庭青紫絕無人等句、爲臺  
官所彈、禍且不測、其視烏臺詩案、亦無幾矣。  
古人稱杜甫非特聖於詩、詩皆出於憂國憂  
民、一飯不忘君之心、如避地鄜州、達行在間  
關崎嶇、其哀王孫、悲陳陶等篇、可見其志之  
所存、大元至治中、高麗忠宣王被讒竄西蕃、

鷗波上疎々の雨、黃檗坡南點々の山」と、自から以爲へら  
く、詩後に人ありと、然れども亦た未だ以て金狀元を壓  
倒す可きやを知らず。

東坡平生、功名出處、自から白香山に比す、牧隱も亦嘗て  
東坡を以て自ら比す、熙寧中に、王安石は新法を以て天  
下を誤る、東坡は山村の五絶あり、邇來三月食に鹽なし、  
「眼を過ぐる青錢手を轉すれば空し」等の句あり、時事を  
譏るに坐して、南荒に謫せらる、其の詩を謂ふて烏臺詩  
案と曰ふ、牧隱は長湍に謫せられて省郎に寄する十首  
に、黜僧還つて恐る、王輪に似ることを、滿庭の青紫絶え  
て人無し等の句あり、臺官に彈ぜられ、禍且に測られざ  
らんとす、其の烏臺の詩案に視ふるに亦た幾もなし。  
古人稱す杜甫は特り詩に聖なるのみにあらず、詩は皆な  
國を憂へ民を憂へ一飯も君を忘れざるの心に出づ、地を  
鄜州に避け、行在に建るが如き、間關崎嶇、其の哀王孫悲  
陳陶等の篇は其の志の存する所を見るべし、大元の至治  
中に、高麗の忠宣王讒を被りて西蕃に竄せらるるや、益  
齋李文忠公、萬里奔問して、忠憤藹然たり、寸腸冰雪亂れ  
て交もく加はり、一たび燕山を望んで、九たび起嗟す、

鮮本微作  
杜

益齋李文忠公萬里奔問、忠憤藹然、如寸腸  
冰雪亂交加、一望燕山九起嗟、雜謂鱣鯨困、  
螻蟻可憐、虬訴蝦蟆、才微漸、顏宜、緒義  
重扶顛、鬢已華、萬古金騰遺策在、未容羣叔  
誤周家、又咄咄書空、但坐愁、式微何處、賦菟  
裘、十年艱險魚千里、萬古升沈貉一丘、白日  
西飛魂正斷、碧江東注淚先流、滿門珠履無  
雞狗、飽德如吾死、合羞等篇、其忠誠憤激、杜  
少陵不得專美於前矣。

鮮本大作  
太

古之評詩者曰、武侯廟栢纒十丈、杜云二千  
尺、過於大、高、又云、霜皮溜雨四十圍、黛色參  
天二千尺、是則高二千尺、而徑七尺、過於大  
細、老杜詩聖也、後之評者、尙有之、金英憲之  
岱洛山寺雲間絕磴七八里、天末遙岑千萬

誰れか謂ふ鱣鯨、螻蟻に困ぜん、と憐む可し、虬蟻の蝦蟆  
を訴ふることを、才は微にして微、漸顔宜く緒かるべし、  
義は重くして扶顛鬢已に華なり、萬古の金騰遺策在り、  
未だ容さず羣叔の周家を誤ることを、又た咄々空に  
書して但だ坐愁す、式微何の處にか菟裘を賦せん、十年  
の艱險魚千里、萬古の升沈貉一丘、白日西に飛んで魂正  
に斷へ、碧江東に注いで淚先づ流る、滿門の珠履、雞狗無  
し、德に飽くこと、吾が如き死すとも合さに羞づべし、等  
の篇の如き、其の忠誠憤激、杜少陵も美を前に専らにす  
るを得ず。

古の詩を評する者は曰く、武侯廟の栢は纒に十丈なり、  
杜の云ふ二千尺と、大高に過ぎたり、又た云ふ、霜皮雨を  
溜す四十圍、黛色天に參はる二千尺と、是れ則ち高さ二  
千尺にして、徑り七尺なり、大細に過ぎたり、老杜は詩聖  
なり、後の評する者尙ほ之れあり、金英憲の岱洛山寺に  
『雲間の絶磴七八里、天末の遙岑千萬重』と、其の千萬重と  
曰ふは則ち然り、絶磴指稱して七八里と曰ふは、何ぞや、

重、其曰千萬重、則然矣、絕磴指稱曰七八里、何耶、是殆失之於詞爾。

宋眞宗賦御溝柳詩、示宰相兩省、和進、陳執中獻詩曰、一度春來一度新、翠光長得照龍津、君王自愛天然色、恨殺昭陽學舞人、高麗毅宗遊上林賦芍藥詩、賢良皇甫倬和進云、誰道花無主、龍顏日賜親、宮娥莫相妬、雖似竟非眞、上嘉嘆、遂補館職、倬以是知名於世、予觀倬之詞、語實襲陳詩、而陳則隱然有豔色之戒、倬則自啓宮娥妬寵之端、其得失迥然不侔矣。

余嘗問鑿坡先生曰、人豈不自知乎、古人自愛文章者多、如蔡蒙齋聯珠詩格、李大諫破閑集、皆自詫其詩、可見古人眞淳處、諸先生

是れ殆んど之を詞に失するのみ。

宋の眞宗、御溝の柳の詩を賦して、宰相兩省に示して和して進めしむ、陳執中詩を獻じて曰く、一度春來りて一度新なり、翠光長く龍津を照らすことを得たり、君王は自から天然の色を愛す、恨殺す昭陽舞を學ぶの人と、高麗の毅宗上林に遊んで芍藥の詩を賦す、賢良皇甫倬和進して云ふ、誰か道ふ花に主なしと、龍顏日に親を賜ふ、宮娥相妬むこと莫れ、似ると雖も竟に眞に非ずと、上嘉嘆し、遂に館職に補す、倬是を以て名を世に知らる、予、倬の詞を観るに、語は實に陳の詩を襲ふ、而して陳は則ち隱然として豔色の戒あり、倬は則ち自から宮娥寵を妬むの端を啓く、其の得失は迥然として侔しからず。

余嘗て鑿坡先生に問ふて曰く、人は豈に自から知らざらんや、古人自から文章を愛するもの多し、蔡蒙齋か聯珠詩格、李大諫か破閑集の如き、皆な自から其の詩を詫す、古人眞淳の處を見る可きか、先生の曰く、孔子の詩は

曰、孔子之詩、不列於國風、昭明之作、不編於文選、其是非未可知也。

凡詩妙在一字、古人以一字爲師、張乖崖在江南題一絕云、獨恨太平無一事、江南閑殺老尙書、蕭楚材改恨作幸、曰、今天下一統、公功高位重、獨恨太平、何耶、張謝曰、蕭君一字之師也、金直殿久問嘗有聯云、驛樓舉酒山當席、官渡哦詩雨滿船、下文肅公季良曰、當字未穩、宜改臨、金曰、南山當戶轉分明、當字有來處、下曰、古詩有青山臨黃河、如金者豈知臨字之妙乎、金竟不屈、終不相能、一字相師、義安在乎、然今之評者曰、臨字不如當字之穩。

宋眞宗賞花釣魚詩、丁晉公謂應制云、鶯鷺

國風に列せず、昭明の作は文選に編せず、其の是非は未だ知る可からざるなり。

凡そ詩の妙は一字に在り、古人は一字を以て師となす、張乖崖、江南に在りて一絶を題して云ふ、獨り恨む太平一事なきことを、江南閑殺す老尙書と、蕭楚材は恨を改めて幸と作して曰く、今天下一統す、公は功高く位重し、獨り太平を恨むことは何ぞや、張謝して曰く、蕭君は一字の師なり、金直殿久問嘗て聯あり云ふ、驛樓酒を舉げて山席に當り、官渡詩を哦して雨船に滿つと、下文肅公季良曰く、當の字未だ穩かならず、宜しく臨に改むべしと、金曰く、南山戸に當りて轉た分明なり、當の字來處ありと、下曰く古詩に、青山黃河に臨むといふあり、金の如き者は豈に臨の字の妙を知らんやと、金は竟に屈せず、終に相能からず、一字相帥とするの義安にか在るや、然れども今の評者は曰く、臨の字は當の字の穩なるに如かずと。

宋の眞宗の花を賞し魚を釣る詩に、丁晉公謂の應制に云

鮮本  
費作

鳳禁穿花去、魚畏龍顏上、釣遲、忠宣王、蕪禁池、白費、成元、恆詩、琉璃、晴色、激方池、魚樂無心上、釣絲、柳外、曲、闌、籬、半、捲、燕、輕、微、雨、小、晴時、詞語玲瓏、圓轉可愛。

梅聖俞、蘇子美、齊名一時、二家詩格不同、蘇之筆力豪俊、以超邁橫絕爲奇、梅則研精覃思、以深遠閑淡爲高致、各臻所長、雖善論者、未易甲乙、然歐陽子隱然以梅爲勝、李陶隱、鄭三峯、齊名一時、李清新高古、而乏雄渾、鄭豪逸奔放、而少鍛鍊、互有上下、然牧老每當題評、先李而後鄭、一日牧隱見陶隱、嗚呼鳥詩、極口稱譽、問數日、三峯亦作嗚呼鳥詩、鶴牧老曰、偶得此詩於古人詩彙中、牧隱曰、此真佳作、然君輩亦裕爲之、至如陶隱詩、不多

ふ、然鳳禁に驚きて花を穿ちて去り、魚は龍顔を畏れて釣に上ること遅し」と、忠宣王、蕪池に講す、白費成元、恆の詩に、琉璃の晴色、方池に激たり、魚樂無心にして釣絲に上る、柳外の曲、闌籬半ば捲く、燕は輕し微雨の小しく晴るゝ時」と、詞語玲瓏として圓轉愛すべし。

梅聖俞と蘇子美と名を一時に齊ふす、二家の詩格は同じからず、蘇の筆力は豪俊にして、超邁橫絶を以て奇と爲す、梅は則ち精を研ぎ思を覃ふして、深遠閑淡を以て高致と爲す、各々長ずる所に臻る、善く論ずる者と雖も、未だ甲乙し易からず、然れども歐陽子は隱然として梅を以て勝れりと爲せり、李陶隱と鄭三峯とは名を一時に齊ふす、李は清新高古にして雄渾に乏し、鄭は豪逸奔放にして鍛鍊少し、互に上下あり、然れども牧老は題評に當る毎に李を先にして鄭を後にす、一日牧隱陶隱の嗚呼鳥の詩を見て口を極めて稱譽す、數日を問てて三峯も亦た嗚呼鳥の詩を作りて牧老に調して曰く、偶此の詩を古人の詩彙中に得たりと、牧隱曰く、此れ眞に佳作なり、然れども君が輩も亦た裕に之を爲す、陶隱の詩の如きに至りては多く得ざるなりと、後に三峯は國に當り、牧一は

得也、後三峯當國、牧隱屢遭顛蹟、僅免其死、陶隱終踏其禍、論者以謂未必非嗚呼島詩爲之祟也。

李大諫八景詩、林間出沒幾多屋、天末有無何處山、李政承混永明寺詩、長天去鳥欲何向、大野東風吹不休、李相國沙平院詩、郵吏送迎何日了、使華來往幾時休、三李句法相似、然相國詞語重複未圓、當豎降幡。

柳思菴淑乞骸骨歸老瑞城、權隱李侍中仁復送詩云、人間膏火日相煎、明哲如公史可傳、已向危時安社稷、更從平地作神仙、五湖夢斷烟波綠、三徑秋深野菊鮮、愧我未能投絨去、邇來雙鬢雪飄然、時推爲傑作、然未幾思菴死於逆阼之手、論者以謂未必非權隱

屢顛蹟に遭ひて、僅かに其の死を免かる。陶隱は終に其の禍を踏む。論者以謂へらく未だ必らずしも嗚呼島の詩の之が祟りを爲すに非らずんばあらずと。

李大諫の八景の詩に「林間出沒す幾多の屋、天末有無何處の山」と、李政承混永明寺の詩に「長天の去鳥は何く沙平院の詩に「郵吏の送迎は何れの日にか了らん、使華の來往は幾時か休せん」と、三李の句法相似たり、然れども相國の詞語は重複して未だ圓ならず當に降幡を懸つべし。

柳思菴淑、骸骨を乞ふて瑞城に歸老す、權隱の李侍中仁復詩を送りて云ふ、人間の膏火日に相煎る、明哲公の如き史に傳ふべし、已向危時に向つて社稷を安んじ、更に平地に従つて神仙と作る、五湖夢は斷えて、烟波綠に、三徑秋は深くして野菊鮮なり、愧つ我が未だ絨を投じて去ること能はざるを、邇來雙鬢雪飄然たり」と、時に推して傑作となす、然れども未だ幾ならざるに、思菴は逆阼の手に死す、論者以謂へらく、未だ必らずしも權隱の詩の

之詩爲祟蓋明哲之語非時君所樂聞五湖  
二字適犯其怒嗚呼先生之詩實思菴實錄  
而反爲讒賊所構詩可易言哉。

思菴忤逆咤乞退有句云不是忠衰誠意薄  
大名之下久居難讒者伺咤意構曰盛名久  
居本范蠡辭越王語也淑以范自比勾踐比  
王且瑞州近海必效范蠡所爲不如早除翹  
于咤咤白王害之本朝孟文貞公思誠朴貞  
肅公安信同爲臺官坐言事當誅文貞面有  
墨色蒼黃罔措貞肅顏色自若口吟一絕云  
教當千載應河清自謂君王至聖明爾職不  
供甘受死恐君得殺諫臣名以磁尖畫地成  
字曠自語獄吏曰當以詩上聞不則我爲厲  
鬼爾屬無噍類矣太宗聞而霽威赦之古人

祟りを爲すに非ずんばあらずと蓋明哲の語は時君の  
聞くことを樂む所に非ず五湖の二字は適に其の怒を犯  
す嗚呼先生の詩は實に思菴の實錄にして反つて讒賊  
に構へらる詩は言ひ易かる可けんや。

思菴は逆咤に忤ひて退を乞ふ句あり云ふ是れ忠衰へ  
て誠意の薄きにあらず大名の下久しく居り難しと讒  
者咤が意を伺ひて構へて曰く盛名久しく居るは本と  
范蠡の越王に辭する語なり淑は范を以て自から比し  
勾踐を王に比す且つ瑞州は海に近し必ずし蠡の爲す  
所に效はん如かず早く除かんにとはと咤に怨ふ咤は王  
に白して之を害す本朝の孟文貞公思誠朴貞肅公安信  
は同じく臺官たり事を言ふに坐して誅に當す文貞面  
に墨色あり蒼黃として措くこと同じ貞肅は顔色自若  
たり口づから一絶を吟じて云ふ數は千載に當りて河  
の清めるに應ず自から謂く君王は聖明に至らんと爾  
の職は供せず死を受くるを甘んず恐らくは君の諫臣を  
殺すの名を得んことをと磁尖を以て地に畫して字を  
成し目を曠らして獄吏に語りて曰く當に詩を以て上  
聞すべし不らずんば則ち我れ厲鬼と爲らん爾の屬噍  
類なからんと太宗聞きて霽威して之を赦す古人云ふ

云、詩能窮人、亦能達人、予則曰、詩能殺人、亦能活人也。

金奉使若水題任實公館詩曰、老木荒榛夾古蹊、家家猶未飽蕘藜、山禽不識憂民意、唯向林間自在啼、鄭密直允宜題江城縣舍詩曰、凌晨走馬入孤城、籬落無人杏子成、布穀不知王事急、隔林終日勸春耕、鄭詩雖源於金、鍛鍊尤妙、可謂青出於藍者矣。

杜工部詩、身輕一鳥下、脫一字、陳舍人從易與數人各占一字、或云疾、或云落、或云起、或云下、莫能定、後得一本、乃過字也、東坡嘗作病鶴詩、有三尺長脛、闊瘦軀之句、一日瘦上闕一字、令任德章輩下字、終不得穩字、徐出其藁、乃闕字也、詩中一字豈不難乎、鄭司諫

詩は能く人を窮し亦能く人を達すと、予は則ち曰く、詩は能く人を殺し亦た能く人を活すと。

金奉使若水の任實公館に題する詩に曰く、老木荒榛古蹊を夾み、家家猶ほ未だ蕘藜に飽かず、山禽は識らず民を憂ふるの意を、唯た林間に向つて自在に啼くと、鄭密直允宜の江城縣舍に題する詩に曰く、晨を凌ぎ馬を走らして孤城に入る、籬落人なくして杏子成る、布穀は王事の急なるを知らず、林を隔てて終日春耕を勸むと、鄭の詩は金に源すと雖も鍛鍊尤も妙なり、青は藍より出づる者と謂ふへし。

杜工部の詩に、身は軽くして一鳥と、下に一字を脱す、蓋し舍人從易は數人と各一字を占す、或は疾と云ひ、或は落と云ひ、或は起と云ひ、或は下と云ひ、能く定むる莫し、後に一本を得たり、乃ち過の字なり、東坡嘗て、病鶴の詩を作り、三尺の長脛、瘦軀を闊く、の句あり、一日瘦の上に一字を闕き、任德章の輩をして字を下さしむ、終に穩字を得ず、徐ろに其の藁を出せば、乃ち闕の字なり、詩中の一宇豈に難からずや、鄭司諫の大東江の詩に、雨歇み

鮮本東作 482

大東江詩、雨歇長堤草色多、送君南浦動悲歌、大同江水何時盡、別淚年年添作波、燕南洪載嘗寫此詩曰、漲綠波、益齋先生曰、作漲二字皆未圓、嘗是添綠波耳、以予謾見、此老好用拗體、又少陵奉寄高常侍詩、有天涯春色催遲暮、別淚遙添錦水波、添作波之語大有本家風韻、又有來處恨不得見本蘂耳、

半山詩一水護田將綠繞、兩山排闥送青來、前輩以謂護田排闥出漢書、用事精切、牧隱詩、田園未得悠然逝、門巷何曾顯者來、陽村權先生曰、悠然逝、顯者來、皆出軻書、用事不減半山、予嘗愛朱新仲詩、何以報之青玉案、我姑酌彼黃金疊、李師中詩、詩成白也知無敵、花落莫兮可奈何、屬對妙絕、鄭雪谷誦詩、

て長堤草色多し、君を南浦に送りて悲歌を動かす、大同江の水何れの時にか盡きん、別淚年々波を添へ作す、と、燕南洪載嘗て此の詩を寫して曰く、綠波を漲らすと、益齋先生曰く、作漲の二字は皆な未だ圓ならず、當に是れ綠波を添ゆるなるべきのみと、予の謾見を以てするに、此の老は好んで拗體を用ゆ、又た少陵の高常侍に奉寄する詩に、天涯の春色遲暮を催ほす、別淚遙かに添ふ錦水の波といふあり、波を添へ作すの語は大に本家の風韻あり、又た來處あり、恨らくは本蘂を見るを得ざるのみ。

半山の詩に「一水田を護して綠を將て繞り、兩山闥を排して青を送り來る」と、前輩以謂らく、護田排闥は漢書に出づ、事を用ゆること精切と、牧隱の詩に「田園未だ悠然として逝くことを得ず、門巷何ぞ會て顯れたる者の來らんと、陽村權先生の曰く、悠然として逝き、顯れたる者の來るは、皆な軻書に出づ、事を用ゆる半山に減ぜずと、予は嘗て愛す朱新仲の詩に、何を以てか之に報せん青玉案、我は姑らく彼の黄金の疊に酌む」と、李師中の詩に、詩成りて白や敵無きを知る、花落ちて莫や奈何にす可きは、屬對妙絶なり、鄭雪谷誦の詩に、平生吟等と伍するを

鮮本東作

平生恥與喻等伍、後世必有揚雄知、屬對亦妙、不讓二老。

宋莒公落花詩、漢臯佩冷臨江失、金谷樓危到地香、子京云、將飛更作回風舞、已落猶成半面粧、余襄公云、金谷已空新步障、馬嵬徒見舊香囊、其用事精切、金文貞坵詩、飛舞翩翾去卻回、倒吹還欲上、枝開無端一片粘絲網、時見蜘蛛捕蝶來、松都天水寺壁亦、詠落花云、帶雨無情墮、乘風作意回、映溪千萬朵、卻恨十分開、兩詩方莒公諸作、邈乎不可及、然金詩語工而意淺、天水詩意深而語滯、好詩者當辨之。

高麗睿王朝、御樓前木芍藥盛開、命禁署諸儒賦詩、康先生日用、只得頭白老翁看、殿後

つ、後世必らず揚雄の知る有らんと、屬對亦た妙なり、二老に譲らず。

宋莒公の落花の詩に、漢臯佩冷にして江に臨んで失し、金谷樓危ふして地に到りて香はしと、子京の云ふ、將に飛はんとして更に回風の舞を作し、已に落ちて猶ほ半面の粧を成すと、余襄公の云ふ、金谷は已に空し新步障、馬嵬徒らに見る舊香囊と、其事を用ゆること精切なり、金文貞坵の詩に、飛舞翩翾として去つて却て回る、倒に吹て還て枝に上つて開かんと欲す、端なく一片粘網に粘す、時に見る蜘蛛の蝶を捕へ来るをと、松都の天水寺の壁に亦た落花を詠して云ふ、雨を帯ひて情なくして墮も、風に乘して作意に回る、溪に映する千萬朵、卻て恨む十分に開くことをと、兩詩莒公の諸作に方ふれば、邈乎として及ぶ可からざるのみ、然れとも金の詩は語工にして意淺く、天水の詩は意深くして語滯る、詩を好むものは當に之を辨すへし。

高麗の睿王の朝に御樓の前の木芍藥盛に開く、禁署の諸儒に命じて詩を賦せしむ、康先生日用只、頭の白き老翁は殿後に看眼の明なる儒老は、闌邊に倚るの一句を

眼明儒老倚闌邊一句先輩以謂用事精切、予初咀嚼不識其味、後閱昌黎詠木芍藥、有今日欄邊覺眼明、歐陽公詠牡丹有自咲今爲白髮翁之句、然後始知出處用事精切、但恨詞語深僻、韻高才短、如先生者、豈非古人所謂有造內法酒手而無材料者乎。

李平章奎報詩、碧水接天天、接水薄雲如霧、霧如雲、邢典書君紹詩、遠岫似雲雲似岫、碧天如水水如天、僧達令詩、野抱山還山抱野、天吞水亦水吞天、前輩好用是語、令詩並用回文體、語小牽強。

吳僧道潛詩、數聲柔櫓蒼茫外、何處江村人夜歸、語頗清絕、高麗革命、諸王皆屏海島、有僧與一王氏相善者、欲相別、追至海岸、已解

得たり、先輩以謂へらく、事を用ゆる精切なりと、予は初め咀嚼して其の味を識らず、後ちに昌黎の木芍藥を詠するを閲するに、今日欄邊に眼の明なるを覺ゆといへるあり、歐陽公の牡丹を詠するに、自から今は白頭翁と爲るを咲ふの句あり、然る後に始めて出處用事の精切なるを知る、但た恨むらくは詞語深僻にして韻高才の短きことを、先生の如き者は、豈に古人の謂はゆる内法酒を造るの手ありて材料なき者に非すや。

李平章奎報の詩に「碧水は天に接して天は水に接す、薄雲は霧の如くにして霧は雲の如し」と、邢典書君紹か詩に「遠岫は雲に似て雲は岫に似たり、碧天は水の如くにして水は天の如し」と、僧の達令か詩に「野は山を抱いて還た山は野を抱き、天は水を呑んで亦た水は天を呑む」と、前輩は好んで是の語を用ゆ、令か詩は并せて回文の體を用ひ、語は少しく牽強なり。

吳の僧道潛か詩に「數聲の柔櫓蒼茫の外、何の處の江村か人夜歸る」と、語頗る清絶なり、高麗命を革めて諸王皆な海島に屏けらる、僧の一王氏と相ひ善き者あり、相別れんと欲し、追ふて海岸に至れば已に醜を解けり、僧

鮮本合作  
同全下文亦

鮮本小作  
少

鮮本乃作

鮮本將作

鮮本願作  
485

纒矣、僧、揮笠示之、王氏斷衫袖、血書云、一聲柔櫓滄溟遠、且問山僧乃爾何、裏木頭、向岸擲之、不及、僧、泗得之、遙望烟波、已失船帆所、在矣、僧痛哭而返、嗚呼王氏平生才藻、豈與潛相將者歟、亦安可必信、其嘗知潛詩者、然臨危竭情、自與古人詩語相合、其哀怨之詞、至今使人不能無動、詩之感、人深矣。

元學士虞公集、范公德機、楊公仲弘、揭公曼碩、齊名一時、稱爲四家、評者以漢庭老吏、喻虞、唐臨晉帖、喻范、百戰健兒、喻楊、三日新婦、喻揭、虞文靖公嘗作范學士詩序、用此語、揭文安公不悅、以文安之功名事業、尙不遺詩名如此、李陶隱重九感懷詩、去年重九龍山顛、坐客望若登神仙、達可放歌徹寥廓、敬之

東人詩話卷上

は笠を揮ふて之を示す、王氏は衫袖を斷ちて血をもて書して云ふ、一聲の柔櫓滄溟遠し、且つ問ふ山僧乃ち爾るは何ぞと、木頭を裏んで岸に向つて之を擲つ、及ばず、僧因て泗いで之を得たり、遙かに烟波を望めば、已に船帆の在る所を失す、僧痛哭して返る、嗚呼王氏は平生才藻、豈に潛と相ひ將る者ならんや、亦た安んぞ必らず其の嘗て潛の詩を知る者なるを信す可けんや、然れども危に臨んで情を竭して、自から古人の詩語と相合ふ、其の哀怨の詞は、今に至るまで人をして動く無きこと能はざらむ、詩の人を感ずること深し。

元の學士虞公集に范公德機、楊公仲弘、揭公曼碩は名を一時に齊ふす、稱して四家と爲す、評する者は漢庭の老吏を以て虞に喻へ、唐の臨晉帖を范に喻へ、百戰の健兒を楊に喻へ、三日の新婦を掲に喻ふ、虞文靖公嘗て范學士の詩の序を作りて此の語を用ふ、掲文安公悦ばず、文安の功名事業を以て、尙ほ詩名を遺れざる、此の如し、李陶隱の重九感懷の詩に、去年の重九龍山の顛、坐客望は神仙に登るか若し、達可放歌して寥廓に徹す、敬之筆を下せば雲烟横ふと、達可は則ち寥廓にして、敬之は則ち惴若齋なり、陶隱は寥廓に於て獨り其の詩を讀して詩に

二七

下筆橫雲烟達可、則圃隱敬之、則惕若齋也、陶隱於圃隱、獨讚其詞、而不及詩、雖以圃隱之大度、頗有不悅處、古之大人君子以詩自重如此。

詞  
本  
詩  
作

北  
鮮  
本  
比  
作

樂府句句字字皆協音律、古之能詩者尙難之、陳后山楊誠齋皆以謂蘇子瞻樂詞雖工、要非本色語、況不及東坡者乎、吾東方語音與中國不同、李相國李大諫、猊山牧隱、皆以雄文大手、未嘗措手、唯益齋備述衆體、法度森嚴、先生比學中原、師友淵源、必有所得者、近世學者不學音律、先作樂府、欲爲東坡所不能、其爲誠齋后山之罪人明矣。

詩忌踏襲、古人曰、文章當出機杼成、一家風骨、何能共、人生活耶、唐宋人多有此病、近代

及ばず、圃隱の大度を以てすと雖も、頗る悦びざる處あり、古の大人君子は、詩を以て自ら重んずると此の如し。

樂府は句々字々皆な音律に協ふ、古の詩を能くする者も尙ほ之を難んず、陳后山楊誠齋皆な以謂へらく、蘇子瞻の樂詞は工なりと雖も、要するに本色の語に非ず、況んや東坡に及はざる者をや、吾か東方の語音は、中國と同じからず、李相國李大諫、猊山牧隱皆な雄文大手を以て未だ嘗て手を措かず、唯た益齋は備さに衆體を述へて法度森嚴なり、先生比ころ中原に學ぶ師友淵源必らず得る所の者あらん、近世の學者は音律を學ばず、先づ樂府を作りて、東坡の能はざる所を爲さんと欲す、其の誠齋后山の罪人爲ること明けし。

詩は踏襲を忌む、古人の曰く、文章は當さに機杼を出して一家の風骨を成すべし、何を能く人と共に生活せんや、唐宋の人は多く此の病あり、近代洪中令子藩か詩に、

洪中令子藩詩、愧將林下轉、經手遮卻斜陽、  
向帝京、韓復齋宗愈詩、卻將般鼎調羹手、還  
把漁竿下晚沙、陽村權文忠公詩、卻將澗色  
絲綸手、能倒山村麥酒盃、李陶隱詩、如何釣  
竿手、策馬向京都、皆不免相襲之病、杜牧詩  
曰、惆悵江湖釣竿手、卻遮西日向長安、後人  
祖其語、致此屋下架屋也。

宮殿朝謁之類、詩家多用富貴綺麗之語、如  
老杜早朝大明宮、岑參賈至之徒、和者非一、  
皆極豔麗、無爐頭寒乞之聲、牧隱天壽節入  
朝大明殿詩、大明堂曉色寒、旌旗高拂玉  
闌干、雲開寶座聞天語、春滿金卮奉聖懽、六  
合一家堯日月、三呼萬歲漢衣冠、不知身世  
今安在、疑是青冥控紫鸞、通亭姜淮伯亦赴

「愧づらくは林下經を轉するの手を將て、斜陽を遮卻し  
て帝京に向ふことを」と、韓復齋宗愈の詩に「卻て般鼎調  
羹の手を將て、還て漁竿を把つて晚沙に下ると」、陽村權  
文忠公の詩に「卻て絲綸を澗色するの手を將て、能く山  
村麥酒の盃を倒すと」、李陶隱の詩に「如何そ釣竿の手、馬  
に策つて京都に向はんと」、皆な相襲ふの病を免れず、杜  
牧の詩に曰く「惆悵す江湖釣竿の手、卻て西日を遮つて  
長安に向ふ」と、後人其の語を祖とす、此の屋下に屋を架  
するを致すなり。

宮殿朝謁の類は詩家多く富貴綺麗の語を用ゆ、老杜の  
早に大明宮に朝するか如き、岑參賈至の徒、和する者  
一にあらざる、皆な豔麗を極めて、爐頭寒乞の聲無し、牧隱  
天壽の節に大明殿に入朝する詩に「大に明堂を闢いて曉  
色寒く、旌旗高く拂ふ玉闌干、雲は寶座に開きて天語を  
聞き、春は金卮に満ちて聖懽を奉ず、六合は一家なり堯  
の日月、三呼萬歲す漢の衣冠、知らず身世今安にか在る、  
疑らくは是れ青冥の紫鸞を控くか」と、通亭の姜淮伯  
も亦た南京に赴きて、早に奉天殿に朝するを賦する詩  
に、「御溝の楊柳正に依々たり、月は甌後に上つて玉漏遲

南京賦、早朝奉天殿詩、御溝楊柳正依依、月上、觚稜玉漏遲、環佩丁當鶻鷺集、羽林磨戛、虎賁馳、鬚頭忽暗香烟動、鳳尾徐開彩仗移、稽首紅雲瞻肅穆、日光先照萬年枝、蓋有得於賈杜諸公餘賸矣、宣德年間、牧隱之孫李文烈公季甸、赴燕京朝罷出掖、主客郎中請賦、早朝詩、文烈嘗書牧隱詩示之、主客大加稱賞、後通亭之孫姜文景公孟卿、將赴燕京、文烈戲曰、奈如華士試、文何、文景應聲曰、吾家亦有通亭集、滿座絕倒。

文章所尚、隨時不同、古今詩人、推李杜爲首、然宋初楊大年以杜爲村夫子、酷愛李長吉詩、時人效之、自歐蘇梅黃一出、盡變其體、然學黃者尤多、西江宗派是已、高麗文士專尚

し、環佩丁當として鶻鷺集り、羽林磨戛して虎賁馳す、鬚頭忽ち暗くして香烟動き、鳳尾徐く開き、彩仗移る、紅雲に稽首して肅穆を瞻む、日光先つ照す萬年の枝と、蓋、賈杜諸公の餘賸を得るあり、宣德年間に牧隱の孫李文烈公季甸燕京に赴きて朝罷て掖を出つ、主客郎中早朝の詩を賦せんことを請ふ、文烈嘗みて牧隱の詩を書して之を示す、主客大に稱賞を加ふ、後に通亭の孫姜文景公孟卿、將に燕京に赴かんとす、文烈戲れて曰く、華士の文を試むるを奈如何せんと、文景聲に應じて曰く、吾家にも亦た通亭集ありと、滿座絶倒す。

文章の尙ふ所は時に随つて同からず、古今の詩人は李杜を推して首となす、然れども宋の初め楊大年は杜を以て村夫子と爲し、酷た李長吉の詩を愛す、時の人之に效ふ、歐蘇梅黃の一たび出でてより、盡く其の體を變す、然とも黃を學ぶ者は尤も多し、西江の宗派は是のみ、高麗の文士は專はら東坡を尙ふ、及弟の榜出つる毎に、則ち人

東坡、每及第榜出、則人曰、三十三東坡出矣、高元問宋使求詩、學士權適贈詩曰、蘇子文章海外聞、宋朝天子火其文、文章可使爲灰燼、千古芳名不可焚、宋使嘆服、其尙東坡可知也已、

前輩以俞參政穴口寺詩、晦朔潮爲曆、寒暄草記辰爲工、予嘗讀陶元亮詩、雖無紀曆誌、四時自成歲、唐人詩、山僧不解數甲子、一葉落知天下秋、古人有此等意思、但俞之粧點自妙、

古人詩不厭改、少陵詩聖也、其曰桃花細逐楊花落、黃鳥時兼白鳥飛、屢經刪改、牧隱嘗與子麟齋種學、登西州樓有題元、西林石堡入雲端、亭榭含風夏尙寒、行至半途種學曰、

詳本充作  
云

489

曰く、三十三の東坡出つと、高元の間、宋使詩を求む、學士權適、詩を贈りて曰く、蘇子の文章は海外に開ゆ、宋朝の天子其の文を火く、文章は灰燼と爲らしむ可きも、千古の芳名は焚く可からず」と、宋使歎服す、其の東坡を尙ふこと知る可きのみ。

前輩、俞參政の穴口寺の詩、晦朔潮、曆を爲し、寒暄、草、辰を記すといふを以て工と爲す、予嘗て陶元亮の詩を讀むに、紀曆の誌無しと雖も、四時自から歲を成す」と、唐人の詩に、山僧は甲子を數ふるを解せず、一葉落ちて天下の秋を知る」と、古人に此等の意思あり、但だ俞の粧點は目から妙なり。

古人の詩は改むるを厭はず、少陵は詩聖なり、其れ曰く「桃花は細かに楊花を逐ふて落ち、黃鳥は時に白鳥と飛ぶは、屢ばく、刪改を経ると、牧隱嘗て子麟齋種學と西州樓に登りて題あり、元、西林の石堡は雲端に入る、亭榭風を含んで夏尙寒し」と、行きて半途に至りて、種學の

大人詩中尙字、不如亦字之穩、牧隱曰、果是也、促令返改之、尙亦雖一意、殊不如亦字尤穩。

歲丁丑、高大常閔、奉使來題太平館樓、古風一篇、自批曰、精深雅健、極盡豪華之態、又賦卻鞍馬詩曰、漢文既是輕千里、祖逖無心著一鞭、自批曰、老健、予觀太平樓詩、浮靡輕纖、漢文卻馬、非人臣所當用、是何等語、而高之自批若、是乎、予薄其爲人也、但劉賓客禹錫平淮詩、城中啞啞晨鷄鳴、城中鼓角聲和平、自批曰、爲盡李愬之美、又云、始知元和十四載、四海重見升平年、自批云、爲盡憲宗之美、劉詩固好、至於自批、亦未免詩人輕率之病、況不及劉而自批乎。

曰く、大人の詩中の尙の字は、亦の字の穩なるに如かずと、牧隱か曰く果して是なりと、促に返つて、之を改めしむと、尙と亦とは一意なりと雖も、殊に亦の字の尤も穩なるに如かず。

歳の丁丑に、高大常閔、使を奉じて來りて太平館の樓に題す、古風一篇、自から批して曰く、精深雅健、豪華の態を極め盡すと、又た鞍馬を卻くる詩を賦して曰く、漢文既に是れ千里を輕んず、祖逖は一鞭を著くるに心なしと、自から批して曰く老健なりと、予は觀るに太平樓の詩は、浮靡輕纖にして、漢文の馬を卻くること、人臣の當に用ふべき所にあらず、是れ何等の語にして而かも高が自から批することは、是の若きや、予は其の人と爲りを薄んずるなり、但だ劉賓客禹錫の平淮の詩に、城中啞々として晨雞鳴く、城中の鼓角聲和平爲りと、自から批して曰く、爲めに李愬の美を盡すと、又た云はく、始めて知る元和十四載、四海重ねて見る外平の年と、自から批して云く、爲めに憲宗の美を盡すと、劉の詩は固より好し、自から批するに至りては亦た未だ詩人輕率の病を免れず、況んや劉に及ばずして自から批するをや。

古人詩煉格、煉句、煉字、又就師友求其疵而去之、曾吉甫贈汪彥章詩、白玉堂中曾草詔、水晶宮裡近題詩、先示韓子蒼、子蒼改兩字云、白玉堂深曾艸詔、水晶宮冷近題詩、迥然與前句不侔、雙梅李狀元詹與郊隱鄭文定公以吾論詩自詫嘗得句云、烟橫杜子秦淮夜、月白坡仙赤壁秋、郊隱吟玩再三、但曰、籠小、李初不認、鄭徐吟曰、煙籠杜子秦淮夜、月小坡仙赤壁秋、籠小二字比前精彩百倍。

古人詩多用經書語、李師中云、夜如何其斗欲落、歲云暮矣天無晴、牧隱云、月獨有情從我、蔡山多不俗、起予商、木鐸二三何患子、舞零六七詠歸童、王風幸矣興於魯、女樂胡然至、自齊、用辭不窘、工緻可尙。

古人の詩は格を煉り、句を煉り、字を煉りて、又た師友に就て其の疵を求めて之を去る、曾吉甫が汪彥章に贈る詩に、白玉堂中曾て詔を草し、水晶宮裡近く詩を題すと、先づ韓子蒼に示す、子蒼は兩字を改めて云く、白玉堂深くして曾て詔を草し、水晶宮は冷にして近く詩を題すと、迥然として前の句と侔しからず、雙梅の李狀元詹は、郊隱の鄭文定公以吾と詩を論じて自から詫す、嘗て句を得たり云ふ、烟は横ふ、杜子秦淮の夜、月は白し、坡仙赤壁の秋と、郊隱吟玩すること再三にして、但だ曰く籠小と、李は初め認めず、鄭徐吟して曰く、煙は籠む、杜子秦淮の夜、月は小なり、坡仙赤壁の秋と、籠小の二字、前に比すれば精彩百倍す。

古人の詩は多く經書の語を用ふ、李師中が云ふ、夜如何んぞ斗落ちんと欲す、歲云に暮れぬ天は晴るゝことなしと、牧隱の云ふ、月獨り情あり我に蔡に従ふ、山は多く俗ならず予を起す商、木鐸二三何ぞ患へん子、舞零六七詠して歸る童、王風幸なるかな魯に興る、女樂胡そ然く齊より至らんと、辭を用ふること窘せず、工緻尙ふべし。

鮮本頃作  
須

鮮本儘作  
情

古人云、天下無、無對之句、東坡詩、公獨未知、其趣耳、臣今時復一中之、今古以爲奇對、近有薛司藝緯、忤執政、擬職、有句云、怒於甲者、移於乙、用則行之、捨則藏、頃在春坊、聯句有占治字者曰、治國其猶指諸掌、崔文靖公恆對曰、存人者莫良於眸、儘乎天下無、無對之句。

洞庭巴陵、天下壯觀、騷人墨客題詠者多、如水涵天影瀾、山拔地形高、四顧疑無地、中流忽有山、鳥飛應長墮、帆過卻如閑、俱見稱於世、然不若孟襄陽、氣蒸雲夢澤、波撼岳陽城、又不若少陵吳楚東南坼、乾坤日夜浮、未知此老胸中、藏幾箇雲夢、歟、牧隱吳中八景一絕云、一點君山夕照紅、瀾吞吳楚勢無窮、長

古人の云く、天下對なきの句なし、東坡の詩に、公獨り未だ其の趣を知らざるのみ、臣は今時に復た一たび之に中てらる」と、古今以て奇對となす、近ごろ薛司藝緯あり、執政に忤ひて職を擬はる、句あり云ふ、甲に怒る者は乙に移す、用ゆるときは則ち行ひ捨るときは則ち藏ると、頃春坊に在りて聯句に治の字を占むる者あり、曰く國を治むるは其れ猶ほ諸を掌に指すがごとしと、崔文靖公恆對して曰く、人に存する者は眸より良きは莫しと、儘乎天下に對なきの句なし。

洞庭巴陵は天下の壯觀にして、騷人墨客の題詠する者多し、水は天影を涵して瀾く、山は地形を拔て高し、四顧地なきかと疑ふ、中流忽ち山あり、鳥は飛んで應に墮ちんことを畏るべし、帆は過ぎて卻て閑なるが如しの如き、俱に世に稱せらる、然ども孟襄陽の、氣は蒸す雲夢澤、波は撼かす岳陽城に若かず、又た少陵の、吳楚東南に坼け、乾坤日夜に浮ぶに若かず、未だ知らず此老の胸中に幾箇の雲夢を藏するや、牧隱の吳中八景の一絶に云ふ、一點の君山夕照紅なり、瀾く吳楚を呑んで勢窮りなし、長風吹き上す黃昏の月、銀燭紗籠暗淡の中」と、其の曠漠冲融

風吹上黃昏月、銀燭紗籠暗淡中、其曠漠沖融之氣、雖不及老杜徑庭、豈足多讓於前數聯哉。

半山與東坡不相能、然讀東坡雪後又韻詩、追次至六七篇、終曰不可及、時人服其自知甚明、一日三峯假寐、族姪黃鉉、從傍誦陶隱居從詩、鼓角滄江動、旗旌白日陰、詞臣多侍從、會見獻虞箴、三峯忽開眼、令鉉再誦曰、詩韻清圓似唐詩、鉉曰、李簽書崇仁取著也、三峯曰、兒子輩何從得惡詩來乎、嗚呼、以半山之執拗自是、尙不廢公論、鄭之不及半山、亦遠矣。

李大諫仁老瀟湘八景絕句、清新富麗、工於描寫、陳右諫澤七言長句、豪健峭狀、得之詭

の氣は老杜の徑庭に及ばずと雖も、豈に多く前の數聯に讓るに足らんや。

半山は東坡と相能からず、然れども東坡の雪後又韻の詩を讀んで、追て次すること六七篇に至り、終に曰く及ぶ可からずと、時の人其の自から知ること甚だ明なるに服す、一日三峯假寐す、族姪黃鉉より陶隱の扈從の詩「鼓角滄江動、旌旗白日陰、詞臣多く侍從す、虞箴を獻するを見るに會ふ」といへるを誦す、三峯忽ち眼を開きて鉉をして再び誦せしめて曰く、詩韻清圓にして唐詩に似たりと、鉉の曰く、李簽書崇仁の著はす所なりと、三峯の曰く、兒子輩何くよりして惡詩を得來るやと、嗚呼、半山の執拗にして、自からは是とするを以てすら、尙ほ公論を廢せず、鄭の半山に及ばざること亦た遠し。

李大諫仁老の瀟湘八景の絶句は、清新富麗にして描寫に工なり、陳右諫澤の七言の長句は、豪健峭狀、之を詭奇に得たり、皆な古今の絶唱なり、後の作者は未だ伯仲し易

奇皆古今絕唱、後之作者未易伯仲、惟益齋李文忠公絕句樂府等篇、精深典雅、舒閑容與、得與二老頡頏、上下於數百載之間矣。

僧幻庵、書法妙絕、得晉體、一時求書者、盈集然所書必觀詩文、心肯然後始下筆、廣平李侍中仁任、得尹泮畫十二幅屏風、令茂松尹會宗作詩、倩幻庵筆之、庵曰、詩欲傳後、非牧老不可、世有牧老、而敢題屏障者、僧也、即折簡邀牧老于方丈、牧老曰、若邀老物、當用安和寺泉煎茶、牧老既至、即席口號賦十二絕、筆勢生風、隨賦輒令庵書之、至滕王閣末句曰、當日江神知我不、何時更借半帆風、卷投筆大叫曰、政用王勃本色事、此最警絕、如牧老、真詩聖也、書訖遂成三絕、廣平珍藏之、後

からず、惟だ益齋の李文忠公の絶句樂府等の篇は、精深典雅にして、舒閑容與、二老と數百載の間に頡頏上下することを得たり。

僧の幻庵は書法妙絶にして晉の體を得たり、一時書を求むる者盈集す、然れども書する所は必らず詩文を觀て心肯して然後に始めて筆を下す、廣平の李侍中仁任は尹泮の畫十二幅の屏風を得たり、茂松の尹會宗をして詩を作らしめ、幻庵を倩ひ之を筆せしむ、庵の曰く、詩後に傳へんと欲せば、牧老に非ずんば不可なり、世に牧老ありて而して敢て屏障に題する者は僧なりと、即ち折簡して牧老を方丈に邀ふ、牧老の曰く、若し老物を邀へば、當に安和寺の泉を用ひて茶を煎るべしと、牧老既に至り、即席に口號して十二絶を賦す、筆勢風を生ず、賦する隨つて輒ち庵をして之を書せしむ、滕王閣の末句に、當日の江神我を知るや不や、何れの時か更に半帆の風を借らんと曰ふに至り、庵は筆を投じて大に叫んで曰く、政に王勃本色の事を用ゆ、此れ最も警絶なり、牧老の如きは、真に詩聖なりと、書し訖りて遂に三絶と成る、廣平之を珍藏す、後に雲庵の澄公清叟、重ねて長城縣白庵寺の楹を

雲菴澄公清叟重修長城縣白菴寺樓請名於三峯鄭先生三峯名以克復而記之使其徒絕澗倫師受楮於幻菴菴曰此非吾所書也牧老在世而敢爲長文大作歟卽令沙彌僧絕澗往牧老請名若記牧老訊絕澗澗曰寺在二水間而水合于寺之源東西分流又合于樓前爲澗然後出山牧老曰然則可名雙溪樓操筆記之文無加點其末有云予老矣明月滿樓無由宿其中恨不少年爲客耳幻菴受而書之嘆曰唐人詩有明月雙溪水春風八詠樓少年爲客處今日送君遊之句此老政用此語而無斧錯痕真妙手也牧老竟坐詩案事叵測亦未必非幻菴輩爲祟也

動安居士李承休詠雲詩一片終從泥上生

修して名を三峯の鄭先生に請ふ三峯名づくるに克復を以てし而して之を記す其の徒の絶澗倫師をして楮を幻庵に受けしむ庵の曰く此れ吾が書する所に非ず牧老世に在り而るに敢て長文大作を爲さんやと卽ち沙彌をして絶澗と僧に牧老に往かして名若しくは記を請ふ牧老絶澗に訊ふ澗の曰く寺は二水の間に在り而して水は寺の源に合して東西に分れ流れ又た樓前に合して澗と爲り然して後に山を出づと牧老の曰く然らば則ち雙溪樓と名づく可しと筆を操り之を記す文は點を加ふる無し其の末に云へる有り予は老たり明月樓に滿ちて其の中に宿するに由なし恨らくば少年にして客とならざりしをと幻庵受けて之を書して嘆して曰く唐人の詩に明月雙溪の水春風八詠の樓少年にして客と爲るの處今日君の遊ふを送るの句あり此の老は政に此語を用ゆ而して斧錯の痕なし真に妙手なりと牧老は竟に詩案に坐して事測り叵し亦た未だ必らずしも幻庵か輩の祟りを爲すに非ずんばあらず

動安居士李承休の雲を詠する詩に「一片纔かに泥土より

東西南北便縱橫、謂爲霖雨蘇群稿、空掩中天日月明、頗含譏諷、承休仕忠烈朝爲御史、言事落職、卜居頭陀山、終身不仕、蓋以雲之掩日月、以比群小壅蔽之狀、予嘗見僧奉忠贈章惇夏雲詩、如蜂如火復如綿、飛過微陰落檻前、大地生靈欲死不成、霖雨謾遮天、李詩實祖於忠、而詞意俱圓、古人以謂述者未必不賢於作者、信哉。

作詩非難、而知詩爲尤難、李文順嘗評古之詩、以梅聖俞爲不佳、池塘生春草、爲非驚語、而徐凝瀑布詩爲妙、然東坡稱徐爲惡、歐陽子以梅爲工、春草之句、古今絕唱、而詩之評品如是、知詩豈不爲難乎、文順沙平院詩、朝日初昇宿霧收、促鞭行到漢江頭、天王不返

生、東西南北便ち縱橫、謂ふ霖雨と爲りて群稿を蘇せんと、空しく掩ふ中天日月の明と、頗る譏諷を含む、承休は烈の朝に仕へて御史となり、事を言ひて職を落して頭陀山に卜居し、身を終るまで仕へず、蓋、雲の日月を掩ふを以て、以て群小の壅蔽の狀に比す、予は嘗て僧奉忠の章惇に贈りし夏雲の詩を見るに、峯の如く火の如く復た綿の如し、飛び過ぎて微陰檻前に落つ、大地の生靈は乾いて死せんと欲す、霖雨を成さず謾に天を遮ると、李の詩は實に忠を祖とし而して詞意俱に圓なり、古人以謂へらく述者未だ必らずしも作者より賢らざるばあらずと、信なるかな。

詩を作るは難きに非ず、而して詩を知るは尤も難しと爲す、李文順嘗て古の詩を評して、梅聖俞を以て佳ならずと爲し、池塘春草を生ずる驚語に非ずと爲し、而して徐凝の瀑布の詩を妙と爲す、然れども東坡は徐を稱して惡となし、歐陽子は梅を以て工と爲す、春草の句は、古今の絶唱にして李の評品は是の如し、詩を知ること豈に難しと爲さざらんや、文順の沙平院の詩に、朝日初めて昇りて宿霧收る、鞭を促して行きて漢江の頭りに

憑誰問沙鳥閑飛水自流。趙石澗選入三韓龜鑑批曰：天王不返未知指言何事。然尙取之何耶。以今考之。漢江無天王不復等事。雖用左語亦不好。

予嘗春坊諸學士論入聲通押是非。或曰少陵詩聖也。平生未嘗通押。如早秋射洪縣詩終篇用緝韻。予曰：子於杜詩未熟。如戲呈元十二詩。末字韻傍用五韻。南池谷字韻旁用四韻。客堂蜀字韻旁用三韻。老杜何嘗不通押乎。至如昌黎則傍出六七韻。乍離乍合。縱橫泛溢。如此日足。可惜一篇是已。東坡贈陳季常詩韻旁用六韻。子何怪於通押乎。或者乃屈然觀歷古人入聲通押者。百中之一二。祇足見其才窘耳。夫已多乎哉。

東人詩話卷上

到る天王は返らず誰に憑つてか問はん。沙鳥閑に飛んで水自ら流ると。趙石澗選んで三韓龜鑑に入れ。批して曰く。天王は返らずとは。未だ何事を指し言ふを知らずと。然れども尙ほ之を取るは何ぞや。今を以て之を考ふるに。漢江に天王復らざる等の事なし。左傳の語を用ゆ。雖もた好からず。

予嘗春坊の諸學士と入聲通押是非を論ず。或ひと曰く。少陵は詩聖なり。平生未嘗通押せず。早秋射洪縣を發する詩の如き。終篇緝の韻を用ゆ。予が曰く。子は杜の詩に於て未だ熟せず。戲れに元十二に呈する詩の如き。末の字の韻。旁ら五韻を用ゆ。南池谷の字の韻。旁ら四韻を用ゆ。客堂蜀の字の韻。旁ら三韻を用ゆ。老杜何ぞ嘗て通押せざらんや。昌黎の如きに至りては。則ち旁ら六七韻を出す。乍に離れ乍に合して。縱橫泛溢す。此の日惜む可きに足るの一篇の如き。是れのみ。東坡の陳季常に贈る詩の韻。旁ら六韻を用ゆ。子何ぞ通押を怪しまんやと。或者乃屈す。然れども古人入聲通押の者を觀歷するに。百中の一二のみ。祇に其の才の窘むを見るに足るのみ。夫れ已だ多からんや。

三九

古人未有以人姓押韻作詩者唯宋升平公主壻郭曖盛會文士賦詩有李端者爲一時巨擘郭起請端以姓錢爲題端有銅埒金山之句衆稱妙絕高麗崔忠獻集門客四十餘人賞冬日牡丹以諸姓押韻賦詩李文順亦賦一篇有皇后趙張京尹紫大宋迷下蔡照夜車森湛盧等押韻處尤佳亦一詩家俳優非正體也。

詩雖細事然古人作詩必期傳後故少陵有老去新詩誰與傳又清詩句句自堪傳將詩不必萬人傳之句韓子蒼亦云詩文當得文人印可乃自不疑所以前輩汲汲於求知也自魏晉唐宋以來及我高麗文士尙然近世文士有志者少不留意於詩況敢期於傳後

古人は未だ人の姓を以て韻に押しして詩を作る者有らず唯が宋の升平公主の壻郭曖は盛に文士を會して詩を賦す李端といふ者あり一時の巨擘たり郭起て端に請ふて姓錢を以て題と爲す端に銅埒金山の句あり衆妙絶と稱す高麗の崔忠獻は門客四十餘人を集めて冬日の牡丹を賞して諸姓を以て韻に押しして詩を賦す李文順亦た一篇を賦す皇后趙張京尹紫大宋迷下蔡照夜車森湛盧等の押韻の處あり尤も佳なり亦た一詩家の俳優にして正體に非ず。

詩は細事と雖も然れども古人の詩を作る必らず後に傳へんことを期す故に少陵に「老ひ去て新詩誰れにか傳へん」又「清詩句句自から堪へたり」詩を將て必らずしも萬人に傳へずの句あり韓子蒼も亦云ふ詩文は當に文人の印可を得て乃ち自から疑はざるべし前輩の知を求むるに汲々たる所以なり魏晉唐宋より以來及び我高麗の文士尙ほ然り近世の文士の志ある者の少ふして意を詩に留めず沉んや後に傳ふるを期せんや

哉。間或有志者、以詩文求見、正於先生長者、群聚而誹笑之、文章氣習日就卑陋、何足怪哉。

李大諫仁老題天水寺壁云、待客客未到、尋僧僧亦無、唯餘林外鳥、款曲勸提壺、古之評詩者以謂詩能狀難寫之景、如在目前、含不盡之意、見於言外、然後爲、予於此詩見之矣、且韓昌黎詩、喚起窓全曙、催歸日未西、無心花裏鳥、更與盡情啼、蓋催歸喚起、皆鳥名、提壺亦鳥名、李詩自然有韓法。

占人云、句法不當、重疊、如淮海小詞、杜鵬聲裏斜陽暮、蘇東坡曰、此詞高妙、但既云斜陽、又云暮、重疊也、李大諫題漁陽詩云、槿花低映碧山峰、卯酒初酣白玉客、舞罷霓裳儘未

間、或は志ある者の詩文を以て先生長者に正されんことを求むれば、群聚して之を誹笑す、文章の氣習日に卑陋に就くこと、何ぞ怪しむるに足らんや。

李大諫仁老は天水寺の壁に題して云く、客を待てども客は未だ到らず、僧を尋ねれば僧も亦た無し、唯だ林外の鳥を餘して、款曲に提壺を勸むと、古の詩を評する者は以謂らく、詩は能く寫し難きの景を狀して目前に在るが如くし、不盡の意を含んで言外に見はれ、然る後に至れりと爲すと、予は此の詩に於て之を見る、且つ韓昌黎の詩に喚起すれば窓は全く曙く、催歸日未だ西せず、無心花裏の鳥、更に與に情を盡して啼くと、蓋し催歸、喚起は皆な鳥の名、提壺も亦た鳥の名なり、李の詩は自然に韓の法あり。

古人云ふ、句法は當に重疊すべからず、淮海の小詞に、「杜鵬聲裏斜陽の暮」といふが如き、蘇東坡の曰く、此の詞は高妙なり、但し既に斜陽と云ひ、又た暮と云ふは、重疊なり、李大諫の漁陽に題する詩に云ふ、槿花低して映す碧山の峯、卯酒初めて酣なり、白玉の客、舞ひ罷て霓裳儘

足、一朝雷雨送猪龍、此詩亦好、但既曰碧山、而又曰峰、亦未免重疊之病。

鄭谷登第後、宿平康里、有詩云、春來無處不閑行、此地相看別有情、好是五更殘酒醒、耳邊聞喚狀元聲、有自誇狀元氣象、牧隱云、賴有虛名足驚座、益齋門下狀元郎、權止齋詩、誰知今日觀風使、曾是龍門第一人、圓鑑國師、俗姓魏、名元凱、登甲科、官至樞密、出家、嘗有詩云、誰知雞足山中老、曾是龍頭會上賓、老髡亦有自負之語。

唐詩、幽閨小婦不知愁、春日凝粧上小樓、忽見陌頭楊柳色、悔教夫婿覓封侯、古今以爲絕唱、曾見高平章兆基寄遠詩、錦字裁成寄玉關、勸君珍重好加餐、封侯自是男兒事、不

ひ未だ足らず、一朝雷雨猪龍を送ると、此の詩も亦た好し、但、既に碧山と曰ひて、又た峯と曰ふも、亦た未だ重疊の病を免れず。

鄭谷、登第の後に、平康里に宿して、詩あり云く、春來處として閑行せざるなし、此の地相看て別に情あり、好し、是れ五更殘酒醒む、耳邊に狀元を喚ぶ聲を聞くこと、自から狀元に誇る氣象あり、牧隱の云ふ、賴に虛名の座を驚かすに足るあり、益齋門下狀元郎と、權止齋の詩に、誰か知らん今日の觀風使、曾是是れ龍門第一の人と、圓鑑國師、俗姓は魏、名は元凱、甲科に登り、官は樞密に至る、出家す、嘗て詩あり云く、誰か知らん雞足山中の老、曾是是れ龍頭會上の賓と、老髡も亦た自負の語あり。

唐詩に、幽閨の小婦は愁を知らず、春日粧を凝らして小樓に上る、忽ち陌頭楊柳の色を見て、悔らくは夫婿をして封侯を覓めしむることをと、古今以て絶唱となす、曾て高平章兆基の遠に寄する詩を見るに、錦字裁し成して玉關に寄す、君に勸む珍重好し加餐せよ、封侯は自から

正鮮本  
止作

少鮮本  
小作

斬樓蘭未擬還、唐詩雖好、不過形容念夫之深、愛夫之篤、情意狎昵之私耳、高詩句法不及唐詩遠甚、然先之以思念之深、信書之勤、繼之以征戍之慎、飲食之謹、卒勉之以功名事業之盛、無一語及乎燕昵之私、隱然有國風之遺意、詩可以工拙論乎哉。

古人詩多用佛家語、以騁奇氣、如陳翰林澤詩、水分天上真身月、雲漏江邊本色山、李益齋詩、此物非他物、前身定後身、皆好、然王荆公寫真詩云、我與丹青兩幻身、世間流轉會成塵、但知此物非他物、莫問前身是後身、李詩述半山、未若陳之意新而語奇。

鄧雪谷聞普濟寺鐘詩、金銀佛寺側、城闕夜夜鳴、鐘不失、晨誰道令人發、深省、祇能喚起

是れ男兒の事なり、樓蘭を斬らざんば未だ還るを擬せずと、唐詩は好しと雖も夫を念ふの深く、夫を愛するの篤く、情意狎昵の私を形容するに過ぎざるのみ、高の詩は句法は唐詩に及ばざる遠きこと甚だし、然るに之に先ずるに思念の深き信書の勤を以てし、之に繼ぐに征戍の慎み、飲食の謹を以てし、卒に之を勉むるに功名事業の盛を以てす、一語の燕昵の私に及ぶ無し、隱然として國風の遺意あり、詩は工拙を以て論ず可けんや。

古人の詩は多く佛家の語を用ひて、以て奇氣を騁す、陳翰林澤の詩に「水分天上真身の月、雲は漏らす江邊本色の山」と、李益齋の詩に「此物は他物に非ず、前身は定めて後身」と、皆な好し、然ども王荆公の寫真の詩に云ふ、「我と丹青と兩なから幻身、世間流轉して塵と成るべし、但だ此の物の他物に非ざることを知らば、問ふ莫れ前身は是れ後身」と、李の詩は半山を述べて、未だ陳の意の新にして語の奇なるに若かず。

鄧雪谷の普濟寺の鐘を聞く詩に「金銀の佛寺城闕に側ふ夜々鐘を鳴らして晨を失はず誰か道ふ人をして深省を發せしむと、祇た能く利名の人を喚起す」と、世以て

利名人世以謂佳作、然中州集、祝太常簡詩、寒雞縮頸未鳴晨、已聽春容入夢頻、未必佛徒能警悟、祇能喚起利名人、鄭詩摸擬太過、凡詩用事、當有來處、苟出己意、語雖工、未免矻者之譏、高麗忠宣王入元朝、開萬卷堂、學士閻復、姚燧、趙子昂、皆遊王門、一日王占一聯云、雞聲恰似門前柳、諸學士問、用事來處、王默然、益齋李文忠公從、傍卽解曰、吾東人詩、有屋頭初日金雞唱、恰似垂楊裊裊長、以雞聲之軟、比柳條之輕纖、我殿下之句、用意也、且韓退之琴詩、曰浮雲柳絮無根蒂、則古人之於聲音、亦有以柳絮比之者矣、滿座稱嘆、忠宣詩句、無益老之救、則幾窘於矻者之鋒矣。

鮮本句作  
苟

佳作と謂ふ、然れども中州集に祝太常簡の詩に寒雞頸を縮めて未だ晨に鳴かず、已に聽く春容の夢に入りて頻りなるを、未だ必らずしも佛徒の能く警悟せず、祇た能く利名の人を喚起すと、鄭の詩摸擬大に過ぎたり。

凡そ詩に事を用ゆること、當に來處あるべし、苟も己の意を出すときは語は工なりと雖も、未だ矻者の譏りを免れず、高麗の忠宣王は元朝に入りて、萬卷堂を開く、學士閻復、姚燧、趙子昂、や王の門に遊ぶ、一日王一聯を占めて云く、雞聲は恰も門前の柳に似たり」と、諸學士は事を用ゆるの來處を問ふ、王默然たり、益齋の李文忠公、傍より卽解して曰く、吾が東人の詩に、屋頭の初日金雞唱ふ、恰も垂楊の裊々として長きに似たり」と、雞聲の軟なるを以て、柳條の輕纖に比す、我が殿下の句は、是の意を用ゆるなり、且つ韓退之の琴の詩に曰く、浮雲柳絮根蒂無しと、則ち古人の聲音に於ける、亦た柳絮を以て之に比する者ありと、滿坐稱嘆す、忠宣の詩句は、益老の救もなくんば、則ちん幾んど矻者の鋒に窘しめられん。

陳后主召一隱者、問近作何詩、答曰、有漁父詩、云、風雨揭卻屋、全家醉不知、蓋諷主之沉溺、後主默然、恭愍王嘗與判事尹虎圍棋、約不勝者、書事以贈、虎不勝、書詩以進、曰、欺暗常不然、欺明當自戮、難將一人手、掩得天下目、蓋諷王養辛禍爲子、王默然、二詩有諷諫風、使二主覺悟、易轍、安有亡國之禍乎。

宋太祖滅蜀、召蜀主孟昶、花藥夫人費氏、使賦詩、詩曰、君王城上豎降旗、妾在深宮那得知、十四萬人齊解甲、也無一箇是男兒、讀此詩、凡丈夫之兵敗偷生、屈膝者、無一不自見於人、高麗穆宗時、契丹主入興化鎮、執副都總管李鉉、雲、齊之鉉、雲、獻詩曰、兩眼已瞻新日月、一心何憶舊山川、如鉉、雲者、行若狗彘、固

陳の後主、一隱者を召して近ごろ何の詩を作るかと問ふ、答へて曰く、漁父の詩あり、云く、風雨屋を掲却す、全家酔ふて知らずと、蓋、主の沉溺を諷するなり、後主默然たり、恭愍王嘗て判事尹虎と棋を圍む、約して勝たざる者は事を書して以て贈る、虎は勝たず、詩を書して以て進めて曰く、暗を欺くは常に然らず、明を欺かば當に自から戮せらるべし、一人の手を將て、天下の目を掩ひ得難たしと、蓋し王の辛禍を養ふて子と爲すを諷するなり、王は默然たり、二詩は諷諫の風あり、二主をして覺悟して轍を易へ使めば、安んぞ國を亡ぼすの禍あらんや。

宋の太祖、蜀を滅して、蜀主孟昶の花藥夫人費氏を召して詩を賦せしむ、詩に曰く、君王城上降旗を豎つ、妾は深宮に在りて那ぞ知ることを得ん、十四萬人齊く甲を解く、也た一箇の是れ男兒なる無しと、此の詩を讀むときは、凡そ丈夫の兵敗れて生を偷み膝を屈する者は、面目の人を見る無けん、高麗の穆宗の時に、契丹の主は興化鎮に入りて、副都總管李鉉、雲を執へて之を脅かす、鉉、雲、詩を獻じて曰く、兩眼已に瞻る新日月、一心何ぞ憶はん舊山川と、鉉、雲の如き者は、行ひ狗彘の若し、固に論ずるに足らず、然れども大丈夫にして、會ち一婦人に若かず、

東人詩話卷上 終

504

日本詩話叢書

不足論、然大丈夫而曾不若一婦人、可恥之甚也、詩可易言哉。

恥ず可きの甚だしきなり、詩は言ひ易かる可けんや。

四六

# 東人詩話卷下

徐居正剛中著

高麗光顯以後、文士輩出、詞賦四六、稷織富麗、非後人所及、但文辭議論、多有可議者、當是時、程朱輯注、不行於東方、其論性命義理之奧、紕繆牴牾、無足怪者、蓋性理之學、盛於宋、自宋而一、思孟而下、作者非一、唯李翱韓愈爲近正、況東方乎、忠烈以後、輯注始行、學者駁駁入性理之域、益齋而下、稼亭牧隱、南隱、三峯、陽村諸先生相繼而作、唱明道學、文章氣習庶幾近古、而詩賦四六、亦自有優劣矣。

高麗の光顯以後、文士輩出し、詞賦四六稷織富麗なること、後人の及ぶ所に非ず、但文辭議論は、多く議すべき者あり、是の時に當りて、程朱の輯注は東方に行はれず、其性命義理の奥を論すること、紕繆牴牾して、怪しむに足る者なし、蓋し性理の學は宋に盛なり、宋より而上、思孟より而下、作者一にあらざ、唯だ李翱韓愈は正に近しと爲す、況んや東方をや、忠烈以後輯注始めて行はる、學者駁々として性理の域に入る、益齋而下、稼亭牧隱南隱三峯陽村の諸先生相繼で作りて、道學を唱へ明にす、文章の氣習庶幾して古に近し、而して詩賦四六亦た自から優劣あり。

高麗光宗始設科、用詞賦、睿宗喜文雅、日會文士、唱和繼而仁明亦尙儒雅、忠烈與詞臣唱酬、有龍樓集、由是俗尙詞賦、務爲抽對、如朴文烈、寅亮、金文成、緣、金文烈、富軾、鄭諫、議知常、李大諫、仁老、李文順、奎報、金內翰、克己、金諫、議君、綏、俞文安、升、且、金貞肅、仁鏡、陳補、闕、澤、林、上、庠、椿、崔文清、滋、金英憲、之、岱、金文貞、坵、尤其傑然者也、高麗中葉以後、事兩宋、遼、金、蒙古、強、國、屢以文詞見稱、得紓國患、夫豈詞賦而少之哉、厥後作者各自成家、不可枚數矣、吾友金頤叟嘗語予曰、高麗詩文、詞麗氣富、而體格生疎、近代著述、辭纖氣弱、而義理精到、孰優、予曰、豪將悍卒、抽戈擁盾、談說仁義、腐儒俗士、冠冕章甫、從容禮法、先生

高麗の光宗は始めて科を設けて詞賦を用ゆ、睿宗は文雅を喜む、日に文士を會して唱和す、繼いで仁明も亦た儒雅を尙ぶ、忠烈、詢、臣と唱酬す、龍樓集あり、是に由りて俗は詞賦を尙んで務めて抽對を爲す、朴文烈、寅亮、金文成、緣、金文烈、富軾、鄭諫、議知常、李大諫、仁老、李文順、奎報、金內翰、克己、金諫、議君、綏、俞文安、升、且、金貞肅、仁鏡、陳補、闕、澤、林、上、庠、椿、崔文清、滋、金英憲、之、岱、金文貞、坵の如き、尤も其の傑然たる者なり、高麗の中葉以後、兩宋、遼、金、蒙古の強國に事へて、屢ばく文詞を以て稱せられ、國患を紓ぶることを得たり、夫れ豈に詞賦にして文を少しとせんや、厥の後作者各自に家を成して、枚擧す可からず、吾が友金頤叟嘗て予に語つて曰く、高麗の詩文は詞麗しく氣富んで、體格は生疎なり、近代の著述は、辭は纖く氣は弱く而して、義理精到なり、孰るか優れると、予曰く、豪將悍卒は戈を抜き盾を擁して、仁義を談説す、腐儒俗士は、章甫を冠冕にして、禮法を從容にす、先生何をか取れると、頤叟大に笑ふ。

何取、頤更大笑、

鮮本  
搦作

鄭司諫西都詩、紫陌春風細雨過、輕塵不動  
柳絲斜、綠窓朱戶笙歌咽、盡是梨園弟子家、  
西都繁華氣象四句盡之、後之作者、無能闡  
其藩籬、陳補闕澤松都詩、小雨朝來卷細毛、  
浴江初日豈紅濤、千門撲地魚鱗錯、雙闕攬  
天鷲翼高、吳苑袂衣晴闕草、漢宮仙袂醉分  
桃、多慙久忝金闈侍、與倚清香春赭袍、詞語  
清新美麗、亦可以竝駕齊驅矣、

李相國詩、輕衫小簾臥風櫺、夢斷啼鶯三兩  
聲、密葉翳花春後在、薄雲漏日雨中明、陳司  
諫澤詩、小梅零落柳微垂、閑踏清嵐步步遲、  
漁店閉門人語少、一江春雨碧絲絲、兩詩清  
新幻眇、閑遠有味、品藻韻格、如出一手、雖善

東人詩話卷下

鄭司諫の西都の詩に、紫陌の春風細雨過ぐ、輕塵動かさず  
柳絲斜なり、綠窓朱戶笙歌咽ぶ、盡く是れ梨園弟子の家と、  
西都繁華の氣象四句に之を盡す、後の作者は能く其  
の藩籬を闡ふことなし、陳補闕澤松都の詩に、小雨朝來  
細毛を卷く、江に浴する初日紅濤を景す、千門地を撲つ  
て魚鱗錯はり、雙闕天を攬て鷲翼高し、吳苑の袂衣晴れ  
て草を闕はしめ、漢宮の仙袂酔ふて桃を分つ、多慙す久  
しく金闈の侍を忝ふすることを、與に清香に倚る春赭袍  
と、詞語清新美麗にして、亦た以て駕を竝べて齊しく驅  
す可し。

李相國の詩に、輕衫小簾風櫺に臥す、夢は斷ゆ啼鶯三兩  
聲、密葉花を翳して春後に在り、薄雲日を漏らして雨中  
に明なりと、陳司諫澤の詩に、小梅は零落して柳は微垂  
す、閑に清嵐を踏んで歩々遲し、漁店は門を閉ぢて人語少  
れなり、一江の春雨碧絲々として、兩詩は清新幻眇、閑遠にし  
て、味あり、品藻韻格、一手に出づるが如し、善く論する者  
と雖も、未だ伯仲し易からざるなり。

論者、未易伯仲也。

益齋山中雪夜詩、紙被生寒、佛燈暗、沙彌一夜不鳴鐘、應、宿客開門早、要看巖前雪、壓松、能寫出山家雪夜奇趣、讀之令人沈澹、生牙頰間、崔拙翁嘗曰、益老平生詩法、盡在此詩、

金英憲之岱、題義城館樓詩曰、聞韶公館後園深、中有危樓百餘尺、香風十里捲珠簾、明月一聲飛玉笛、烟輕柳影細相連、雨霽山光濃欲滴、龍荒折臂甲枝郎、仍按邊關尤可怕、爲一時膾炙、後十年、樓火於兵、板隨以亡、又後數十年、一按部入縣、索金詩甚急、邑人無如之何、時縣守吳君迪莊有一女、曾與張相國、益子庭賀約爲婚媾、吳攜女之任、庭賀取

益齋の山中雪夜の詩に、紙被寒を生じて佛燈暗し、沙彌一夜鐘を鳴らさず、應に宿客の門を開くことの早きを嘆るべなるし、巖前、雪の松を壓するを看んと要すと、能く山家雪夜の奇趣を寫し出す、之を讀まば人を沈澹、牙頰の間に生ぜしむ、崔拙翁嘗て曰く益老平生の詩法、盡く此の詩に在りと。

金英憲之岱、義城館の樓に題する詩に曰く、韶を聞く公館後園の深き中に危樓あり、百餘尺、香風十里珠簾を捲き、明月一聲玉笛を飛ばす、烟は輕くして柳影細かにして相連り、雨霽れて山光濃にして滴らんと欲す、龍荒折臂の甲枝郎、仍りに按し關に憑つて尤も怕る可しと、一時に膾炙せらる、後十年ありて、樓は兵に火かれ、板隨つて以て亡ぶ、又た後十年ありて、一按部縣に入りて金の詩を索むること甚だ急なり、邑人之を如何ともする無し、時の縣守吳君迪莊に一女あり、曾て張相國益の子庭賀と約して婚媾を爲す、吳は女を携へて任に之く、庭賀は他の耦を取る、吳の女、狂を發して亂語して

他耦吳女發狂亂語、忽詠出金詩、邑人錄呈、按部按部奇之、世相傳以爲鬼物亦愛詩、能護惜不失、復傳於世、予嘗以爲此說荒怪、無足信者、嘗觀杜詩注、有病瘡者、誦少陵子章獨體血模糊、手提擲還崔大夫之句、病頓痊、又名臣言行錄、王榮老之任觀州、渡江七日、風作不涉、人曰、江神極靈、舟中必有異物、嘗獻得濟、榮老只有黃麋尾、獻之、風如故、又以端硯獻之、風愈作、又獻宜包虎帳、皆不驗、夜臥念黃魯直草書扇子、乃韋蘇州獨憐幽草、澗邊生、上有黃鸝深樹鳴、春潮帶雨晚來急、野渡無人舟自橫、一絕句也、取獻之、香火未收、南風吹、便帆飽、一瞥而濟、僧洪覺範曰、此必元祐遷客之鬼、不然何嗜詩之深耶、然則

東人詩話卷下

忽ち金の詩を詠出す、邑人録して按部に呈す、按部之を奇とす、世相傳へて以爲へらく鬼物も亦詩を愛して能く護惜して失せず、復た世に傳ふと、予嘗て以爲へらく、此説は荒怪にして信するに足る者無し、嘗て杜詩の注を觀に、瘡を病む者あり、少陵の「子章の獨體は血模糊たり、手づから提げて崔大夫に擲ち還す」の句を誦して、病頓に痊ゆと、又た名臣言行錄に、王榮老は任に觀州に之く、江を渡ること七日、風作りて涉られず、人の曰く、江神は極て靈なり、舟中に必らず異物あらん、當に獻じて濟るを得べしと、榮老は只だ黃麋尾あり、之を獻ず、風は故の如し、又た端硯を以て之に獻ず、風は愈々作る、又た宜包の虎帳を獻ず、皆な驗あらず、夜臥して念ふ、黃魯直の草書の扇子、乃ち韋蘇州の「獨り憐む幽草の澗邊に生ずるを、上に黃鸝の深樹に鳴くあり、春潮雨を帯びて晚來急なり、野渡人無く舟自から横はる」の一絶句なり、取りて之を獻するに、香火未だ收まらざるに、南風吹きて便ち帆飽く、一瞥して濟る、僧洪覺範の曰く、此れ必らず元祐遷客の鬼ならん、然らずんば何ぞ詩を嗜むことの深きやと、然らば則ち詩は能く鬼神を感ず、古人も亦た已に之を言ふ、予何ぞ獨り金の詩に疑はんや。

五一

詩能感鬼神、古人亦已言之、予何獨疑於金詩也哉。

太白淳陽感秋詩、何處聞秋聲、蕭蕭北窓竹、東坡漱玉亭詩、高崑下赤日、深谷來悲風、能寫卽境語、印學士那秋夜詩、草堂秋七月、桐兩夜三更、欹枕客無寐、隔窓蟲有聲、其清新雅絕、不讓二老。

李侍中公遂下第詩曰、白日明金殿、青雲起草廡、那知廣寒桂、尙有一枝餘、林西河楮下第詩、科第未收羅隱恨、離騷空寄屈平哀、又曰、科第由來收俊傑、公卿誰肯薦非才、其氣象大不同、李終得大魁、入台衡、林竟不第、不霑一命、詩出肺腑、或者天其先誘乎。

自古窮人之語、皆枯寒瘦淡、林西河詩、恆飢

太白の淳陽に秋を感じる詩に、何れの處にか秋聲を聞く蕭々たり北窓の竹と、東坡の漱玉亭の詩に、高崑赤日下り、深谷悲風を來たすと、能く卽境の語を寫す、印學士那の秋夜の詩に、草堂秋七月、桐兩夜三更、枕を欹てて客は寐るなく、窓を隔て、蟲に聲ありと、其の清新雅絶なること、二老に譲らず。

李侍中公遂下第の詩に曰く、白日金殿に明かに、青雲草廡に起る、那ぞ知らん廣寒の桂、尙ほ一枝の餘す有ると、林西河楮の下第の詩に、科第は未だ羅隱の恨を收めず、離騷空しく屈平の哀を寄すと、又た曰く、科第は由來俊傑を收む、公卿誰か肯て非才を薦めん」と、其の氣象大に同じからず、李は終に大魁を得て台衡に入り、林は竟に第せずして一命にだも霑ほはず、詩は肺腑より出づ、或は天其れ先づ誘ふか。

古より窮人の語は皆な枯寒瘦淡なり、林西河の詩に、恆

窮子美、非病老維摩、盧先輩水綬、老妻容寂  
 寞、稚子淚飄零、衰髻千年鶴、殘生十月螢、李  
 暹村集詩、借書勤夜讀、乞米續新炊、瘦馬鳴  
 西詩、羸童背朔風、江海無家客、山村有髮僧、  
 柳泰齋方善詩、腹中麤飯何曾飽、身上單衣  
 苦不溫等句、可見憔悴困踏氣象。

作詩非難、能造情境、模寫形容、一言而盡、此  
 古人所難、如李文順北山雜題云、欲試山人  
 心、入門先醉藥、了不見喜溫、始覺真高士、如  
 此形容、雖古人亦未易到。

林代言樸、個儻喜立名、嘗如元帝欲以德興  
 君代、恭愍爲王、樸曰、若從僧王、無異婦人背  
 夫、誓死不從、樸將還、德興情請樸書其屏、曰、  
 藥本滔滔逐末行、泰山還似一毫輕、投鞭直

に飢ゆ窮子美、病に非ず老維摩と、盧先輩水綬の詩に、老  
 妻容寂寞、稚子淚飄零、衰髻千年の鶴、殘生十月の螢と、李  
 暹村集の詩に、書を借りて夜讀を勤め、米を乞ふて新炊  
 を續く、瘦馬西日に鳴き、羸童朔風に背く、江海無家の客、  
 山村有髮の僧と、柳泰齋方善の詩に、腹中の麤飯何ぞ曾  
 て飽かん、身上の單衣苦だ温ならず等の句は、憔悴困踏  
 の氣象を見る可し。

詩を作るは難きに非ず、能く情境に造り形容を模寫して  
 一言にして盡くす、是れ古人の難しとする所なり、李文  
 順の北山雜題の如き、云ふ山人の心を試みると欲す、門  
 に入りて先づ醉藥す、了に喜溫を見ず、始めて覺る眞の  
 高士と、此の如きの形容は古人と雖も亦た未だ到り易  
 からず。

林代言樸、個儻にして名を立つるを喜ぶ、嘗て元帝の德  
 興君を以て恭愍に代へて王と爲さんと欲するが如き、樸  
 の曰く、若し僧王に従はば婦人の夫に背くに異なる無し  
 死を誓つて従はず、樸將に還らんとす、德興情ふて樸  
 に請ひ其の屏に盡せしむ、曰く、本を棄て滔々として末

欲橫江去、嗜餅徒勞、畫地成得、甕醉時誰識、  
破吹竽混處、謾求榮、莫將繪事迷人目、我愛  
天然古石屏、范學士素吹曰、不圖千歲之下、  
復見忠節之士也、樸還、恭慙深加眷注、物論  
亦多之、詩復以交、結逆叱、誅死、忠節掃地、王  
安石詩曰、周公恐懼流言日、王莽謙恭下、士  
時若使當年身便死、一生終始有誰知、嗚呼  
等死耳、使於死於德與不死逆叱、一生終始  
誰復知者哉、

錢起賦省題湘靈鼓瑟落句云、曲終人不見、  
江上數峯青、世以謂夢有神助、高麗試題、出  
夏雲多奇峰、有生一聯云、僧看疑有寺、鶴見  
恨無松、雖帶髻雜語、亦是警句、

崔覩山詩曰、漏雲殘照雨絲絲、牧隱深味之、

を逐ふて行く、泰山還つて一毫の輕きに似たり、鞭を  
投じて直に江に横たはり去らんと欲す、餅を嗜んで徒ら  
に地に畫し成すことを勞す、甕を得て酔ふ時は誰か破る  
ゝを識らん、竽を吹きて混する處、謾に榮を求む、繪事を  
將て人目を迷はす莫れ、我は愛す天然の古石屏と、范學  
士素嘆じて曰く、圖らざりき千歲の下に、復た忠節の士  
を見んとはと、樸還る、恭慙深く眷注を加ふ、物論も亦た  
之を多とす、樸復た逆叱に交結するを以て誅死す、忠節  
地を掃ふ、王安石の詩に曰く、周公恐懼す流言の日、王莽  
謙恭す下に下る時、若し當年身便ち死せしめば、一生の  
終始誰ありてか知らん」と、嗚呼等しく死するのみ、樸を  
して德與に死して、逆叱に死せざらしめば、一生の終始誰  
か復た知る者あらんや、

錢起の省題湘靈、瑟を鼓すといふを賦する落句に云ふ  
「曲終りて人見へず、江上數峯青し」と世以謂らく夢に神  
助ありと、高麗の試題に「夏雲奇峯多し」と云ふを出だす、  
生あり一聯に云ふ、僧は看て寺あるかと疑ひ、鶴は見て  
松なきを恨む」と、髻雜の語を帶ぶと雖も、亦是れ警句な  
り、

崔覩山の詩に曰く、雲に漏るゝの殘照は雨絲々たり」と

有膾炙、猊山四句詩之句、頃見李大諫仁老詩曰、薄雲漏日雨中明、猊山詩未必非點化也、然古人詩有偶同者、有因點化而尤工者、或讀古人詩已熟、往々恰得認爲己有者、此詩家常事、猊豈竊人詩者哉。

前輩詩用子規、語多清絶、如李執義堅幹詩、旅館挑殘一盞燈、使華風味淡、於僧隔窓、杜宇終宵聽、啼在山花第幾層、尹祇候汝衡詩、乾坤蕩蕩我無家、一夕挑燈九起嗟、誰使遠遊人有耳、杜鵑啼血杜鵑花、崔執義元祐詩、揖送吾師嶺外行、春風一杖野裝輕、碧山杜宇聞何處、古寺梨花月政明、曹副令係芳詩、敲門宿客直須揮、莫使山家奇事知、屋角梨花開滿樹、子規來叫月明時、四詩皆清絶、李

東人詩話卷下

牧隱深く之を味はふ、猊山四句の詩を膾炙するの句あり、頃ころ李大諫仁老の詩を見るに曰く、薄雲日を漏らして雨中明なり」と、猊山の詩は未だ必ずしも點化に非ずんばあらざるなり、然れども古人の詩に偶、同じき者あり、點化に因りて尤も工なる者あり、或は古人の詩を讀んで已に熟して、往々に恰得して認めて己か有と爲す者あり、此れ詩家の常事なり、猊豈に人の詩を竊む者ならんや。

前輩の詩に子規を用ゆる語多くは清絶なり、李執義堅幹の詩に「旅館挑け殘す一盞の燈、使華の風味は僧よりも淡し、窓を隔つる杜宇終宵に聽く、啼て山花の第幾層に在り」と、尹祇候汝衡の詩に「乾坤蕩々として我れ家無し、一夕燈を挑げて九たび起嗟す、誰か遠遊の人をして耳あらしむる、杜鵑血に啼く杜鵑花」と、崔執義元祐の詩に「揖送す吾が師嶺外の行、春風一杖野裝輕し、碧山の杜宇聞くこと何の處ぞ、古寺の梨花月政に明なり」と、曹副令係芳の詩に「門を敲く宿客直ちに須く揮ふべし、山家の奇事をして知らしむる莫れ、屋角の梨花開いて樹に滿つ、子規來り叫ぶ月明の時」といふが如き、四詩皆な清絶李尤も高妙なり。

尤高妙。

孟郊調、漂陽尉、日往來山水間、曹務多廢、時人譏之、田獻納濡、倅公州、有詩云、公事如雲、鬻欲絲、雪晴江路馬遲遲、吏民不識憂民意、誤道溪山覓好詩、其造意之妙、自然不畔於近民者之責。

古之詩人、類皆窮苦、如孟郊賈島、以寒瘦枯淡之詞、爲奇警、有上舍李吉祥、屢舉稱屈、嘗作詩曰、斑白豈非爲老翁、飄飄日用尙孩童、警人只有疎狂語、輔世曾無細小功、嗜酒過三杯、止渴題詩無一句、全工乾坤容汝德、何厚、汝自加修慎、始終此正自家實錄、而自然有、不遇轆軻之氣象、真郊島之流乎。

牧隱貞觀吟、豪健快壯、其一聯曰、謂是囊中

孟郊の漂陽の尉に調せらるゝや、日に山水の間に往來して曹務多く廢す、時人之を譏る、田獻納濡、公州に倅たり、詩あり云ふ、公事は雲の如く鬻は絲ならんと欲す、雪は晴れて江路馬遅々たり、吏民は民を憂ふるの意を識らず、誤つて道ふ溪山に好詩を覓むと、其の造意の妙は自然に民を近くる者の責に畔かず。

古の詩人類むね皆な窮苦す、孟郊賈島の如き、寒瘦枯淡の詞を以て奇警と爲す、上舍李吉祥といふ者あり、屢舉げられて屈と稱す、嘗て詩を作りて曰く、斑白豈に老翁と爲るに非ずや、飄々として日用尙ほ孩童人を警めて、只だ疎狂の語あり、世を輔けて曾て細小の功無し、酒を嗜みて三杯に過ぎて渴を止め、詩を題して一句も全く工なる無し、乾坤汝を容るゝ、徳何ぞ厚き、汝自から加す、修めて始終を慎めと、此れ正に自家の實錄にして、自然に不遇轆軻の氣象あり、真に郊島の流か。

牧隱貞觀の吟は豪健快壯なり、其の一聯に曰く、謂ふ是

一物耳。那知玄花落、白羽、玄花言其目、白羽言其箭。世傳唐太宗伐高麗、至安市城、箭中其目、而還考唐書通鑑皆不載此事。雖有之、當時史官必爲中國諱、毋怪乎其不書也。但金富軾三國史亦不載、未知牧老何從得此。牧隱初入元朝、文士稍輕之、嘲曰、持杯入海、知多海、牧隱應聲曰、坐井觀天曰小天、嘲者更不續、嘗謁歐陽學士玄、得印可、牧老晚有詩云、衣鉢當從海外傳、圭齋一語尙琅然、邇來物價皆翔貴、獨我文章不直錢、蓋嘆晚節之蹭蹬也。

論者謂牧隱酷似東坡、問有發越處或過之、有問陽村權先生者、先生笑曰、子歸謂東坡前後赤壁賦、牧隱觀魚臺賦、自當知之矣、予

れ裏中一物のみ、非ぞ知らん玄花の白羽に落つることをと、玄花は其の目を言ひ、白羽は其の箭を言ふ、世に傳ふ唐の太宗の高麗を伐つて安市城に至るや、箭その目に中つて還ると、唐書通鑑を考ふるに皆な此の事を載せず、之をりと雖ども當時の史官は必らず中國の爲めに諱まん、其の書せざるを怪しむ母し、但だ金富軾の三國史にも亦た載せず、未だ知らず牧老何れ従りして此を得たる。

牧隱は初め元朝に入る、文士稍や之を輕んじ、嘲りて曰く「杯を持して海に入り海多きを知る」と、牧隱聲に應じて曰く、井に坐して天を觀て天を小なりと曰ふ」と、嘲る者更に續かず、嘗て歐陽學士玄に謁して印可を得たり、牧老、晚に詩あり云ふ、衣鉢は當に海外より傳ふべし、圭齋の一語尙ほ珥然たり、邇來物價皆な翔貴、獨り我が文章は錢に直らず」と、蓋晚節の蹭蹬を嘆するなり。

論する者は謂ふ、牧隱は甚だ東坡に似たり、問發越の處或は之に過ぐるこゝとありと、陽村の權先生に問ふ者あり、先生笑つて曰く、子歸りて東坡の前後赤壁の賦と、牧隱の觀魚臺の賦とを讀まば自から當に之を知るべしと

謂古人以蘇老前後赤壁賦爲一洗萬古、則非後人可議擬也。

復齋韓文節公宗愈、晚居漢陽筆林村墅、黃冠野服、扁舟短棹、日往來楮子島、有詩云、十里平湖細雨過、一聲長笛隔蘆花、卻將殷鼎調羹手、還把漁竿下晚沙、杏村李文貞公嵩、再入台鼎、晚年乞骸、與息影菴禪老爲方外交、扁舟往還、至輒忘返、嘗有詩曰、浮世功名是政丞、小窓閑味卽山僧、箇中亦有風流處、一朵梅花照佛燈、兩公風流高致、同出一揆、兩詩亦清絕可愛、雖曰詩中有畫、亦可也。

客有問魯典書瑣、順興樓詩寒推岳色、僧扃戶、冷踏溪聲、客上樓、許平章伯扞城樓詩、五更曉色先虛閣、一葉秋聲滿小樓、孰優、予曰、

予謂古人是蘇老的前後赤壁的賦を以て萬古を一洗すと爲す、則ち後人の議擬すべきに非ざるなり。

復齋の韓文節(公宗愈)晩に漢陽筆林の村墅に居り、黃冠野服して扁舟短棹にて日に楮子島に往來す、詩あり云ふ「十里の平湖細雨過、一聲の長笛蘆花を隔つ、卻て殷鼎調羹の手を將て、還つて漁竿を把つて晚沙に下る」と、杏村の李文貞公嵩は、再び台鼎に入る、晩年に骸を乞ふて息影菴の禪老と方外の遊を爲す、扁舟往還して輒ち返るを忘るゝに至る、嘗て詩あり曰く、浮世の功名は是れ政丞、小窓の閑味は卽ち山僧、箇中亦た風流の處あり、一朵の梅花は佛燈を照すと、兩公の風流高致同じく一揆に出づ、兩詩も亦た清絶にして愛すべし、詩中に畫ありと曰ふと、雖も亦た可なり。

客に問ふものあり魯典書瑣、順興樓の詩に、寒は岳色を推して僧は戸を扃し、冷は溪聲を踏んで客は樓に上る、と、許平章伯扞城樓の詩に、五更の曉色虚閣より先し、一葉の秋聲小樓に滿つと、孰れか優れると、予曰く魯の詩

魯詩大巧而反拙、許詩似俗而大奇、鄭政堂  
思道高住寺詩、坐入夕陰生、邃壁吟來霜葉  
滿、虛樓亦可伯仲二老矣、客又問陶隱嶺南  
樓詩、押烟字、秋深宮道映紅樹、日暮漁村生  
白烟、浩亭河文忠公崙云、十里桑麻深雨霰、  
一區山水老雲烟、孰優、予曰、陶固雅絕得詩  
家法、終不若河之深遠有宰相氣象。

魏野贈王文正公詩、西祀東封都了畢、好來  
相伴赤松遊、贈寇萊公詩云、好去上天辭、將  
相卻來平地作神仙、勸之使退也、嘗覬季國  
勢岌岌、有僧贈圓隱鄭文忠公曰、江南萬里  
野花發、何處春風無好山、圓隱流涕曰、嗚呼  
其晚也。

予嘗愛鄭圓齋公權讀中宗紀詩、由來哲婦

鮮本重其  
晚也三字

は大に巧にして反つて拙なり、許の詩は俗に似て大に奇  
なり、鄭政堂思道高住寺の詩に、坐する久ふして夕陰邃  
壁に生じ、吟し來れば霜葉は虚樓に滿つと、亦た二老に  
伯仲すべしと、客は又た問ふ陶隱の嶺南樓の詩に烟の  
字を押す、秋は深ふして空道紅樹に映じ、日は暮れて漁  
村に白烟を生ずと、浩亭の河文忠公崙の云ふ、十里の桑  
麻は雨露深し、一區の山水雲烟老たりと、孰れか優れる  
と、予の曰く、陶は固に雅絶にして、詩家の法を得たるも、  
終に河の深遠にして宰相の氣象あるに若かずと。

魏野の王文正公に贈る詩に、西祀東封却て了畢、好し來  
つて赤松に相ひ伴ふて遊べと、寇萊公に贈る詩に云ふ、  
好し上天に將相を辭し去つて、卻て平地に來りて神仙  
と作れと、之を勸めて退かしむるなり、臘季の國勢岌々  
たるに當りて、僧あり、圓隱の鄭文忠公に贈りて曰く、江  
南萬里野花發、何れの處にか春風好山なからんと、圓  
隱涕を流して曰く、嗚呼其れ晚しと。

予は嘗て鄭圓齋公權の中宗紀を讀むの詩を愛す、由來哲

敗嘉謨、詰譎無言、淺丈夫、地下若逢、韋處士、帝心還愧、點籌無語、雖用唐人、地下若逢、陳後主、不宜重問、後庭花之句、點化自妙、真得換骨法。

老杜詩、侍臣雙宋玉、戰策兩穰苴、蓋用六五帝、四三王之語、金久炯、送僧詩、道已雙支遁、詩能兩善權、摹擬太過、真所謂屋上架屋也、牧隱詩、處身雙墨老、知命一彭殤、以一對雙、亦奇、何害其用意也。

陽村權文忠公詩、溫醇典嚴、洪武年間被徵入朝、高皇帝命題賦詩二十四篇、皆操紙立就、詞理精到、不加點綴、其賦弁韓云、紛紛蠻觸戰、擾擾辨辰韓、帝悅之、其賦大同江云、霏然入海朝宗意、政似吾王事大誠、帝曰、人臣

婦は嘉謨を敗る、詰譎言なし淺丈夫、地下に若し韋處士に逢はば、帝心還つて點籌を愧ずるや無や」と、語は唐人の、地下若し陳の後主に逢はば、宜しく重ねて後庭花を問ふべからずの句を用ゆと雖も、點化して自から妙なり、真に換骨の法を得たり。

老杜の詩に、侍臣宋玉を兩にし、戰策穰苴を雙にすと、蓋五帝を六にし、三王を四にするの語を用ゆ、金久炯の偈を送る詩に、道は已に支遁を雙にし、詩は能く善權を兩にすと、摹擬大に過ぎたり、真に謂はゆる屋上に屋を架するなり、牧隱の詩に、身を處するに墨老を雙にし、命を知る彭殤を一にすと、一を以て雙に對するも亦た奇なり、何ぞ其の用意を密せんや。

陽村の權文忠公の詩は、溫醇典嚴なり、洪武年間に徵されて入朝す、高皇帝命じて詩二十四篇を賦せしむ、皆な紙を操て立どころに就る、詞理精到にして點綴を加へず、其の辨韓を賦するに云ふ紛々たり蠻觸の戰、擾々たり弁辰韓と、帝之を悦ぶ、其の大同江を賦するに云ふ、霏然として海に入る朝宗の意、政に吾が王の大誠を事とするに似たり」と、帝の曰く人臣の言は當に是の如くなる

罪本烟作  
問

鮮本意上  
有古字

之言、當如是、大加寵異、或問於浩亭、河公曰、陶隱詩文、刻意鍊琢、精深雅高、陽村詩文、平淡溫厚、成於自然、畢竟陶優於陽乎、浩亭曰、陶之鍊琢、陽爲之有裕、陽之天機、陶終不能及也、且應制詩二十四篇、陽村爲之、而陶隱必不能也。

李侍中藏用、三角山文殊寺詩、還他駕鶴揚州天、添卻騎驢華山籍、蓋三角山在揚州、亦有華峰、用事精切、李侍中需普門寺詩、殿閣盡吞千世界、樓臺直掛一虛空、氣象廣豁、趙文景永仁安和寺詩、前泉通漢塞、應路後岳支、天杞不憂、詞語險僻、然亦奇健可尙。

金元師得培、蕩平紅寇、功蓋一國、未及凱還、爲賊臣金鋪所害、鄭圃隱祭詩曰、君是儒生

べしと、大に寵異を加ふ、或ひと浩亭の河公に問ふて曰く、陶隱の詩文は意を刻して鍊琢して、精深雅高なり、陽村の詩文は平淡溫厚にして自然に成る、畢竟陶は陽に優れるかと、浩亭曰く、陶の鍊琢は陽は之を爲すときは裕あり、陽の天機は、陶は終に及ぶ能はざるなり、且つ應制の詩二十四篇、陽村は之を爲す、而も陶隱は必らず能はざらんと。

李侍中藏用三角山文殊寺の詩に、還て他の鶴に駕する揚州の天、添卻す驢に騎る華山の籍」と、蓋、三角山は揚州に在り、亦た華峯あり、事を用ゆる精切なり、李侍中需の普門寺の詩に、殿閣は盡く呑む千世界、樓臺は直に掛く一虛空と、氣象廣豁なり、趙文景永仁の安和寺の詩に、前泉は漢に通じて塞應に路すべし、後岳は天を支へて祀憂へず」と、詞語險僻なり、然れども亦た奇健にして尙ふ可し

金元師得培は冠紅を蕩平して功は一國を蓋ふ、未だ凱還に及ばず、賊臣金鋪に害せらる、鄭圃隱の祭詩に曰く、君は是れ儒生なり、合さに文を討ぬべし、奈何ぞ劍を掲げて

合討文、奈何提劍將三軍、忠魂壯魄今安在、  
廻首青山空白雲、能叙盡一時悲悼之懷、古  
人云、長歌之哀過於痛哭、信哉。

唐僧靈徹詩、相逢盡道休官去、林下何曾見  
一人、足以愧萬古貪功名利祿者之面目、元  
政堂松壽詩、少日心期未老閑、官遊容易損  
朱顏、君恩報了方歸去、吾眼無由見碧山、雖  
無急流勇退之相、而能寫盡欲歸未歸之志、  
曲盡無餘、真警語也、崔拙翁詩、桃花籬落映  
清渠、門外荒田二頃餘、每過村家心語口、無  
官不去竟何如此、老平生有雅操、功名蹭蹬  
無意於世、而亦不能去、況不及拙翁者乎、尹  
祇候汝衡詩、竹外梅花雪裡開、夜深明月上  
樓臺、此間著我詩應妙、閑跨驢兒歸去來、李

三軍を將ふる、忠魂壯魄今安くにか在る、首を廻らせば  
青山空しく白雲と、能く一時悲悼の懷を叙し盡す、古人  
云はく、長歌の哀は、痛哭に過ぐと、信なるかな。

唐の僧靈徹の詩に「相逢ふて盡く道ふ官を休め去らんと林下何ぞ曾て一人を見んと」と以て萬古功名利祿を貪る者の面目を愧ぢしむるに足る、元政堂松壽の詩に「少日心に期す未だ老ひずして閑ならんことを、官遊容易に朱顔を損す、君恩報し了りて方に歸去す、吾が眼は碧山を見るに由なし」と、急流勇退の相無しと雖も、而も能く歸らんと欲して未だ歸らざるの志を寫し盡して、曲盡餘りなし、眞に警語なり、崔拙翁の詩に「桃花の籬落は清渠に映す、門外の荒田二頃餘、村家に過る毎に心は口に語る官無くして去らず、竟に何如ん」と、此の老は平生雅操あり、功名蹭蹬世に意なし、而も亦た去ること能はず、況んや拙翁に及ばざる者をや、尹祇候汝衡の詩に「竹外の梅花雪裡に開く、夜は深くして明月、樓臺に上る、此の間我を著く詩は應に妙なるべし、閑に驢兒に跨つて歸り去らん」と、李正言晟の詩に「藥砌の青春我が老ひたるを嫌ひ、竹溪の明月吾が情を誘く、昨宵已に決す歸田の計雪

正言晨詩、藥砌青春嫌我老、竹溪明月誘吾情、昨宵已決歸田計、雪盡湖南匹馬行、二老風流高致、深足可尙。

李正言存吾平生慷慨不群、其論逆咄一疏、文章氣節直與日月爭光、爲詩亦豪邁絕倫、其送湖奉使還台州詩云、南省郎官聘我邦、風流瀟洒已心降、主人寵迫彤弓一、門客知深白壁雙、禹貢山川猶戰伐、箕封風俗自淳、厯秋風不識留君意、直送飛艘到浙江、又送李副令使浙江詩云、天地紛爭間幾回、南朝往事不勝哀、君歸應過岳王墓、爲我丁寧酌一杯、讀其詩、其氣象可知。

趙文忠公浚、邀座主李文靖公開筵、簪纓滿座、時方小雨、桃花亂落、獨谷成文、景公石磻

盡きて湖南に匹馬行くと、二老の風流高致は深く尙ふ可きに足る。

李正言存吾平生慷慨にして群せず、其の逆咄を論ずる一疏は、文章氣節直ちに日月と光を争ふ詩を爲る、亦た豪邁絶倫なり、其の湖奉使の台州に還るを送る詩に云ふ「南省の郎官我が邦に聘す、風流瀟洒已に心降る、主人寵は迫る彤弓一、門客知ること深し白壁雙、禹貢の山川は猶ほ戰伐、箕封の風俗は自から淳庵、秋風は識らす君を留むるの意を、直ちに飛艘を送つて浙江に到る」と、又た李副令か浙江に使するを送る詩に云ふ「天地紛争すること問ふ幾回ぞ、南朝の往事哀に勝へず、君歸らば應に岳王の墓を過ぐべし、我が爲めに丁寧に一杯を酌せよ」と、其の詩を讀んで其の氣象知るべし。

趙文忠公浚、座主李文靖公を邀へて筵を開く、簪纓座に滿つ、時に方に小雨ありて桃花亂れ落つ、獨谷の成文、景公石磻先づ賀詩一絶を成して云ふ、士を得て方に知る座主

先成賀詩一絶云、得士方知座主賢、侍中獻壽侍中前、天歎好雨留佳客、風送飛花落舞筵、滿座閑筆、家君昌寧府院君、汝完盛怒曰、文章當自損示屈於人、誇才眩能、取禍之道也、深譴之、獨谷悔謝。

栗亭尹文貞公澤、退居錦州、壽八十餘、寄黃檜巖詩、少年花下醉、沉香立進清平光、饒長潦倒如今看、武庫唯餘紫電與、清霜語意穩、膽雄麗、獨谷訪騎牛李文節公、行不遇、有詩云、德葬不見太平年、八十逢春更謝天、桃李滿城香雨過、謫仙何處酒家眠、詞語豪宕俊逸、可想二老襟度。

牧隱詩屬對工緻、如天只對日、諧黃嬭對玄夫、黃甲對白丁、地忍對天然、黃間對白下、又

の賢なるを、侍中壽を獻す侍中の前、天は好雨をして佳客を留めしめ、風は飛花を送つて舞筵に落つと、滿座筆を閑く、家君昌寧府院君汝完盛に怒て曰く、文章は當に自から損して屈を人に示すべし、才に誇り能に眩くは禍を取るの道なりと、深く之を譴す、獨谷悔ひて謝す。

栗亭の尹文貞公澤、錦州に退居す、壽は八十餘なり、黃檜巖に寄する詩に、少年花下に深香に醉ふ、立ちとこころに清平を進めて光饒長し、潦倒として如今武庫を看れば、唯だ餘す紫電と清霜とと、辭意穩膽雄麗なり、獨谷は騎牛の李文節公を訪ふ、行いて遇はず、詩あり云ふ、德葬見ず太平の年、八十春に遇ふて更に天に謝す、桃李滿城香雨過ぐ、謫仙何れの處ぞ酒家に眠ると、詞語豪宕にして俊逸なり、二老の襟度を想ふべし。

牧隱の詩は屬對は工緻なり、天只を日諧に對し、黃嬭を玄夫に對し、黃甲を白丁に對し、地忍を天然に對し、黃間を白下に對するが如き、又た、歸來甲子を書す、憔悴庚寅

如歸來書甲子憔悴降庚寅子雲殊寂寞伯始自中庸憂時如杞國請始自燕臺江山微媚嫵風月愈疎狂等語用事精切。

古人謂子美夔州以後詩尤好蓋愈老愈奇也評者謂牧隱晚年之作不如少時僧竹澗曰牧老少遊中原與文人才士頡頏爭雄爲詩文一字一句法度森嚴無愧於古之作者晚年所作犯濫縱橫有不經意處此老才高一世傲睨東方謂無人具眼者敢如是竹澗縉流之傑然者也。

稼亭牧隱父子相繼中皇元制科文章動天下今二集盛行於世牧隱之於稼亭猶子美之於審言子瞻子由之於老泉自有家法評者曰牧隱之詩雄豪雅健天分絕倫非學可

鮮本紀作  
汎

に降る。子雲殊に寂寞たり、伯子自から中庸、時を憂ふること杞國の如く、始をふ請こ、燕臺よりす、江山は媚嫵を徴し、風月は愈疎狂なり、等の語の如き、事を用ふることに精切なり。

古人謂ふ、子美夔州以後の詩は尤も好しと、蓋し愈老ひて愈奇なり、評する者は謂ふ、牧隱晩年の作は、少時に如かず、僧の竹澗の曰く、牧老少遊とき中原に遊んで文人才士と頡頏して雄を争ふ詩文を作るに一字一句法度森嚴にして、古の作者に愧づる無し、晩年に作る所は犯濫縱橫にして、意を経ざる處あり、此の老才、一世に高くして東方を傲睨す、謂ふ人の眼を具ふる者なしと、敢て是の如し、竹澗は縉流の傑然たる者なり。

稼亭牧隱父子相繼で皇元の制科に中つて、文章は天下を動かす、今二集盛んに世に行はる、牧隱の稼亭に於るは、猶ほ子美の審言に於ける、子瞻子由の老泉に於けるが如し、自から家法あり、評する者は曰く、牧隱の詩は雄豪雅健にして、天分絶倫なり、學んで到る可きに非ず、稼亭の

到稼亭之詩精深平淡、優游不迫、格律精嚴、自有優劣、具眼者辨之。

吳諫議洵工於絕句、題茂陵客館云、脩竹家家翡翠啼、雨催寒食水生溪、蒼苔小草官橋路、怕見殘紅入馬蹄、上辛草亭詩、漢江南畔釣魚翁、來入紅塵謁相公、欲去欲留心未決、滿庭黃葉又秋風、又賦春江云、春江無際暝烟沈、獨把漁竿坐夜深、餌下纖鱗知幾箇、十年空負釣鰲心、令人咀嚼漸入佳境、恨不見其長篇大作也。

桐軒尹狀元紹宗、平生骯髒有奇節、嘗爲諫官、草疏請黜倖臣金興慶、龍官金斯幸、同舍覺之、希興慶旨、劾公他事、不上疏、公有詩曰、孤身野服謁天門、天語溫溫授正言、更把何

詩は精深平淡にして優游不迫、格律精嚴にして自ら優劣あり、具眼の者は之を辨ぜん。

吳諫議洵は絶句に工なり、茂陵の客館に題して云ふ、脩竹家家翡翠啼、雨は寒食を催して水溪に生ず、蒼苔小草官橋の路、怕れ見る殘紅の馬蹄に入ることと、辛草亭に上る詩に、漢江の南畔釣魚翁、來りて紅塵に入りて相公に謁す、去らんと欲し留らんと欲して心未だ決せず、滿庭の黃葉又た秋風と、又た春江を賦して云ふ、春江は際無くして暝烟沈む、獨り漁竿を把て夜深に坐す、餌下の纖鱗知る幾箇ぞ、十年空しく鰲を釣るの心に負くと、人をして咀嚼して漸く佳境に入らしむ、恨むらくは其の長篇大作を見ざることを。

桐軒の尹狀元紹宗は平生骯髒にして奇節あり、嘗て諫官と爲り、草疏して倖臣金興慶、龍官金斯幸を黜けんとを請ふ、同舍之を覺り興慶の旨を希ひて、公の他事を劾して疏を上らず、公詩あり曰く、孤身野服して天門に謁す、天語温々として正言を授く、更に何の心を把つて性命を

心謀性命、重惟古義、誓乾坤、未爲社稷安危計、大負君王擢拔之恩、千載不欺、皇上帝、陳湯劉向二忠魂、詩意謂漢王鳳以陳湯爲從事、劉向與湯友善、謂湯曰、今外戚日盛、必危劉氏、吾而不言、孰當言者、遂上疏極諫、蓋湯既爲鳳所信任、若不爲漢計、洩言鳳、則必先去向矣、向之封事安得上乎、今嘆同舍之不然也。

李侍中藏用詩、萬事唯宜一咲休、蒼蒼在上豈容求、但知吾道何如耳、不用斜陽獨倚樓、末句深遠有味、杜甫詩曰、行藏獨倚樓、趙子昂詩曰、斜陽雖好自生愁。

宋王沂公會微時、以所業贖呂文穆公、有早梅詩、雪中未知和羹事、且向百花頭上開、呂

東人詩話卷下

謀らんと欲す、重く古義を惟ふて乾坤に誓ふ、未だ社稷安危の計を爲さず、大に君王擢拔之恩に負く、千載欺かず、皇上帝、陳湯劉向の二忠魂と、詩意謂ふ、漢の王鳳は陳湯を以て從事と爲す、劉向は湯と友とし、善し、湯に謂つて曰く、今外戚日に盛なり、必らず劉氏を危くせん、吾にして言はずんば、孰か當に言ふべき者ぞと、遂に上疏して極諫す、蓋し湯は既に鳳に信任せらる、若し漢の爲めに計らずして洩して鳳に言はば、則ち必らず先づ向を去らん、向の封事は安んぞ上つるを得んや、今同舍の然らざるを歎するなり。

李侍中藏用の詩に、萬事唯宜一咲して休すべし、蒼々上に在り、豈に求む容けんや、但だ吾が道何如と知るのみ、用ひず斜陽獨り樓に倚るを、と、末句深遠にして味あり、杜甫の詩に曰く、行藏獨り樓に倚る、と、趙子昂の詩に曰く、斜陽は好しと雖も自から愁を生ずと。

宋王沂公會微なりし時に、所業を以て呂文穆公に贖す、早梅の詩あり、雪中未だ知らず和羹の事、且く百花の頭上に向つて開くと、呂の曰く、此の生は次第に安排せば、

上  
鮮本  
土作

曰、此生次第安排、當作大魁登巖廊、後果然、  
金學士黃元、作詩好使夕陽字、金學士富儀  
以爲晚登要路之讖、李陶隱登崧山詩、有飛  
士危巖一瞬間之句、論者以謂有躁進之氣、  
果不大施、益齋登鶴嶺詩、徐行終亦到山頭、  
論者以謂從容寬緩有遠大氣象、果能年踰  
八秩、輔相五朝、功名富貴終始雙全、詩者心  
之發、氣之充、古人以謂讀其詩可以知其人、  
信哉。

鮮本  
齊作

予嘗問泰齊先生集句難易、先生曰、難而易、  
易而難、曰何謂也、曰、集句荆公所難、近世林  
祭酒惟正、崔先生執鈞、皆能之、觀其所集似  
是平日依韻摭詩、諸子百家靡不蒐獵、區分  
類別以待其用耳、我國家文籍鮮少、百家諸

當に大魁と作りて巖廊に登るべしと、後に果して然り。  
金學士黃元詩を作りて好んで夕陽の字を使ふ、金學士富  
儀は以て晚に要路に登るの讖となす、李陶隱の崧山に登  
る詩に飛士危巖一瞬間の句あり、論者は以謂へらく  
躁進の氣ありと、果して大に施さず、益齋の鶴嶺に登る  
詩に、徐く行きて終に亦た山頭に到る」と、論者以謂へら  
く從容寬緩として遠大の氣象有り、果して能く年八  
秩を踰へて五朝に輔相とし、功名富貴にして終始雙びに  
全し、詩は心の發にして氣の充てるなり、古人以謂へら  
く其の詩を讀んで以て其人を知る可しと、信なるかな。

予嘗て泰齊先生に集句の難易を問ふ、先生の曰く、難く  
して易く、易くして難しと、曰く何の謂ひぞや、曰く集句  
は荆公の難しとする所なり、近世林祭酒惟正、崔先生執  
鈞皆な之を能くす、其の集むる所を觀るに、是れ平日韻  
に依りて詩を摭するに似たり、諸子百家蒐獵せずとい  
ふことなし、區分類別して以て其の用を待つのみ、我が  
國家は文籍鮮少にして、百家諸子の行はるゝ數あり、而

子之行有數、而林崔所集、多有不見不聞之人、此甚可疑、且林崔既能集句、何無自作一篇流傳於世、膾炙人口乎、是又可疑、此不亦難而易、易而難乎、予頃見崔先生所著古律數十篇、無一句可傳於後、所謂見面不如聞聲者也。

予嘗愛翁施龍鑿湖詩云、去年曾過賀家湖、今日烟波大半無、惟有一天秋夜月、不隨甲畝入官租、此言鑿湖亦屬官府徵租所不及者、唯月色耳、鄭郊隱題茂豐縣詩、立錐地盡入侯家、唯有溪山屬縣多、童稚不知軍國事、穿雲互答採樵詞、此言豪強兼并貧者無立錐之地、所不兼并者、溪山而已、與翁詩意同、頗含譏諷、措克貧賤者、可以少省矣。

鮮本大作  
太

して林崔の集むる所は、多く見ず聞かざるの人有り、此れ甚だ疑ふべし、且つ林崔は既に集句を能くす、何ぞ自作の一篇、世に流傳して人口に膾炙する無からんや、是れ又た疑ふ可し、此れ亦た難くして易く、易くして難からずやと、予は頃ころ崔先生の著はす所の古律數十篇を見るに、一句の後に傳ふ可き無し、謂はゆる面を見るは聲を聞くに如かざる者なり。

予は嘗て翁施龍の鑿湖の詩を愛す云ふ、去年曾て過ぐ賀家の湖、今日烟波大半無し、惟だ一天秋夜の月あり、田畝に隨つて官租に入らずと、此れ言ふは鑿湖も亦た官府に屬す、徵租の及ばざる所の者は唯だ月色のみと、鄭郊隱の茂豐縣に題する詩に、立錐の地も盡く侯家に入る、唯だ溪山のみ有りて縣に屬する多し、童稚は知らず軍國の事、雲を穿ちて互に答ふ採樵の詞と、此れ言ふは豪強兼併して貧者は立錐の地無し、兼併せざる所の者は溪山のみと、翁の詩と與に同うして頗る譏諷を含む、措克貧賤の者は以て少しく省るべし。

裴晉公方盛、賈浪仙題亭壁云、破卻千家、作一池、不栽桃李、種薔薇、薔薇花謝、秋風起、荆棘滿庭、人始知、雖時議薄之、而頗含譏諷、近有勳臣、第宅窮奢、一朝譴謫、嗣子又不肖、不克堂構、第宅彫謝、開庭閑寂、有客題門壁云、甲第連雲、費幾金、經營渾是百年心、可憐一謫南荒去、庭院無人草自深、據實直書、丁寧諷諭、可爲破宇雕牆者之戒。

予嘗愛李文順詩、披襟快付風來北、隱几從教日向西、言順字穩、以爲佳對、後見韓子蒼詩、曰、朝辭杞國風微北、夜泊寧陵月正南、李詩使字與子蒼甚相似、雖謂之脂合可也、謂之點化亦可也。

古之詩人、托物取況、語多精切、如東坡詠海

裴晉公方に盛なり、賈浪仙、亭壁に題して云ふ、千家を破却して一池を作り、桃李を栽へずして薔薇を種う、薔薇花謝して秋風起る、荆棘滿庭人始めて知ると、時議之を薄んずと雖ども、而も頗る譏諷を含む、近ごろ勳臣あり、第宅者を窮む、一朝譴謫せられ、嗣子又た不肖にして堂構すること克はず、第宅は彫謝して門庭は閑寂なり、客あり門壁に題して云ふ、甲第、雲に連りて幾金を費す、經營渾て是れ百年の心、憐む可し、一たび南荒に謫せられ去りて、庭院人無く、草自から深し」と、據實直書丁寧諷諭、破宇雕牆者の戒と爲すべし。

予嘗て李文順の詩を愛す、襟を披いて快く得たり風の北より來るを、几に隱りて從教あれ日の西に向ふを」と、言順にして字穩なり、以て佳對と爲す、後に韓子蒼の詩を見る、曰く、朝に杞國を辭すれば風は微しく北す、夜寧陵に泊すれば月は正に南すと、李の詩に字を使ふこと子蒼と甚だ相似たり、之を脂合と謂ふと雖も可なり、之を點化と謂ふも亦た可なり。

古の詩人は物に托して況を取る、語は多く精切なり、東

棠云、朱脣得酒暈生臉、翠袖卷紗紅映肉、以婦人譬花也、山谷詠茶靡云、露濕何郎試湯餅、日烘荷令炷爐香、以丈夫譬花也、崔文靖恆詠黑豆云、白眼似嫌憎、客意漆身還有報仇心、以文人烈士譬黑豆、用事奇特、殆不讓二老。

范希文贈釣者詩、江上往來人、盡愛鱸魚美、君看一葉舟、出沒風濤裏、金居士克已賦漁翁詩、天翁尚不賈漁翁、故遣江湖少順風、人世險巇君莫笑、自家還在急流中、語意深遠、末句尤妙、道希文所不道、蔡蒙齋粹然詩曰、世間無地不風波、卽此意。

文丞相天祥重九詩、老來憂患易淒涼、說道悲秋更斷腸、世事不堪逢九夕、休言今日是

坡の海棠を詠するが如き、云ふ、朱脣酒を得て暈は臉に生じ、翠袖紗を卷いて紅は内に映すと、婦人を以て花に譬ふるなり、山谷は茶靡を詠じて云ふ、露は濕めて何郎湯餅を試み、日は烘りて荷令爐香を炷くと、丈夫を以て花に譬ふるなり、崔文靖恆は黑豆を詠じて云ふ、白眼客を憎む意を嫌ふに似たり、漆身還つて仇を報ずる心ありと、文人烈士を以て黑豆に譬ふ、事を用ふること奇特にして、殆んど二老に譲らず。

范希文の釣者に贈る詩に、江上往來の人、盡く鱸魚の美を愛す、君看よ一葉の舟を、出沒す風濤の裏と、金居士克已の漁翁を賦する詩に、天翁は尙ほ漁翁に賈さず、故らに江湖をして順風少なからしむ、人世の險巇君笑ふと莫れ、自家還て急流の中に在りと、語意深遠にして、末句尤も妙なり、希文の道はさる所を道ふ、蔡蒙齋粹然の詩に曰く、世間地として風波ならざるなしと、卽ち此の意なり。

文丞相天祥の重九の詩に、老來憂患淒涼なり易し、說道らく秋を悲しんで更に腸を斷つと、世事堪へず九九に逢ふ、言ふを休めよ今日は是れ重陽とと、高麗の毅宗の

500

鮮本調作  
猶

重陽、高麗毅宗朝、金尙書辛尹、重九有詩、云、  
 葦下風塵起、殺人如亂麻、良辰不可負、白酒  
 泛黃花、蓋庚癸之亂、無可奈何、然白酒黃花  
 聊復自寬、則金老憂世之情、獨或可言、丞相  
 值宋室陽九之厄、又逢九九、世事已去、雖有  
 白酒、又何假自慰哉、其言休說、重陽慷慨憂  
 憤之辭、甚於金老惜哉。

鮮本畫作  
五鮮本蘭作  
薛

趙文忠公浚、相業經綸、若不經意於詩、爲詩  
 橫放傑出、有大人君子之氣象、題安州百祥  
 樓詩、薩水湯湯漾碧虛、隋兵百萬化爲魚、至  
 今留得漁樵話、未滿征夫一晒餘、蓋有饑隋  
 唐之意、造語奇特、大明奉使祝蓋、獻次韻曰、  
 隋兵再舉豈成虛、此地應爲涸轍魚、不見當  
 時唐李、節直揮正節、到扶餘、蓋反趙意、有抑

朝に、金尙書辛尹の重九に詩あり云と、葦下に風塵起り、  
 人を殺すこと亂麻の如し、良辰負く可らず、白酒、黃花を  
 泛ふと、蓋、庚癸の亂、奈何ともす可きなし、然れども白酒  
 黃花、聊か復た自から寬にするときは、則ち金老の世を  
 憂ふるの情、獨或は言ふ可し、丞相は宋室陽九の厄に値  
 ひ、又た九九に逢ふ、世事已に去る、白酒ありと雖も、又た  
 何ぞ自から慰するに暇あらんや、其の重陽を説くを休め  
 よと言ふ、慷慨憂憤の辭、金老より甚だし、惜しいかな。

趙文忠公浚、相業經綸、意を詩に經ざるが若し、詩を爲り  
 て、橫放傑出、大人君子の氣象あり、安州の百祥樓に題す  
 る詩に、薩水は湯々として碧虛を漾はす、隋兵百萬化し  
 て魚と爲る、今に至るまで留め得たり、漁樵の話未だ征  
 夫一晒の餘に満たすと、蓋、隋唐を諷るの意あり、造語奇  
 特なり、大明の奉使祝蓋、獻韻を次して曰く、隋兵の再舉  
 豈に虛と成らんや、此地應に涸轍の魚と爲るべし、見ず  
 や當時唐の李、直ちに征節を揮つて扶餘に到ると、蓋  
 は趙の意に反して、東方を抑ゆるの氣象あり。

## 東方之氣象。

詳本漢作  
沃詳本藏  
作藤  
橋作林  
與作野

531

詩者小技然或有關於世教君子宜有所取  
 之李存吾正言忤逆魄貶長沙詩狂妄真堪  
 棄海邊聖恩天大賜歸田草廬隨意生涯足  
 一片丹心倍昔年陳補闕瑾言事落職將赴  
 浚川詩欲知民水載君舟要盡忠誠誠逸遊  
 諫院未能陳藥石長沙見訪不須愁無孤臣  
 怨謫之辭有警戒規箴之意吳諫議洵觀稼  
 亭詩春耕易耨夏多熟秋斂未盡冬已寒安  
 得茲亭移輦道君王一見此艱難有陳誠稼  
 穡艱難之意崔拙翁雨荷詩胡椒三百斛千  
 載笑其愚如何碧玉斗終日暈明珠有譏諷  
 不廉之意辛政堂藏木橋詩斫斷長橋跨一  
 灘灑霜飛雪帶驚瀾須臾步步臨深意移向

東人詩話卷下

詩は小技なり然れとも或は世教に關することあり、君  
 子は宜しく之を取る所あるべし、李存吾正言は逆魄に忤  
 ひて長沙に貶せらるる詩に、狂妄真に海邊に棄てらるゝに  
 堪へたり、聖恩天大にして田に歸ることを賜ふ、草廬は  
 意に隨つて生涯足る、一片の丹心は昔年に倍す」と、陳補  
 闕瑾事を言ふて職を落され、將に浚川に赴かんとする詩  
 に、民水の君舟を載するを知らんと欲せば、忠誠を盡く  
 して逸遊を誠しむるを要す、諫院は未だ藥石を陳する  
 と能はず、長沙に謫せらるゝも愁ふるを須ひすと、孤臣  
 怨謫の辭無くして警戒規箴の意あり、吳諫議洵の觀稼亭  
 の詩に、春耕易め耨りて夏多く熟す、秋斂未だ盡きず冬  
 已に寒し、安んぞ得ん茲の亭を輦道に移して、君王の一  
 たひ此艱難を見んとを」と、稼穡艱難を陳誠するの意あ  
 り、崔拙翁雨荷の詩に「胡椒三百斛、千載其の愚を笑ふ、如  
 何そ碧玉の斗、終日明珠を量る」と、不廉を譏諷するの意  
 あり、辛政堂藏の木橋の詩に「長橋を斫り斷ちて一灘に  
 跨り、霜を灑き雪を飛ばして驚瀾を帶ふ、須臾にして歩  
 々深きに臨むの意、移して功名官路に向つて看よ」と、自  
 ら警むるの辭あり、李縣監那の子を戒しむる詩に云ふ、

七三

功名官路觀、有自警之辭、李縣監那戒子詩云、朔風號怒雪飄揚、念爾飢寒感嘆長、色必敗身須戒慎、言能害己更商量、狂荒結友終無益、驕慢輕人反有傷、萬事不求忠孝外、一朝名譽達吾王、有父子勸誠之意、是烏可以小技而少之哉。

鄭郊隱守一善郡、春日西郊詩、衛罷乘閑出郭西、僧殘寺古路高低、祭星壇畔春風早、紅杏半開山鳥啼、雅麗清便、雖置之唐詩亦無愧。

延祐間、一齋權侍中、益齋李侍中、同登南州多景樓、益齋曰、昔王荆公、郭功父同登鳳皇臺、次李白詩韻、功父詩名由是大播、今吾二人雖才非王郭、同遊勝地、不可無詩、一齋忻

朔風號怒して雪は飄揚す、爾の飢寒を念ふて感嘆長し、色は必らず身を敗る須らく戒慎すべし、言は能く己を害す更に商量せよ、狂荒友を結ぶ終に益なし、驕慢人を輕んず反つて傷あり、萬事求めず忠孝の外、一朝名譽は吾か王に達せん」と、父子勸誠の意あり、是れ烏んそ小技を以て之を少とす可けんや。

鄭郊隱一善郡に守たり、春日西郊の詩に、衛罷んで閑に乗して郭西を出つ、僧は殘し寺は古りて路高低、祭星壇畔春風早し、紅杏半は開きて小鳥啼くと、雅麗清便、之を唐詩に置くと雖も亦た愧するなし。

延祐の間一齋權侍中、益齋李侍中同じく南州の多景樓に登る、益齋の曰く昔王荆公郭功父同じく鳳皇臺に登りて李白の詩の韻を次す、功父の詩名は是れに由りて大に播す、今吾か二人、才は王郭に非らずと雖も、同じく勝地に遊て、詩無かる可からずと、一齋忻然たり、各古韻を

然、各用古韻賦一篇、益齋詩、楊子津南古閩州、幾番歡笑幾番愁、佞臣謀國魚貪餌、賊吏憂民鳥養羞、風鐸夜喧潮入浦、烟蓑暝立雨、侵樓中流擊楫非吾事、閉望天涯范蠡舟、一齋詩、北固登臨望潤州、一樽難洗古今愁、浪奔江勢猶含怒、國破山顏尙帶羞、淮海風烟連古壘、金焦鐘鼓殷岑樓、憑誰與問興亡事、唯有沙鷗近葉舟、洪武年間、鄭圃隱入朝、又登多景樓有詩、欲展腦中氣、浩然須來甘露寺、樓前瓮城畫角斜陽裏、瓜浦歸帆細雨邊、古護尙留梁日月、高臺宜壓楚山川、登臨半日逢僧話、忘卻東韓路八千、春亭下先生嘗曰、圃老豪邁峻狀、橫放傑出氣象、槩於是詩見之。

東人詩話卷下

用ひて一篇を賦す、益齋の詩に、楊子津の南古閩州、幾番か歡笑して幾番か愁ふ、佞臣國を謀りて魚は餌を貪り、賊吏民を憂ひて鳥は羞を養ふ、風鐸夜喧ふして潮は浦に入り、烟蓑暝に立ちて雨は樓を侵す、中流に楫を撃つは吾か事に非ず、閉に望む天涯范蠡の舟と、一齋の詩に「北固登臨して潤州を望む、一樽洗ひ難し古今の愁、浪は奔りて江勢猶ほ怒りを含み、國は破れて山顔尙ほ羞を帶ぶ、淮海の風烟は古壘に連り、金焦の鐘鼓は岑樓に殷たり、誰に馮りてか與に問はん興亡の事、唯た沙鷗の葉舟に近づく有り」と、洪武年間に鄭圃隱入朝して又た多景樓に登り、詩あり、腦中の氣の浩然たるを展へんと欲せば、須らく甘露寺樓の前に來るへし、瓮城の畫角斜陽の裏、瓜浦の歸帆細雨の邊、古護尙ほ留む梁の日月、高臺宜しく壓すべし楚の山川、登臨半日僧に逢ふて話す、忘卻す東韓の路八千と、春亭の下先生嘗て曰く、圃老、豪邁峻狀、橫放傑出の氣象、槩は是の詩に於て之を見ると。

古人詩有風定花猶落之句、無人能對、荆公對以鳥鳴山更幽、遂爲警聯、牧隱祖其意、作七言一聯云、風定餘花猶自落、雲移小雨未全晴、雖半山老手、亦當縮袖、春亭詩、風定柳絲垂、亦佳。

成齋堂題子陵臺詩、節義功名總不輕、南宮圖像煨丹青、如何只盡風雲將、不畫桐江一客星、此後之詩人、爲光武一大高論處、正是雲臺爭似釣臺高之意、白司成文節詠光武詩、百戰車中講六經、八珍案上憶萋亭、雲臺滿壁丹青濕、七里灘頭訪客星、此讚光武物色嚴光待以故人、崇尚節義之美、古之詩人立意措詞、雖不同、要皆各臻其極、歸之於正而已。

古人の詩に、風定まりて花猶ほ落つゝの句あり、人の能く對する無し、荆公は對するに、鳥鳴きて山更に幽なりを以てし、遂に警聯と爲る、牧隱は其の意を祖とし、七言一聯を作りて云ふ、風定りて餘花猶ほ自から落ち、雲移りて小雨未だ全く晴れずと、半山の老手と雖も亦た當に袖に縮むへし、春亭の詩に、風定りて柳絲垂ると、亦た佳なり。

成齋堂の子陵の臺に題する詩に、節義功名總て輕からず、南宮の圖像は丹青煨す、如何を只た風雲の將を畫いて、畫かず桐江の一客星と、此の後の詩人は、光武の爲めに一大高論する處、正に是れ、雲臺争でか釣臺の高きに似んの意なり、白司成文節の光武を詠する詩に、百戰の車中に六經を講し、八珍の案上に萋亭を憶ふ、雲臺滿壁丹青濕ふ、七里灘頭に客星を訪ふと、此れ光武の嚴光を物色して待つに故人を以てし、節義を崇尚するの美を讚す、古の詩人の意を立て詞を措くこと同しからずと雖も、要するに皆な各其の極に臻りて之を正に歸するのみ。

古人用事、有直用其事、有反其意而用之者、直用其事、人皆能之、反其意而用之、非材料卓越者、自不能到、崔拙翁太公釣周詩、當年把釣釣無釣、意不求魚、況釣周、終遇文王、真偶爾、此言吾爲古人羞、蓋發明釣周非太公之本心、能反古人意、自出機軸、格高律新、客有評泰齋詩者、曰、陶隱寄若齋金九容詩、北望山川阻、南來日月多、泰齋寄金教授久岡詩、南來日月同、春夢、北望山川隔、暮煙、金犯陶隱詩、不諱、何耶、予曰、子以謂泰齋之於王維、孰優、王維唐賢之傑然者也、然喜用古語、如水田飛白鷺、夏木嘯黃鸝、本李嘉祐詩也、維加漠漠陰陰四字、評者以謂王維爲嘉祐點化、精彩百倍、今泰齋詩、未必不爲陶隱

古人の事を用ゆる、直ちに其事を用ゆるあり、其意に反して之を用ゆる者あり、直ちに其事を用ゆるは、人皆能之を能くす、其の意に反して之を用ゆるは、材料卓越の者、非ずんば、自から到る能はず、崔拙翁の太公、周を釣る詩に、當年釣を把つて釣に釣無し、意は魚を求めず、況んや周を釣らんや、終に文王に遇ふは、眞に偶爾のみ、此の言吾れは古人の爲めに羞づと、蓋、周を釣るは太公の本心に非ざることを發明す、能く古人の意に反して、自から機軸を出だす、格高くして律新なり。

客に泰齋の詩を評する者あり、曰く陶隱の若齋の金九容に寄する詩に「北望すれは山川阻たり、南來すれは日月多し」と、泰齋の金教授久岡に寄する詩に「南來すれは日月春夢同し、北望すれは山川暮煙を隔つ」と、金は陶隱の詩を犯して諱まざるは、何ぞやと、予の曰く、子は以爲らく泰齋の王維に於ける孰れか優れる、王維は唐賢の傑然たる者なり、然れとも喜んで古語を用ゆ、水田、白鷺、飛び、夏木、黃鸝、嘯するの如き、本と李嘉祐の詩なり、維は漠々陰々の四字を加ふ、評する者は以謂らく王維は嘉祐の爲めに點化して精彩百倍すと、今泰齋の詩は未だ必らずしも陶隱の爲めに點化せずんばあらざるなりと、客大に笑

點化也客大笑。

王密直伯詩、村家昨夜雨濛濛、竹外桃花忽放紅、醉裡不知雛鬢雪、折簪繁蕊立、東風詞語玲瓏氣、舒閑東坡詩曰、人老簪花不自羞、此老粧點亦妙。

古之閨秀如蔡琰、班婕妤、薛濤之輩、其詞藻工麗、可與文士頡頏、崇寧間、娼家周氏、贈夫婿陳筑詩、夢和殘月過樓西、月過樓西夢已迷、喚起一聲腸斷處、落花枝上鷓鴣啼、又春晴詩、瞥然飛過誰家燕、幕地飛來甚處花、深院日長無箇事、一瓶春水自煎茶、其辭氣婉順、真女子之詩也、吾東方絕無女子學問之事、雖有英質、止治紡績而已、是以婦人之詩罕傳、有士族鄭氏、其弟兄有學者、鄭從傍竊

ふ。

王密直伯の詩に、村家昨夜雨濛々、竹外の桃花忽ち紅を放つ、醉裡は知らず雛鬢の雪、折つて繁蕊を簪にして東風に立つ」と、詞語玲瓏にして氣象舒閑なり、東坡の詩に曰く、人老ひて花を簪にして自から羞ぢず」と、此の老粧點も亦た妙なり。

古の閨秀蔡琰、班婕妤、薛濤の如き、其の詞藻工麗にして文士と頡頏すべし、崇寧の間に娼家周氏の夫婿陳筑に贈る詩に、夢は殘月に和して樓西を過ぎ、月過ぎて樓西夢已に迷ふ、喚起す一聲腸斷ゆる處、落花枝上に鷓鴣啼くと、又た春晴の詩に、瞥然として飛ひ過ぐ誰か家の燕ぞ、幕地に飛ひ來る甚れの處の花ぞ、深院日は長くして、箇事無し、一瓶の春水自から茶を煎ると、其の辭氣婉順にして、真に女子の詩なり、吾か東方絶えて女子學問のことなし、英質ありと雖も、止た紡績を治むるのみ、是を以て婦人の詩の傳はること罕なり、士族鄭氏あり、其の弟兄に學者あり、鄭は傍より竊かに學ぶ、鄭の詩を能くす、一日杜鵑花盛に開く、良人詩を賦せんと請ふ、鄭は立ちとるに就して云ふ、昨夜春風洞房に入り、一張の

學、頗能詩、一日杜鵑花盛開、良人請賦詩、鄭  
 立就云、昨夜春風入洞房、一張雲錦爛紅芳、  
 此花開處聞啼鳥、一詠幽姿一斷腸、雖號能  
 詩者、復豈能過、苟有所教、詞藻之美、豈止是  
 耶、詩云、無非無儀、惟酒食是宜、易云、主中饋  
 貞吉、不心休其蠶織、頗事詩書、況四方皆有  
 性、千里不同風、吾東方女子不學之俗、安知  
 反有益耶。

林西河椿薄遊到里山、州倅送名妓薦寢、及  
 晚逸歸、明朝徑赴筵席、林有詩曰、紅粧待曉  
 帖金鈿、爲被催呼上綺筵、不怕長官嚴號令、  
 謾嗔行客惡因緣、乘樓未作吹簫伴、奔月還  
 爲竊藥仙、寄語青雲賢學士、仁心不用示蒲  
 鞭、近有韓斯文卷奉使到平壤、妓有勝小蠻

雲錦紅芳爛たり、此の花開く處に啼鳥を聞く、一は幽姿  
 を詠して一は腸を斷つと詩を能くすと號する者と雖  
 も復た豈に能く過ぎんや、苟くも教ゆる所あらば詞藻の  
 美は豈に是に止まらんや、詩に云ふ、非も無く儀も無く、  
 惟れ酒食是れ宜しと、易に云ふ中饋を主とる、貞にして  
 吉なりと、必らずしも其の蠶織を休めて、煩しく詩書を  
 事とせず、況んや四方皆な性あり千里風を同じくせず、  
 吾か東方の女子不學の俗安ぞ反つて益あることを知ら  
 んや。

林西河椿薄遊して里山に到る、州倅、名妓を送りて寢を  
 薦む、晚に及んで逸れて歸る、明朝徑ちに筵席に赴く、林  
 詩あり曰く、紅粧曉を待て、命鈿を帖す爲めに催呼せら  
 れて綺筵に上る、怕れず長官の嚴號令、謾に嗔る、行客の  
 惡因緣、樓に乗りて未だ簫を吹くの伴と作らず、月に奔  
 りて還つて藥を竊むの仙と爲る、語を寄す青雲の賢學  
 士、仁心用ひず蒲鞭を示すことをと、韓斯文卷といふもの  
 あり、奉使して平壤に到る、妓に勝小蠻といふ者あり、  
 色藝俱に絶れたり、韓頗る意を屬す、州官蠻をして枕を

鮮本里作  
 星慶作枕  
 晚

者、色藝俱絕、韓頗屬意、州官令鬻薦枕、鬻有他狎客、怒韓醜老、背燈而坐、俄而遁去、韓作詩云、平壤佳兒勝小蠻、年纔二八玉容顏、縱然未遂鴛鴦夢、卻勝高唐夢裏看、比之林詩、不及遠甚、然亦可資梨園捧腹。

辛政堂巖按關東、秩滿將還、別江陵妓小蓮香詩、到老方知離別難、忍看雙淚濕紅顏、白沙汀畔斜陽路、琴與人歸我獨還、鄭雪谷誦梁州客館別情人詩、五更燈影照殘粧、欲話別離先斷腸、落月半庭推戶出、杏花疎影滿衣裳、鄭詩尤清絕、能寫出一時情憶。

禪林詩、其氣象不同、然談論禪旨、隱然於言、意之表者、蓋寡矣、僧洪覺範有一聯云、夜久雪旗啼岳頂、夢回清月上梅花、蓋言聲色俱

薦めしむ、蠻に他の狎客あり、韓の醜老を怒りて、燈に背きて坐す、俄にして遁れ去る、韓は詩を作りて云ふ、平壤の佳兒勝小蠻、年は纔かに二八玉の容顏、縱然ひ未だ鴛鴦の夢を遂げざるも、卻て高唐夢裏の看に勝ると、之を林の詩に比するに及ばざること遠し、然れとも亦た梨園の捧腹に資すべし。

辛政堂巖關東を按ず、秩滿ちて將に還らんとす、江陵の妓小蓮香に別る詩に、老に到りて方に知る離別の難きを、看るに忍びんや雙淚の紅顏を濕すを、白沙汀畔斜陽の路、琴は人と歸り我は獨り還ると、鄭雪谷誦梁州の客館に情人に別る詩に、五更の燈影は殘粧を照す、別離を話せんと欲して先づ腸を斷つ、落月半庭に戸を推して出づれば、杏花の疎影は衣裳に滿つと、鄭の詩は尤も清絶にして能く一時の情憶を寫し出せり。

禪林の詩は其の氣象同じからず、然れとも禪旨を談論して言意の表に隱然たる者は、蓋寡し、宋の僧洪覺範、一聯あり云ふ、夜久ふして雪旗、岳頂に啼き、夢回つて清月、梅花に上ると、蓋し聲色俱に空ふするの妙を言ふなり、

空之妙、千峯雨上人有一聯云、檜老千年色、鐘寒半夜聲、時輩不甚重之、陶隱李先生獨愛之曰、此謂釋氏法案、聲色俱空語也。

詳本眞作  
直  
詳本術作  
撰抱作抱

自古詩人喜相傾軋、春亭嘗自矜一聯云、虛白連天江郡曉、暗黃浮地柳堤春、謂有神助、金真殿久問曰、予亦嘗得句、淡白流青溪、暎草嬌黃漾綠、柳銜烟、風引淡烟、遮碧柳、雲挹清雨、折紅藥、何如所得、春亭默然、金嘗爲僧、春亭戲之曰、賈島文章張子學、蓋島本爲僧、而橫渠晚逃佛老也、金深銜之、後春亭挽太宗詞曰、草合樂天亭下路、雲橫豐壤澗邊樓、金大笑曰、非挽詩、乃亡國詩也、春亭不悅、金遂不大用。

自古詩人好尙不同、宋治平中、沈括呂惠卿

千峯の雨上人一聯あり云と、檜は老ゆ千年の色、鐘は寒し夜半の聲と、時輩、甚だしく之を重んぜず、陶隱李先生は獨り之を愛して曰く、此れ謂はゆる釋氏の法案にして、聲色俱に空ふするの語なりと。

古より詩人は喜んで相傾軋す、春亭嘗て自から一聯に矜る、云く、虛白天に連る江郡の曉、暗黃地に浮ぶ柳堤の春と、謂ふ神助ありと、金真殿久問の曰く、余も亦嘗て句を得たり、淡白は青を洗して、溪は草に映し、嬌黃は綠を淡はして、柳は烟を銜む、風は淡烟を引て、碧柳を遮り、雲は清雨を挹て、紅藥を折ると、得る所に如何んと、春亭默然たり、金は嘗て僧と爲る、春亭之れに戯れて曰く、賈島の文章張子の學と、蓋、島は本僧たり、而して橫渠は晩に佛老に逃るなり、金は深く之を銜む、後に春亭の太宗を挽する詞に曰く、草は合す樂天亭下の路、雲は横はる豐壤澗邊の樓と、金大に笑ふて曰く、挽詩に非ず、乃ち亡國の詩なりと、春亭悦ばず、金遂に大に用ひられず。

古より詩人の好尙は同じからず、宋の治平中に沈括呂惠

王存李常同在館下評詩、沈曰、退之之詩、乃押韻之文、格不近詩、呂曰、詩正當如是、我謂詩人以來、未有如退之者、王存是、沈李常是、呂、四人相詰不決、居正嘗在鑾坡、以黃文獻公澗胡祭酒儼二詩示金、垂崖守溫曰、孰優、金曰、胡優、又以益齋春亭二詩示曰、孰優、金曰、春亭優、又以牧隱雙梅二詩示曰、孰優、金曰、雙梅優、每問皆逆吾心、吾笑曰、胡之於黃、猶宋詩之於唐也、益齋入元朝、與閻復、姚燧、趙子昂諸學士、比肩切磋、名動天下、牧隱中制科、圭齋學士有傳鉢之語、非春亭雙梅二子得養一轡、沉軼而過之耶、何子之取捨落、落如是、垂崖撫吾背大笑曰、子非魚焉、知魚乎、

卿王存、李常は同じく館下なり在りて詩を評す、沈曰、退之の詩は乃ち押韻の文なり、格詩に近からずと、呂曰く、詩は正に當に是の如くなるべしと、我謂ふに詩人以來、未だ退之の如き者あらず、王存は沈を是とし、李常は呂を是とす、四人相詰りて決せず、居正嘗て鑾坡に在り、黃文獻公澗胡祭酒儼の二詩を以て、金垂崖守溫に示して曰く、孰れか優れると、金の曰く胡優れりと、又益齋春亭の二詩を以つて示して曰く孰れか優れると、金の曰く春亭優れりと、又牧隱雙梅の二詩を以て示して曰く孰れか優れると、金の曰く雙梅優れりと、問ふ毎に皆な吾が心に逆ふ、吾れ笑ふて曰く、胡の黃に於けるは猶ほ宋詩の唐に於けるが如し、益齋は元朝に入りて、閻復姚燧趙子昂の諸學士と肩を比べて切磋す、名天下を動かす、牧隱は制科に中り、圭齋は學士、鉢を傳ふるの語あり、春亭雙梅二子の一轡を背むるを得るに非ず、沉んや軼して之に過ぎんや、何ぞ子の取捨落々たる事はの如くなると、垂崖吾が背を撫で、大に笑ふて曰く、子は魚に非ず、焉くんぞ魚を知らんやと、

朴生致安、早有詩聲、屢舉不中、居常怏怏、薄遊寧海郡、聞老妓月下彈琴、聲甚凄咽、有詩云、七寶房中謔舞時、那知白髮老荒陲、無金可買長門賦、有夢空傳錦字詩、珠淚幾霑吳練袖、薰香猶濕越羅衣、夜深窓月紋聲苦、只恨平生無子期、語意雄深、真傑作也、鄭圓齋老妓詩、寒燈孤枕淚無窮、錦帳銀屏昨夢中、以色事人終見棄、莫將執扇怨西風、前輩稱爲精麗、然當避生一頭地。

晏元獻公過維陽大明寺、召王琪同遊池上、時春晚有落花、晏有句云、無可奈何花落去、王應聲曰、似曾相識燕歸來、自此辟置薦館職、遂躋侍從、鄭郊隱早春與諸耆英會城南、聯句、同里子弟多在座、郊隱先唱云、眠牛墪

朴生致安は早く詩聲あり、屢舉げられて中らず、居常怏々たり、寧海郡に薄遊して、老妓の月下に琴を彈するを聞く聲は甚だ凄咽たり、詩あり云ふ、七寶房中謔舞の時、那そ知らん白髮の荒陲に老ひたるを、金の長門の賦を買ふ可き無く、夢の空く錦字の詩を傳ふるあり、珠淚幾たびか霑ほす、吳練の袖、薰香猶ほ濕ふ、越羅の衣、夜は深ふして窓月、絃聲苦しむ、只た恨む平生子規なきを、語意雄深にして、眞の傑作なり、鄭圓齋の老妓の詩に、寒燈孤枕淚窮り無し、錦帳銀屏昨夢の中、色を以て人に事へて終に棄てらる、執扇を將て西風を怨むこと莫れ、と、前輩稱して精麗と爲す、然れども當に生に一頭地を避くべし。

晏元獻公、維陽の大明寺に過ぎりて王琪を召して同じく地上に遊ぶ、時に春晚にして落花あり、晏句あり云ふ、奈何ともす可き無し、花の落ち去ることを、王は聲に應じて曰く、曾て相識るに似て燕歸り來ると、此れより辟して置いて館職に薦めて遂に侍從に躋る、鄭郊隱早春に諸耆英と城南に會して句を聯ぬ、同里の子弟は多く座に在り、郊隱先づ唱へて云ふ、眠牛墪上草初めて綠なり、と、

上草初綠、朴生致安屬對曰、啼鳥枝頭、花政紅、滿座稱賞、詩名自此大振、然終蹇躓、不霑一命、不能如元獻之吹薦、可恨也已。

予嘗讀李相國長篇、豪健峻壯、凌厲振聳、如以赤手搏虎豹、擊龍蛇、可怪可愕、然有蠢猛處、牧隱長篇、變化闔闢、縱橫古今、如江漢沿沿、波瀾自闊、奇怪畢呈、然喜用俗語、學詩者、學牧隱不得、其失也、流於鄙野、學相國不得、其失也、如捕風繫影、無著落處、近世學詩者、例喜法二李、不學唐宋、古人云、作法於涼、其弊猶貪、作法於貪、弊將何救。

予嘗愛晚翠亭趙先生須詠松詩、日斜雲影移、高閣風動潮聲在、半岡後得宋僧詠、老松詩、雲影亂鋪地、濤聲寒在空、趙詩其祖、宋僧

朴生致安屬對して曰く、啼鳥枝頭に花政に紅なり」と、滿坐稱賞す、詩名此れより大に振ふ、然れども終に蹇躓して一命にも霑はず、元獻の吹薦の如くなる能はざるは恨む可きのみ。

予嘗て李相國の長篇を讀むに、豪健峻壯、凌厲振聳して、赤手を以て虎豹を搏し、龍蛇を撃ふが如し、怪しむ可く愕く可し、然れども、蠢猛の處あり、牧隱の長篇は、變化闔闢、古今に縱橫す、江漢の沿々として波瀾自から瀾く、奇怪畢く呈するが如し、然れども喜んで俗語を用ゆ、詩を學ぶ者は、牧隱を學びて、得ざれば、其失や、鄙野に流る、相國を學びて、得ざれば、其失や、風を捕へ影を繫ぐが如くにして、著落の處無からん、近世の詩を學ぶ者は、例して二李に法るを喜んで、唐宋を學ばず、古人の云ふ、法を涼に作す、其の弊は猶ほ貪る、法を貪に作さば、弊將た何ぞ救はんと。

予嘗て晚翠亭趙先生須の松を詠する詩の、日斜にして雲影は高閣に移り、風動いて潮聲は半岡に在り」といふを愛す、後に宋僧の老松を詠する詩を得たり、雲影亂れて地に鋪き、濤聲寒くして空に在り」と、趙の詩は其れ宋僧

乎、趙先生嘗詠秋穫詩、有磨鎌似新月之句、語予曰、韓退之詩云、新月似磨鎌、吾用此語、而反其意、此謂翻案法、學詩者不可不知。

國初梨園妓雪梅善唱樂詞、趙文忠公俊初入相、諸國老設讌西郊、以慰酒未半、命召文忠赴闕、諸國老共進一爵、令梅唱樂詞、乃唱西園未能看花會、又被宣招宴上陽之詞、一座嘉嘆、河文忠公崑巡察西鄙、設帳都門外、簪纓滿座、又唱勸君更盡一盃酒、西出陽關無故人之詞、一座稱譽、庚午年間、世廟巡幸西門道、監司曹公孝求予樂詞、以予才拙不能塞命、但書李平章之氏、大同江水琉璃碧、長樂宮花錦繡紅、玉輦一遊非好事、太平風月與民同之詞、示之、昌寧喜曰、李平章先得

鮮本感作

鮮本午作

東人詩話卷下

を祖とするか、趙先生嘗て秋穫を詠する詩に、磨鎌は新月に似たり」の句あり、予に語りて曰く、韓退之の詩に云ふ、新月は磨鎌に似たり」と、吾れ此の語を用ひて而して其の意を反す、此を翻案法と謂ふ、詩を學ぶ者は知らざるべからずと。

國初梨園の妓雪梅は善く樂詞を唱ふ、趙文忠公俊初めて入りて相たり、諸國老は讌を西郊に設けて、以つて慰す、酒未だ半ならざるに、命じて文忠を召して闕に赴かしむ、諸國老は共に一爵を進む、梅をして樂詞を唱へしむ、乃ち西園未だ花を看るの會を罷めず、又た宣招を破りて上陽に宴すの詞を唱ふ、一座嘉嘆す、河文忠公崑、西鄙を巡察するとき、帳を都門の外に設く、簪纓滿坐、又た君に勸む更に一盃の酒を盡せ、西陽關を出づれば故人無からん、の詞を唱ふ、一座稱譽す、庚午年間に、世廟西門道に巡幸す、監司曹公孝は、予の樂詞を求む、予の才の拙なるを以て命を塞くこと能はず、但だ李平章之氏、大同江水琉璃碧に、長樂宮の花、錦繡紅なり、玉輦一遊故事に非ず、太平の風月は民と同じからず、の詞を書して之に示す、昌寧喜んで曰く、李平章先づ我が心を千萬載の上に得たりと。

我心於千百載之上矣。

騷興清心樓古今題詠者多辛巳日本東征  
 天使詩云江 徹見水中水樓迴可觀山外  
 山世稱美句以予謾見山外山意好其曰水  
 中水則前輩無此等語語頗牽強牧隱云捍  
 水功高馬巖石浮天勢大龍門山語峻壯柳  
 巷云山中苦別懶殘子郡裏來逢元次山語  
 典實日本釋梵給云清磬月高知遠寺長林  
 雲盡辨遙山語清絕圃隱鄭文忠公一絕云  
 烟雨空濛滿一江樓中宿客夜開窓明朝上  
 馬衝泥去回首滄波白鳥雙河東鄭相國常  
 云諸詩固好終不若此詩閑遠有味。  
 朴惠肅信少有時譽按江原愛江陵妓紅粧  
 情頗珍重秩滿將還府尹趙石礪云伋註云

騷興の清心樓は古今題詠する者多し辛巳日本東征天使  
 の詩に云ふ江清くして徹見す水中の水樓迴にして觀  
 るべし山外の山と世に美句と稱す予の謾見を以てす  
 れば山外の山は意好し其の水中の水と曰ふは則ち前  
 輩に此等の語なし語頗る牽強なり牧隱の云ふ水を捍  
 ぎて功は高し馬巖石天を浮べて勢は大なり龍門山と  
 語峻壯なり柳巷の云ふ山中別を苦しむ懶殘子郡裏來  
 り逢ふ元次山と語典實なり日本の釋梵畧の云ふ清磬  
 月は高くして遠寺を知り長林雲は盡きて遙山を辨す  
 と語清絶なり圃隱の鄭文忠公の一絶に云ふ烟雨空濛  
 として一江に滿つ樓中の宿客夜窓を開く明朝馬に上  
 りて泥を衝いて去らば首を回らさん滄波白鳥の雙と  
 河東の鄭相國常の云ふ諸詩は固に好し終に此の詩の  
 閑遠にして味あるに若かずと。

朴惠肅信少ふして時譽あり江原を按るととき江陵の  
 妓紅粧を愛し情頗る珍重なり秩滿ちて將に還らんと  
 す府尹趙石礪云ふ伋註て云ふ粧己に仙去すと朴悼念

粧已仙去、朴悼念思想、頗不自聊、府有鏡浦臺、形勝爲關東第一、尹邀廉使出遊、密令紅粧、靚飾豔服、別具畫船、選一老官人鬚眉皓白、衣冠褻偉、狀類處容者、載紅粧、又揭彩額、顯詩其上、曰、新羅聖代老安詳、千載風流尙未忘、聞說使華遊鏡浦、蘭船不忍載紅粧、徐擊楫入浦口、徘徊洲渚間、絲管清圓、如在空中、尹語廉使、曰、此地有古仙遺跡、山頂有茶竈、距此數十里、有寒松亭、亭亦有四仙碑、至今仙曹神侶、往來其間、花朝月夕、人或見之、但可望不可近也、朴曰、山川如此、風景殊異、適無情況、涕淚盈睫、俄而舟行、順風一瞥、真前老人、槩船相棹、形貌詭奇、船中紅妓、舞舞、綽約飄飄、朴駭愕曰、必神仙中人、熟視乃

## 東人詩話卷下

して頗る自から聊んせず、府に鏡浦臺あり、形勝は關東の第一爲り、尹廉使を邀へて出で、遊ぶ、密かに紅粧をして、靚飾豔服せしめ、別に畫船を具へて、一の老官人の鬚眉皓白、衣冠褻偉にして、狀處容に類する者を選んで紅粧を載せ、又た彩額を掲げ、詩を其の上に題して曰く、「新羅聖代の老安詳、千載の風流尙ほ未だ忘れず、聞説らく使華鏡浦に遊ぶと、蘭舟に紅粧を載するに忍びず」と、徐々として楫を撃ちて浦口に入り、洲渚の間に徘徊す、絲管清圓空中に在るが如し、尹廉使に語けて曰く、此地は古仙の遺跡あり、山頂に茶竈あり、之れを距ること數十里にして、寒松亭あり、亭に亦た四仙の碑あり、今に至るまで仙曹神侶、其の間に往來す、花朝月夕に、人或は之を見る、但だ望むべくして近づく可からず、朴の曰く、山川此の如くなれども、風景は殊に異なり、適に情況無しと、涕淚、睫に盈つ、俄にして舟行く、順風一瞥、真前の老人船を繼して相棹さす、形貌詭奇なり、船中の紅妓、歌舞綽約して、飄飄たり、朴駭き愕きて曰く、必らず神仙中の人ならん、熟視すれば、乃ち紅粧なり、一座堂を抵ちて大に笑ひ、權を極めて罷む、後に朴關東に寄する詩に曰く、「少年節を持して關東を按す、鏡浦の清遊は夢中に入る

紅粧也、一座抵掌大笑極懽而罷、後朴寄關東詩曰、少年持節按關東、鏡浦清遊入夢中、臺下蘭舟思又泛、卻嫌紅粉笑衰翁。

夜半鐘之語、起於張繼姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船之句、近有崔司城脩題驪州清心樓云、雙寺鐘聲半夜鳴、廣陵歸客夢初驚、若教張繼曾過此、不獨寒山擅後名、予常與一二文士與詩僧會、坐清心樓、讀崔詩、曰、古人砒張繼詩云、僧家無夜半之鐘、崔詩亦踵其失、何耶、有一僧奮然曰、自古文士不識僧家之事、今設齋之寺、徹夜擊小鐘、何但夜半而已乎、滿座大笑。

權止齋、閔判司厚生、崔弼善文孫、弟孝孫、讀於衿川道安寺澄上人方丈、四人相繼中

臺下の蘭舟又た泛ばんことを思ふ、卻て嫌ふ紅粉の衰翁を笑はんことをと。

夜半鐘の語は張繼の「姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘聲は客船に到る」の句に起る、近ごろ崔司城修と云ふもの有り、驪州の清心樓に題して云ふ、雙寺の鐘聲は半夜に鳴り、廣陵の歸客夢初めて驚く、若し張繼をして會て此に過ぎらしめば、獨り寒山をして後名を擅にせしめずと、予常に一二の文士と詩僧と會して清心樓に坐し、崔の詩を讀んで曰く、古人、張繼の詩を砒して云ふ、僧家に夜半の鐘なしと、崔の詩も亦た其の失を踵くは何ぞやと、一僧あり奮然として曰く、古より文士は僧家の事を知らず、今、齋を設くるの寺は、徹夜小鐘を擊つ、何ぞ但だ夜半のみならんやと、滿座大に笑ふ。

權止齋、閔判司厚生、崔弼善文孫、弟孝孫は、書を衿川道安寺澄上人の方丈に讀む、四人相繼て科に中る、止齋の澄師に寄する詩に云ふ、故人は猶ほ著く舊麻衣、會て笑

鮮本  
砒作

鮮本  
可作

科、止齋寄澄師詩云、故人猶著舊麻衣、曾笑龍門約已違、三聖山靈應自慶、四枝丹桂映朝暉、蓋用呂丞相正故事、呂少與三人讀書龍門山、相誓曰、不作狀元、不復舉、呂擢狀元、其一擢甲科、其一落第、遂不復舉、後呂致仕還鄉、寄詩曰、故人猶著舊麻衣。

金政堂得培題金海客館云、來管益城二十春、當時父老半成塵、自從書記爲元帥、屈指如予有幾人、田政堂祿生題合浦云、此地來遊僅十春、豈圖來鎮有今晨、壁間拙字知予否、曾是當年下筆人、兩公皆文章鉅手、兼總戎兵、其橫槩哦詩、氣象大異於雕篆酸寒者之所爲也、鄭學士地、早杖節鉞、題錦江樓船云、隋家賀若弼、晉室祖將軍、杖劍過江水、歸

ふ龍門の約已に違ふことを、三聖山靈應に自から慶すべし、四枝の丹桂は朝暉に映すと、蓋、呂丞相蒙正の故事を用ゆ、呂少きとき三人と誓を龍門山に讀む、相ひ誓つて曰く、狀元と作らずんば復た舉せられずと、呂は狀元に擢んでられ、其の一は甲科に擢んでられ、其の一は落第して遂に復た舉せられず、後に呂は致仕して郷に還り、詩を寄せて曰く、故人は猶ほ著く舊麻衣と。

金政堂得培、金海の客館に題して云ふ、來りて益城を管す二十春、當時の父老半は塵と成る、書記、元帥と爲りてより、指を屈すれば予の如き幾人か有ると、田政堂祿生、合浦に題して云ふ、此の地來り遊ぶ僅かに十春、豈に圖らんや來鎮に今晨あらんとは、壁間の拙字予を知るや否や、曾是れ當年筆を下すの人と、兩公は皆な文章の鉅手にして兼ねて、戎兵を總ふ、其の槩を横たへ、詩を哦するの氣象は、大に彫篆酸寒者の爲す所に異なり、鄭學士地、早に節鉞を杖つきて、錦江の樓船に題し云ふ、隋家の賀若弼、晉室の祖將軍、杖つきて江水を過ぐ、歸り來りて雲を掃はんことを誓ふと、其の詞語豪壯傑特大丈

來嘗掃雲其詞語豪壯傑特大丈夫之立語固不當如是乎。

予嘗愛蘇東坡與王慶源詩云青衫半作霜葉枯遇民如兒吏如奴近有文士與南州者饒席有主家姆抱小兒者金節齋忘其諱贈詩曰櫛櫛孫兒骨格奇平生莫恨子生遲愛情必是終無已南去臨民念在茲其超邁如此。

凡詩無意而作或有時而譏若先自譏不可也上舍崔倬卓犖不群嘗作詩云春軒之後菊軒翁壽到稀年兩頰紅一事只應方寸愧譏將樛櫛位三公或問曰是何詩曰我享壽七十位至三公當如是作元日訪河狀元緯地詩云金輪洞口昔同遊屈指如今二十秋

夫の立語は固に是の如くなるべからざらんや。

予嘗て蘇東坡の王慶源に與ふる詩を愛す云ふ青衫半は霜葉の枯るゝことを作す民を遇する兒の如く吏を奴の如くにすと近ごろ文士の南州を典る者あり饒席に主家の姆の小兒を抱く者あり金節齋は其の諱を忘れ詩を贈りて曰く櫛櫛の孫兒は骨格奇なり平生恨むこと莫れ子の生るゝ遇きを愛情は必らず是れ終に已むこと無し南に去つて民に臨むとも念は茲に在りと其の超邁なる此の如し。

凡そ詩は意なくして作るも或は時ありて譏す若し先づ自から譏するは不可なり上舍の崔倬は卓犖にして群せず嘗て詩を作りて云ふ春軒の後菊軒翁壽は稀年に到りて兩頰紅なり一事只應に方寸に愧づべし譏に樛櫛を將て三公に位すと或ひと問ふて曰くは何れの詩ぞと曰く我れ壽を享くること七十位は三公に至ること當に是の作の如くなるべしと元日河狀元緯地を訪ふ詩に云ふ金輪洞口昔同遊屈指如今二十秋

鮮本諱作

鮮本諱作

鮮本也作

今日訪君應有意、欲將詩句換龍頭、仍語人曰、此俾他日狀元之諱、聞者笑之、俾竟不第、不得一級、早歿、詩可先意於讖乎、李領僉公遂落第詩、那知廣寒桂、尙有一枝餘、後果大魁、金貞肅仁鏡、謫守尙州詩、何時鈴閣登、黃關太守行爲宰相行、後入廊廟、詩竟有讖、是出於偶然耳、安有詩先自諱、如俾者乎、

丁謂詩、天門九重開、終當掉臂入、王元之曰、入公門、鞠躬如也、天門豈可掉臂入也、此人終不忠、王安石明妃曲、漢恩自淺、胡自深、人生得意無南北、論者以謂有叛、相近有儒士姓李者、嘗在遷謫押廳、輿清心樓山字韻、云龍馭已飛鼎湖水、子陵高臥富春山、時文廟上賓、李以光武故人子陵自比、且對龍馭、見

東人詩話卷下

十秋今日君を訪ふ應に意あるべし、詩句を將て龍頭に換へんと欲すと、仍て人に語つて曰く、此れ俾他日狀元の諱と聞く者之を笑ふ、俾竟に第せず、一級を得ずして早く歿す、詩は意を讖に先んずべけんや、李領僉公遂落第の詩に「那ぞ知らん廣寒の桂尙ほ一枝の餘す有らんとは」と、後に果して大魁たり、金貞肅仁鏡、謫せられて尙州に守たる詩に「何れの時か鈴閣黃閣に登り、大守の行は宰相の行と爲らんと」と、後に廊廟に入りて、詩は竟に讖あり是れ偶然に出づるのみ、安くんぞ詩の先づ自から諱むこと俾の如きものまらんや、

丁謂の詩に「天門九重開く、終に當に臂を掉ふて入るべし」と、王元之の曰く、公門に入るときは、鞠躬如たり、天門は豈に臂を掉て入る可けんや、此の人は終に不忠ならんと、王安石の明妃の曲に「漢恩は自から淺く、胡は自から深し、人生意を得れば南北なし」と論ずる者は、以謂へらく叛相ありと、近ごろ儒士に李を姓とする者あり、嘗て遷謫に在りて、輿清心樓山の字の韻を押して云ふ、龍馭已に飛ぶ鼎湖水、子陵高臥富春山と、時に文廟上賓す、李は光武の故人子陵を以て自から比し、且つ龍馭に對す、見る者は其の逆心あることを知る、未だ幾ばくな

者知其有逆心未幾果誅。

丙戌登俊試、金垂崖守温爲狀元、姜晉山希孟爲榜眼、居正忝爲探花、嘗寄晉山詩云、登俊科中榜眼賢、黑頭勳業照凌烟、探花三月遲晚、最好芳菲二月天、蓋用金貞肅仁鏡故事、高麗明王時、仁鏡以詞賦自負、常擬龍頭、金諫議君綏擢狀元、貞肅居亞元、位至卿相、尙怏怏、甥皇甫狀元瓊家設龍頭會、寄詩云、聞道君家宴貴賓、桂林渾是一枝春、欲參高會慚非分、卻恨當年第二人、金諫議次韻、莫將金榜較嘉賓、入律花枝次第春、正月尙寒、三月暖、芳菲二月最宜人、蓋以正月比狀頭、二月亞元、三月探花也。

金翰林係熙、以親老、休官歸金海郡、集賢諸

あらずして果して誅せらる。

丙戌登俊試に、金垂崖守温は狀元たり、姜晉山希孟は榜眼たり、居正忝く探花と爲る、嘗て晉山に寄する詩に、登俊科中榜眼賢なり、黑頭の勳業凌烟を照らす、探花三月遲晚を嗟く、最も好し芳菲二月の天と、蓋、金貞肅仁鏡の故事を用ゆ、高麗の明王の時に、仁鏡は詞賦を以て自負す、常に龍頭に擬す、金諫議君綏は狀元に擢でらる、貞肅は亞元に居り位は卿相に至り、尙ほ怏々たり、甥皇甫狀元、瓊の家に龍頭會を設く、詩を寄せて云ふ、聞くならく君が家に貴賓を宴すと、桂林渾て是れ一枝の春、高會に參せんと欲するも非分を慚づ、却て恨む當年第二人と、金諫議頭を次す、金榜を將て嘉賓を較ぶること莫れ、律に入るの花枝は次第の春、正月は尙ほ寒ふして三月は暖なり、芳菲二月は最も人に宜しと、蓋、正月を以て狀元頭に比し、二月は亞元、三月は探花なり。

金翰林係熙は親の老ひたるを以て官を休めて金海郡に

學士詩以送之。崔文靖恆詩曰、銀海幾寒金  
海望、青雲難奪白雲思、語奇巧、李修撰永瑞  
詩曰、金榜玉堂早策勳、平看脚底起青雲、離  
親仕宦知多少、江上秋風獨送君、後句言遠  
而意深、離親仕宦者知小愧矣。

關東佳麗甲天下、且政簡民醇無案牘之勞、  
自古按使節者、往往以風流自娛、咸東原傳  
霖與情人別、方林驛、臨歧有戀戀之懷、班馬  
踟躕、道傍有石、題曰、汝石何時石、吾懷今世  
人、不知離別苦、獨立幾經春、金惕若齋詩曰、  
瀟灑江山共我清、樓臺到處管絃聲、若非細  
馬馱紅粉、誰謂三韓更太平、近有攬轡者、秩  
滿將還、與情人泣、別於竹西樓、或有詩曰、細  
馬馱紅傳鉢在、莫嫌司馬濕青衫。

歸る、集賢の諸學士、詩以て之を送る、崔文靖恆の詩に曰く、銀海は幾んど寒し、金海の望、青雲奪ひ難し、白雲の思と、語は奇巧なり、李修撰永瑞の詩に曰く、金榜玉堂早く勳を策す、平看す脚底に青雲を起すを、親を離れて仕宦す知る多少ぞ、江上の秋風獨り君を送る」と、後句は言遠くして意深し、親を離れて仕宦する者は、小愧するを知らん。

關東の佳麗は天下に甲たり、且つ政は簡に民は醇にして、案牘の勞なし、古より使節を按ずる者は、往々に風流を以て自から娛しむ、咸東原傳霖は情人と方林驛に別る、岐に臨んで戀々の懷あり、班馬踟躕す道傍に石あり、題して曰く、汝石何れの時の石ぞ、吾人は今世の人、知らず離別の苦を、獨立して幾たびか春を経たる」と、金惕若齋の詩に曰く、瀟灑たる江山は我と共に清し、樓臺到る處管絃の聲、若し細馬の紅粉を馱するに非ずんば、誰か言はん三韓は更に太平と、近ごろ轡を攬る者あり、秩滿ちて將に還らんとす、情人と泣いて竹西樓に別る、或ひと詩あり曰く、細馬紅を馱して傳鉢在り、嫌ふこと莫れ、司馬の青衫を濕ぼすを」と。

朴費成忠佐遊昇平郡、與妓碧玉有情好、按節重遊、玉已仙矣、朴作悼詩云、九十浦口潮欲生、碧松紅樹去年程、如今謾擁旌旗過、樓上無人望此行、正統丁巳吉昌權相擊、上黨韓相明澮、金海李公文炯、數十同志遊西原、妓一枝紅、吉昌所情鍾、銀臺月、金海意中人也、越數載、吉昌金海重遊西原、一枝紅已仙矣、金海述吉昌意、題一絕云、憶昔來遊戊午年、一枝紅豔惱儒仙、今日重遊還有感、可憐孤塚隔寒烟、又十九年、金海以左承旨、乘傳歷西原、銀臺月尙無恙、隻雞斗酒來叙數、勳極懼而罷、吉昌時爲相、問金海之言、見剛中、說不置、又語及剛中少時事、剛中少與西原妓鳳皇池、相別于州北栗峯驛、樓下小池荷

朴費成忠佐、昇平郡に遊んで、妓碧玉と情好あり、節を按じて重ねて遊べば、玉は已に仙せり、朴、悼詩を作りて云ふ、九十の浦口に潮生せんと欲す、碧松紅樹去年の程、如今謾に旌旗を擁して過ぐれば、樓上人の此の行を望むなしと、正統丁巳に志昌の權相擊、上黨の韓相明澮、金海の李文文炯、數十の同志西原に遊ぶ、妓一枝紅は吉昌の情の鍾まる所にして、銀臺月は金海の意中の人なり、數載を越えて吉昌、金海は重ねて西原に遊ぶ、一枝紅は已に仙せり、金海は吉昌の意を述べて、一絶を題して云ふ、憶昔來り遊ぶ、戊午の年、一枝の紅豔は儒仙を惱ます、今日重ねて遊んで還つて感あり、憐むべし、孤塚の寒烟を隔つるを、又十九年にして、金海は左承旨を以て傳に乗じて西原を歴たり、銀臺月は尙ほ恙なし、隻雞斗酒來りて、數勳を叙して、懼を極めて罷む、吉昌時に相たり、金海の言を問ふて、剛中を見て、記きて置かず、又た語、剛中の少時の事に及ぶ、剛中は少きとき西原の妓鳳皇池と州の北栗峯驛に相ひ別る、樓の下小池に荷花盛んに開く、少年落魄覺えず、願倒す、後七年にして重ねて西原に到れば、月に奔りて已に兩年なり、遂に一絶を驛樓に題して云ふ、隣夢初めて胎んで、梅は已に仁なり、江南の行客は動

花盛開、少年落魄、不覺顛倒、後七年、重到西原、奔月已兩年矣、遂題一絕于驛樓云、隴麥初胎、梅已仁、江南行客、動傷神、小塘依舊、荷花淨、不見當時、勸酒人、吉昌笑曰、西原本佳麗之地、今金海馳傳入州、觀者欄街、榮耀極矣、吾與子雖到西原、正如詩之所恨、欲如金海得耶、昔人有謾擁旌旗樓上、無人之句、正吾與子之謂矣、相與抵掌大笑。

もすれば神を傷ましむ、小塘は舊に依りて荷花淨し、見ず當時酒を勸むる人」と、吉昌笑ふて曰く、西原は本と佳麗の地なり、今金海は傳を馳せて州に入る、觀る者欄街榮耀極まれり、吾れ子と西原に到ると雖も正に詩の恨む所の如し、金海の如くならんと欲すとも得んや、昔人は謾に旌旗を擁して樓上人無し、の句あり、正に吾と子との謂なりと、相與に掌を抵つて大に笑ふ。

東人詩話卷下  
終

日本詩話叢書

## 東人詩話後序

詩三百篇古也，皆經聖人刪定，宜若無事於論議矣。而門弟子之賢如卜商者，從而序之，故能發明聖人之微旨，而詩道昌矣。後世之詩衆體竝興，其變無窮，既不見聖人之刪，又無賢者之序，無怪乎六義之不復也。所賴大雅君子，世不乏人，而始有詩評，如總龜叢話玉屑諸編是已。吾東方詩學始於三國，盛於高麗，極於聖朝。其間斧藻裁品者，若鄭中丞嗣文、李大諫眉叟、金文正台鉉、崔平章樹德、李益齋仲思，皆有裒集之勤，然不無疎略細瑣之病。吾恩門達城徐相國嘗手採東人諸作，著詩話二篇，合諸家之精英，逐節雌黃，鉞砭膏肓，如麻姑爬癢，得味外之味，而文簡旨遠，言暢意該，自有詩話以來，未有如此之精切者也。學者苟能因是而究夫詩之精義，去其類而勉其粹，自可泝漢魏，追騷雅，眞入風雅之闡域矣。雖然，論畫者可以形似。

而捧心者難言聞絃者可以數知而至言者難說詩之出於聲色意  
 料之內者可以形之於文字之間傳之於言語之中出於形色意料  
 之表者只可心會不可言傳徒知寄於文字者止是而求之文字之  
 外而心會之則非唯失詩之微旨亦且失是編之意矣此不可不知  
 也龍集丁酉夏四月仲澣通訓大夫行藝文館副應教知製教兼經  
 筵侍講官春秋館編修官崔淑精國華序。

## 書東人詩話後

吾東方自殷、太師、譟、麥、秀以來，歷三國、高麗氏，至于今，作者不啻數百家。其評品、觀、破、閑、稗、說、諸書，可知也。今達城徐先生，生於東國太平之年，家傳陽村詩禮之訓，獨步詩壇，名動中原，迺於弘化之餘，手撰東人詩話二篇，其記聞之博，識見之高，真所謂在堂上而辨曲直，詩道之集大成者也。僕一日與姜晉山會先生于承文院，見所謂詩話，吾二人圭復不已，相謂曰：斯文之寶，當與萬世共之，不可以秘藏於文房而已也。遂令鏗梓于蜜陽府，傳之不朽。云：府使姓朴，諱時衡，丙子科榜眼也。時成化紀元之十三年後二月初吉，南原梁誠之純夫謹跋。

明曆乙未歲，朝鮮信使來朝，學士李明彬隨焉。到洛，留于本國寺。有日矣，膳所城主本多總使君承命爲之館伴。時先考新辭久留米教授，閒居于洛之城西，使君乃煩以文書之事，得接三使及明彬等，邂逅鄭重贈酬不貲，歸棹之日，明彬出一奇書，曰：此吾邦之詩評，而先輩徐剛中氏之所著也。名曰東人詩話，雖不足播之大邦，而吾與子相識之贈也。幸不棄捐措諸几案之間，時得遊目，則別後亦猶見我乎。遂付先考而去。爾來二十八年，先考既沒，又五年而得之遺篇之中，追憶往事，感泣不止。嘗聞明彬來朝，歲垂四十，推以筭之，則至于今年，殆七十歲，其存沒亦不可知矣。異時此書不幸而若蠹蝕煨燼之厄，則人與物俱亡，而今之追憶感泣者，又以滋甚，其無憑也哉。乃爲按讎訓點，出而刊之，梨以要其大年已先考菊池氏名勻，字東勻，號耕齋，嘗以字行李明彬，字文哉，則石湖也。

貞享丁卯四月望日

鵬溟原搏九萬甫識

此段從辭  
本抄載

四佳徐先生東人詩話屢經兵燹存者無幾懼終泯沒重刊以壽其傳第恨原本多有差舛處間或以舊所聞見者頗加抹改而蒙學蔑識未盡釐正姑俟後之君子云。

崇禎己卯陽月下澣

廣陵後人李必榮識